

少熱帯國達と一緒になつて騒がせる事をさせなかつた。それといふのは、かうした戯談の後はいつもきまつてもう一人の人間に對するあてこすりになるので、決して名前は出されはしなかつたが、チャックはどれだけそれに身を震はした事だらう。いはゞ一本の糸が人々の心の中で、この出来そこなひの女たらしの滑稽な大人物と、チャックが誰よりも敬ひ愛してゐる他の一人を繋いでゐたのだ。

192

何でも、ド・パランシー公國といふのがしきりに話の中に出て来る。

『ところで其の公國は一體何處にするのだい、ツレーヌか、それともコンゴか？』
ラバサンドルが叫んだ。

『いづれにしても、立派に持ちこたへなくちや駄目さ。』

ドクツール・ヒルスが眼をばちく／＼させながら答へた。

『ブラヴォー！ ブラヴォー！ 持ちこたへるはいゝや！』
さうしてから人々は、横腹を抱へて笑つた。

それから又印度軍の參謀長の有名なロード・ビームバックの話も出た。

『俺はよく知つてゐるよ』ヒルス醫師が言つた『ヤラント シ ババの聯隊を指揮したのださ。』

『ブラヴォー！ トラント シ ババ！』

チャックはうなだれてバンとお皿を眺めてゐた。かうした皮肉を浴びせられながら泣く事さへもようしなかつた。しかし彼の聞いてゐる言葉の意味をしつかり掴むではなしに、顔といふ顔のより皮肉、彼等の笑ひのより嘲弄的な何物か、人々が彼に加へやうとしてゐる迫害の警告をしてゐたのだ。

するとマダム・モロンヴァルがやさしく口を出す。

『チャック、一寸臺所を見に行つていらつしやい。』

それから他の者に小聲で叱言を言ふ。

『なあに！ 解るものか！』

ラバサンドルが答へる。

なるほど哀れな少年にはすつかり解らなかつたが、彼の智慧は此の最初の悲しみによつて拓かれ、彼をとりまいてゐるところの憎惡にみちた侮蔑の理由を探索する事に勞れた。そして此の食

193

卓の會話からこぼれて落ちた曖昧な言葉のいくつかは、恰かも何かの疑惑、何かの汚點かのやうにその心から消えなかつた。

彼は久しい前から自分に父親の無い事、自分のでない姓を名乗つてゐる事、母親に良人が無い事を知つてゐた。

そして夫等の事が彼の悲しい思索の出發點をなしたのだ。彼の神経は過敏になつた。

ある日のつほのサイドが彼の事を『ココットの子供』と呼んだ時、以前のやうに笑ふかはりにぶる／＼震へる小さな手で掴みか、つて、もう少しで頭をしめさうにした。サイドの呻き聲を聞いて、モロンヴァルが駆けつけて來た。そしてヂムナスに這入つてから、その時がはじめて彼は鞭と近づきになつたのだ。

この日から魅力はとぎれた。混血兒は彼に罰をやる事を激しい勢でつゞけていつた。白い膚に鞭打つのが彼にとつてどんなに愉快だつたらう！今はもうチャックの運命がマヅウの夫と等しくなるのは、只臺所に遣られるといふ事が欠けてゐるだけだ。しかし此のヂムナスの革命に際して少年王の境遇が少しでもよくなつたなど、早合點してはいけぬ。それどころか何時にもま

して、水泡に歸したあらゆる野心のとばかりを受けるのは彼だつた。ラバサンドルからは續げ様に足蹴のお見舞ひを受ける。ドクツール・ヒルスは絶えず耳を引張る。『棒の親爺』は雑誌の的外れをきつく彼に當り散らした。

『決して満足ない、決して満足ない。』

教師等の暴虐な酷使に責めさいなまれながら、不合せな少黒奴はこの言葉を繰り返した。その失望に加ふるに、新しい季節、心をそ、る熱と太陽の立遣り、なかでもまざ／＼しい生きた思ひ出、離れてゐる故國のあらゆる回想を彼の心にもたらしたあの動物園の訪問が原因となつた異様なホームシックが起つたのだつた。

最初彼の流涕の憂鬱は、酷使と打擲に對する強情な沈黙と、無抵抗なあきらめのうちに見られた。やがてマヅウの顔には一つの決心、異常な亢奮が現はれた。まるで、家の中庭の中をさまざまな用事で駆けめぐりながら、誰も知らない遠い目的地に向つて進んで行くやうだつた。夫は絶えず眼を据えて、ちやうど誰か、彼の前を歩きながら、その名を呼んでゐるかのやうに前方ばかり追ふてゐる事によつて知られた。

ある晩黒奴少年が寝る支度をしてゐる時に、チャックは彼が妙な言葉でしづかに囁つてゐるのを聞きつけた。

「歌つてゐるの、マヅウ？」

「さうでない、ムツシエ、私歌はない。黒奴の言葉話す。」

それから彼はありつたけの打明け話を友達にした。彼は逃げ出す決心をしたのだ。彼はとうからそれを考えて、その計畫を實行するのに太陽が還つて来るのを待つてゐるばかりだつた。今はもう太陽が還つて来たのだから、マヅウはダオメーにケリカを見付けに歸るのだ。若しもチャックが一緒に来るなら、彼等はマルセーユ迄歩いて、何かの船の中に隠れて海上へ乗り出さう。二人には不幸が来る事はない、何故なら彼はグリグリを持つてゐる。

がチャックは同意しなかつた。いくら彼が不幸であるにしろマヅウ・ゲゾの國に心を惹かれはしなかつた。

斬つて落した首で一杯になつてゐる赤い大きな銅盤が又しても氣味悪く記憶に蘇つて来た。それにさうすれば母親から一層遠く離れなければならない。

「あ、よろしい！ ではあなたデムナス留まる、私一人行く。」

黒奴はしづかに言つた。

「で何時行くの？」

「明日。」

黒奴はきつぱりした聲で答へると、眠る爲に眼を閉ぢた。體のすべての力が入用なのだといふやうに。

翌日はデムナスの『法式の日』だつた。その日はマダム・ドコステルの授業で生徒は廣間に集まる。表情的朗讀にオルガンがいるからだ。其處へ這入つて行つた時、チャックはマヅウがしづかに廣い部屋をさしぐ拭いてゐるのを見て、出發を思ひ切つたのかと考へてゐた。

授業にか、つて、少熱帯國等が『語の形態』のために顎をばくく遣り出してから一二時間程たつた時に入口の戸が半分開いて、モロンヴァルの頭が出た。

「マヅウは居ないか？」

「い、え、あなた」マダム・モロンヴァル・ドコステルが答へた『市場へ食料品の買出しにやります』

した。』

食料品といふ言葉を聞くなり、子供等の顔が幸福の表情に輝き出した事といつたら、若しも夫を命じたとしたら、この言葉の正確な形態を彼等は直ちに遣つてのけたらう。彼等が受ける食物は、それは又きち／＼の當てがひぶちなのだ！ 彼等ほどひもじくなかつたヂャックは、昨夜睡りしなに聞いた、夢のやうに頭に残つてゐる言葉の事を考えてゐた。

ムツシウ・モロンヴァルは一旦去つたが又直き戻つて來た。

『どうした！ マヅウは未だか？』

『まだ歸らないのです……どうしたといふのでせう。』
少し心配になつたちび夫人が答へる。

十時、十一時、まだマヅウは歸らない。授業はもうとつくに終つてしまつた。平常ならば地下室とはいひながら、狭苦しい貧相な料理場から生徒等の激しい食慾をそゝる温い食物の香が上つて來る頃だ。が今日は野菜、肉、何の香ひもしない。

『きつとどうかしたのですよ……』

鞭を手に時々路地の入口迄行つては、黒奴少年の歸りを狙つてゐた不禮嫌な良人キツメよりは寛大な

マダム・モロンヴァルが言つた。

終に十二時が、一日の働らきをほゞ同じ量に二分する晝飯の時を持ち來りながら、あらゆる近間の柱時計と鐘樓で鳴り出した。此の嬉しげな音はデムナスの住人達の空虚カウツホの胃袋の中に物悲しく響き渡つた。そして周圍の工場はひつそりとして、路地の長屋にさへ火が盛んにおこされて、揚物の音や、おもしろさうな香が送られて來る中で、教師も生徒も所在無けに、あてのないマンナを待ちこがれてゐた。

この兵糧攻めの學校のいたはしさ、喫飯者の大洋の真中に漂つてゐる、あはれな筏といつた風だ。少熱帶國等は肩をあげ眼を大きく剥きながら、饑餓のための痙攣と一緒に、昔の食人種の兇暴性が彼等の裡に頭を擡げ出した事を感じた。

が二時近くになつて、マダム・モロンヴァル・ドコステルは生れつきの貴族主義にも拘らず、豚肉料理を自分で買ひに出る決心をした。途中で一つ残さず食べてしまふ事を怖れて、腹のすいた少年達の誰にも、この使を任せる事はよう出来なかつたのだ。

彼女が大きなバンと脂のしみた紙包を持つて歸つて来た時、彼等は喜びの喚聲をあげて迎へた。そして總べて薄れか、つた想像といふものは食事の時に蘇るといふ通り、銘々は少年王の失踪から来た想像や、恐怖に就いて語り出した。モロンヴァルは椿事など、いふ事を一つも信じなかつた。彼には逃亡だときめてかゝる立派な理由があつたのだ。

『いくら金を持たせたのだ？』

『十五フラン！……』

妻君が怖る怖る答へた。

『十五フラン！……それでは確かだ。逃げ出したのだ。』

『が然し十五フランではダオメーには歸れやしない。』

ドクツールが言つた。

モロンヴァルは頭を振り立てながら、すぐと警察に訴へに行つた。

彼にとつては困つた事件だ。どのやうな値を拂つても子供を見附け出して、マルセーユ迄行くのを妨げなければならぬ。混血兒はムツシエ・ボンフィスの非難を恐れた。夫に世間は實際意

地悪だ。少年王は彼の受けた虐待を訴へ、學校の内情をさらけ出すだらう。それで警察での陳述で、彼はマヅウが大金を持ち出したと特に言ひ立てた。それから金錢にはかゝりがないといつたやうな風で、金の事はかまはないが、此の不幸な少年、祖國と王位を失つた家無き少年王を待つてゐるあらゆる危険を懼れるのだと言ひ放つた。

かう言ひながら『虎』は眼を押拭つた。警官達は彼を慰めた。

『大丈夫見附かりますよ、モロンヴァルさん、心配しないでいらつしやい。』

しかし夫どころではない。ムツシウ・モロンヴァルは大心配だつた。そして警官達の言ふ通り家でちつと待つてゐるかはりに、少熟帶國等を引き具して、彼自身も直ぐと搜索に向つた。わがチャツクも警官と力を合はすべく、その仲間に這入つて居た。

遠く巴里の門といふ門をさしての遠道だ。混血兒が税關吏に尋ねて、マヅウの人相や何かを言つてゐる間、子供達は入市税關の所から始まつてゐる長い道の上に、空の荷車や何處かの聯隊の行軍にまぎれて、少年王の眞黒な猿の姿が見えはしないかと眺めまはした。

それからまた報告の時間に警察へも行つたし、朝留置場の門が開かれて警戒網に引懸つたさま

く、な悲惨と汚辱の塊に最初の飾をかける時間を見越して其處へも行つた。

あ、！ 怖しい網は大いなる此の都會のうぢやく／＼したどん底にまで沈んで行つて、汚穢極まる泥濘を引上げて来るのだ。時としてこの泥濘は赤い色をして居た。そして夫を動かす時罪と血の臭ひがした。

さうした所へ子供達を連れて行つて、これ等の醜惡を眼に充たさせ、彼等の神経を哀願の震へ聲、吠聲、呪咀、嗚咽、自暴の唄聲、ゾイオロンといふ悲しく耳に響く聲にふさはしく留置場を震はしてゐる、この物凄しい音楽で搔亂させやうとは何といふ妙な考へだ。

ヂムナスの塾長に言はせれば、之が彼の、生徒を巴里生活に慣れさせる事だつたのだ。

少熱帯國達は、彼等の見もし聞きもした事がよく解らなかつた。が夫にしても彼等は淋しかつた。中でもより智慧に眼覺め、より訓練されたチャックは此の巴里のどんどこの光景に胸を痛め、憂ひに沈み、感じ深く、恐れを抱きながら、この搜索から歸つて来るのだつた。が『マヅウはきつとあの中に居るのだ』と考へては怖毛をふるつた。

さうかと思ふと又、黒奴少年はもはや遠くへ行つてゐるに違ひ無いと考へては胸を撫で下した。

彼が驅けて行くマルセーユへの道といふのはIの字のやうに眞直なので、端は海で出帆の用意をした船が待つてゐる。こんな風に考へてゐたのだ。

毎晩寢室に這入つて、空虚の彼の寢臺を見るのが嬉しくて耐らなかつた。

「走つてゐるぞ、走つてゐるぞ。小さな王様は走つてゐるぞ！」

こんなに獨語を言つた。そして一しきり彼自身の苦しい運命、母親に捨てられた例へ様のない悲しみを忘れてゐた。がマヅウに關聯して、たゞ一つ彼を心配させる事があつた。それは逃けた日にはお天氣だつたのが、急に變つてしまつた事だ。今では雨と雹と雪さへ混つた大降り、戸感ひをした春がその中で見失つた光を捜して居た。がそれは大變な苦勞だつた。そしてたまさかの晴れ間といふのは吹きすすさんでゐる風が、驟雨を叩き付ける時だ。で花車な小舎をゆすぶり、きしませ、ふるはせてゐる外の空氣につ、まれながら、震へ叫んで居る硝子の下で眠つてゐた少熱帯國達は永い航海を夢見、大洋と、恐しい危険の印象をもう一度新たにすることを出来た程だ。まるで鞭紐か何ぞのやうに寢室の中をひゆう／＼吹きまくつてゐる怖しい隙間風を避けて、掛布團の下に潜り込みながら、チャックは心の中でマヅウ・ゲツの走つて行く道を想像してゐた。

雨風に堪へ乍ら、溝の縁や林の隅に蹲つてゐる彼の姿、季候の怒りに對して彼を禦ぐにはあまり力の足りない小さな眞赤なマントを眼に見て居た。

ところがさうでなかつた。實際はかうした想像にもまして悲惨だつたのだ。

『見付かつた！』或る朝學校中が食卓に就かうとしてゐるところへ、モロンヴァルが躍り込みざまかう叫んだ。

『見付かつた。警察から通知が來たのだ……早く帽子と杖を出してくれ……留置場に引取りに行つて来る。』

彼は憤怒と慘酷な喜悦の入りまじつた氣持で居た。叫びたい本能を満足させるためと、教師に迎合する心が一緒になつて少熱帶國等は、この知らせを怖い喚聲で迎へた。チャツクはこの歡呼に聲を合せなかつた。そして直ぐに考えた。

『あ、！ 可哀さうなマヅウ！』

實際マヅウは昨夜から留置場に居た。其處だ。此の埃溜みみたいな場所の床に投げた布團の上にごろ／＼横になつてゐる無頼漢、浮浪人、怠惰と厭世と疲勞と醜態と、かうした泥にまみれた人

の塊にまぢつて、ダオメーの王冠の繼承者が、彼の立派な教師に再會したのは。

『あ、！ 可哀さうに。之は又何といふ……何といふ……』

敬愛すべきモロンヴァルは驚愕と感動に阻まれて、それ以上言ふべき言葉を知らなかつた。そして強慾な觸角と云つた風な二本の大きな腕を黒奴少年の頸つ玉に投げかけるのを見た案内の警部はこのやうに考えずには居られなかつた。

『感心なものだ。よほど生徒が可愛い、と見える！』

反對に、無感覺なマヅウは全く平氣なものだつた。モロンヴァルの姿を見ながら、嬉しいとも、辛いとも、驚いたとも、恥しいとも感じない様子だ。不斷混血兒から受けるあの酷い恐怖、折が折で一層高まらなければならぬその恐怖をさへ現はしはしなかつた。

青ざめて光澤を失つた顔で、眼は悲しげに空を凝視して居た。わけても彼を力無く見えさせたのは、泥にまみれた襤褸包みみたいな、穢らしくあさましいその體だ。頭から爪先、そのちぢれた髪の毛の間に迄、新しいのや古いのや、幾重にも泥がこびりつき、中で一番乾いたのは板になつて落ち散つた。

まるで、水につかつては岸邊の砂に轉び伏す、何か兩棲類といった様子だ。

靴も履いて居なければ帽子も無くして居た。仕着せの銀筋は恐らく、追剝の眼を惹いたのだから。残つてゐるものとは、すたく／＼に引きちぎられたツボンの一片と、太陽にあせ、泥にそまつて、所々色を留めてゐるばかりの赤い襪襦短衣だけだ。

一體彼はどうしたといふのか？

夫が言へるのは彼だけだった。警部が知つて居るのは、巡回中の警官が昨夜アメリカ街で石膏竈の上に倒れて居るのを見付けたので、餓えて半分死にか、つてゐた上に道の烈しい熱に蒸されて、すつかり體の自由を失つてゐたといふ事だけだ。何故まだ彼は巴里に居たのだらう？ 誰が引留めてゐたのだ？

モロンヴァルは其の事を尋ねなかつた。留置場からヂムナス迄二人して走らせた馬車の中の永い間も、只一言も問はなかつた。

片隅に荷物のやうに投げ出された、ほんやりと悲しげに衰へやつれてゐる子供と、凱旋將軍のやうに意氣揚々と且莊重な塾長は、僅かに時々視線を交はすだけだった。

そしてどのやうな視線！

研ぎすました鋭い刃が、折れつきて、戦ふ迄もなく敗れてゐる憫れな鋼鐵はがねと空くうでぶつかつた。

チャックは小さく襪襦につ、まれた、皺だらけの憫れけな小さい顔が庭を過ぎるのを見た時、之が少年王だとは全く信じられない位だった。

マヅウは彼を見て、例へやうも無い悲しい聲で『ボンジュ ムツシエ』と言つた。

夫からは一日中、もはや彼の事を語るものはなかつた。授業は例によつて例の如くだら／＼に運ばれ、休憩時間も同じ事だった。只時々混血兒の室から、何か知らない微かな音と苦しげな呻き聲が聞えて來た。そして其の忌はしい音がやんでゐる時も、怖しさにチャックはまだ夫を耳に聞いてゐるやうに思はれた。マダム・モロンヴァルも夫を聞きながら、ひどく心を動かされて居たらしい。両手に持った本の頁が一枚々々震へてゐた。

夕飯の時塾長はがっかりしながら、が顔をかゝやかせながら腰をかけた。

『あん畜生奴！』彼は妻君とヒルス醫師に言つた『酷い眼に逢はしやがつた！』

といふ理由は、彼はくたびれ切つてゐたのだ。

夜寢室でチャックは隣の寢臺がふさがつてゐるのを見付けた。可哀さうなマヅウは、彼の塾長をさうした眼に逢はせたかほりに、自分自身かうして寝なければならなかつた。しかも自分一人の力では出来なかつたのだ。

チャックは彼に話しかけて、苦しいをしてそんなにも短か、つた旅の話を詳しく聞きたかつたのだが、マダム・モロンヴァルとドクツール・ヒルスが其處に居て、涙と苦痛の一日が洩らさせるところのこの太い歎息をつきながら眠つてゐるやうに見える少年の上に屈んでゐた。

『ではヒルスさん、病氣ではないと仰るのですね？』

『私以上に丈夫でさ、モロンヴァル夫人……どうです……此奴等まるで鰐か何ぞのやうに鎧を着て居るのですよ！』

彼等が行つてしまつた時、チャックは掛布團の上に出してゐるざら／＼と眞黒な、まるで籠から出したばかりの煉瓦のやうに熱いマヅウの手を執つた。

『今晚は、マヅウ！』

マヅウは細目をあけて、ひどく落膽した風で彼を眺めながら、

『マヅウもう駄目』小聲で彼は言つた『マヅウ護符なくす。ダオメーもう見られない。もう駄目。』それで彼は巴里を離れなかつたのだ。デムナスを逃け出して、二時間もたつた頃、町のはづれで市外に向つて開いてゐる門をさがしてゐる間に、買出しの十五法と首にかけてゐたメダルが何時の間にか、光る物さへ見れば襲ひかゝる猛禽、何にでも手を出す税關人足の一人のポケットに宿替へをしてしまつたのだ。

そこでグリグリ無しには決してダオメーに行かれないと知つてゐたマヅウは、もはやマルセーユの事、船の事、逃げて行く事も考えずに道を戻つて、護符を見付けるために一週間晝も夜もぶつつゞけに巴里のどん底を押しまはつてゐたのだ。捕へられて、モロンヴァルの家に追ひ歸される事を怖れて、盗みと人殺しの眞暗な巴里の、卑屈なすすんだ夜の生活を營んで居たのだ。彼は建築場や空地や、下水管の中や、風が吹きすさむ橋の下、芝居小屋の裏の辨當殻が山と積んでゐる中でも寝た。

體が小さいのと色が黒いおかげで、彼は何處にも潜り込む事が出来た。そして其の何處にでも誰かしらが住んでゐた。彼は悪そのものが夜の鳥の粘つた黒い翼でもつて、自分に觸れるのを感じ

じた。彼は泥棒のパンを食べた。何故といふのに、盗人は時として慈善家だ。彼は夜中の分配にも、大建築の客の人殺しの宴會にも臨んだ。殺人犯の夢の傍で、無邪氣な少年の夢も結んだ。がさうした事は彼に何のか、はりがあつたか？ 彼はグリグリを捜してゐたので、あらゆる汚辱の間を通り抜けながら、それらを眼に見る事さへしなかつた。

巴里の果知らぬどこに居ながら、少年王は大狩獵の間ケリカに伴はれて大森林に野營したほどに、穩かな氣持で居た。その時象や河馬の啼聲に夜眼を醒して、微かな光をあびてゐる巨きな木の下に異形の物が露營のまはりをうろつてゐるのを見たり、彼の近くの葉のかけを蛇などがうねつて行くけはひを感じたのだつた。が巴里にもアフリカの森林とは事變つた怖い怪物が居た——若しもマヅウが見もし、解りもしたならば酷く恐れをなしたに違ひない。仕合せとグリグリで心が一杯になつてゐるばかりか、こゝでも遙か彼方の森林の獵と同じにケリカの保護が彼の上に及んでゐたのだつた……

マヅウもう駄目！

少年王はその夜この一言しか口が利かれなかつたほど疲れ衰へてゐたので、チャックは夫以上

知る事無しに眠らなければならなかつた。

夜中に彼は驚いて跳ね起きた。マヅウが笑つたり、歌つたり、異様になめらかな彼の國の言葉で獨語を言つてゐるのだ。謔言を言ひ始めたのだ。

朝になつて大急ぎで迎へられたヒルス醫師は、マヅウは酷く悪いと言つた。

『脳膜炎だ！』

彼は黄色く光つた手の指をこすりあはせながら、眼鏡を光らせて、さも嬉しさうな様子だ。

このドクトール・ヒルス、怖しい人間だ！ 學術書の耽讀と、あらゆる空想、あらゆる理論で頭は一杯になつてゐる。そして眞面目な研究をするには忘れ者の上に頭腦が散漫すぎる。それで僅かに一二の醫學講座に顔を出したゞけ、實際の無學をかくすのに、亞米利加の土人や、支那人やカルデア人の醫術に關する雜駁、錯雜な研究でお茶を濁してゐるのだ。おまけに彼は魔法を信じてゐる。で何かのはづみに人間一人の命が彼の手に委ねられたとする、彼はすぐと呪咀とか恐しい魔法とかいふ事を考えるのだ。

マダム・モロンヴァルはこの狂氣じみた學問の援助に、本當の醫師を迎へやうと言つたのだが、

冷酷な塾長は返して貰ふあてのない餘計な費用をかけやう等といふ氣は微塵もない。こんな猿の病氣にはドクツール・ヒルスで澤山だと考えてすつかり彼に任せてしまつた。

患者を只自分一人だけのものとするために、この妙なドクツールは病氣が傳染性でさまざまに面倒を引起すといふのを口實にして、マヅウの寢臺を庭の一方のはづれの何かの貯蔵所、元の馬匹撮影所のすべての建物同様、硝子張りでストーブが一つ拵へてある小舎の中に移させた。

一週間といふもの、彼はその小さな犠牲の上に最も野蠻な種族の間に行はれる種々な醫術を試み、思ひの儘にひねくりまはす事が出来た。一方はもはや病氣に罹つた犬ほども抗ふ事が出来なかつたのだ。種々な香の高い粉で彼自身調査したのを入れた、無難作に栓をした小さな瓶を持つてドクツールが注意深く戸をしめて、貯蔵所へ這入つてゆく時一同は期せずして考えた。

『マヅウをどうしに行くのだらう？』

お醫者といふものは、誰でもがい、かげんに魔法使であるやうに考えてゐる少熱帶國達は、頭を振り立て、眼を剝いて後姿を見送つて居た。

しかし傳染病といふところから、彼等が近づくと事は許されなかつた。そして其の事は庭の奥の

その小舎を秘密の場所、闇黒と神秘と恐怖につままれた、そして其處ではドクツールのすべての薬にもまして恐しい秘密の何か行はれでもする場所のやうに思はせた。

しかもチャックは友達のマヅウに逢ふ事、嚴重な注意で閉ざれてゐるこの戸を開いて這入つて行く事をどんなに望んでゐたらう。やつとの事で、何か忘れた薬を取りに行つたドクツールの隙をねらつてのつほのサイドと一緒に、この急拵への病室に這入り込んだ。

それは園藝の道具だとか、挿木にする枝だの、寒さをいとふ植物等を入れて置く無難作な建物だ。マヅウの臥てゐる寢臺は土間に置かれてあつた。隅の方には黄色の土鉢をいくつも積み重ねたのや、四目垣のこはれ、美しい藍色、累々たる空氣の層を形作る大空の藍色をした硝子の破片が置いてある。枯れた蕨と腐つた根の一塊りが、この佗びしい光景を一層著しい物にしてゐた。ストーブには何か熱帯の、寒さに感じ易い花車な小さい植物が其處に置いてありでもするやうにどしどし火がたかれて、うつとりと頭を重たくさせるやうな熱さを温室中にみなぎらしてゐた。

マヅウは眠つてゐなかつた。益々光澤が失せて來た可哀さうな小さな顔は、相變らずの無表情で、眞黒な手はカバの上でびくびく震へてゐた。自分と自分の周圍にある物を顧みないその様

子、漆喰塗りの石の間に、眼に見えない彼のためだけの道が開け、そして古い建物のすべての隙間はたゞ、彼だけしか知らない國に向けて開かれた、光り輝く門で、もあるやうに、壁の方を向いてゐる態には、どこか動物に近いところがあつた。

チャツクは寢臺に近づいた。

『僕だよ、マヅウ……ムツシエ、チャツクだよ。』

彼はぢつと見は見たが、何も解らなかつた。何も答へなかつた。最早佛蘭西語を知つては居ないのだ。世界中のどのやうな法式を持つて來たにしても駄目であつたに違ひない。自然が徐々にこの小野蠻人を奪ひ返して行つたのだ。そして本能が總て、學んだ事のすべてを拭ひ去つてしまつた。マヅウはダオメー語より知らなかつた。チャツクはなほも靜かに言葉をかけた。が年上のサイドは、しづかに舞下つた大いなる死の翼の羽ばたきに冷水を浴せられた心持がして、恐れと悲しみに思はず戸口へすさつた。といきなりマヅウが長い歎息をついた。二人は眼を見合せた。

『きつと眠つてゐる……』

眞蒼な顔をしてサイドが呟いた。

チャツクもひどく心を動かされながら答へた。

『さうだ、眠つてゐる……彼方へ行かう。』

それから二人はこのいまはしい陰影、縁が、つた曖昧な太陽、たそがれ時の奥深い庭の太陽が光を投げてゐる此の妙な場所にあつて、一しほ胸をうつ薄闇の中に仲間を残したま、遠しく立去つた。

やがて夜が來た。子供達が戸をしめて出た暗く靜かな小舎の中で、ストーブの火焰が輝き反射し、最早見付ける事の出來ない誰かを捜してゐるやうに、隅から隅を照らし出した。積み重ねた硝子の破片を輝かし、植木鉢の底までさしこみ、壁にもたせかけた古い四目垣によぢのほり、ゆれ／＼と絶間なく走るのに何も見付からない、何時までたつても見付からない。彼は鐵の寢臺の上、二つの袖が靜かな憩ひもて伸びてゐる赤い小さなマントの上をさまよふた。がまだ少しも見付からない、何故なら焔はなほも天井や、戸を走り、勞れ衰へ、絶望しつゝ、此處にはもはや彼が温めるべき何者も無い事を知つて、灰の中に歸り、いたくも彼を愛した寒がりの少年王と同じやうに消え果て、しまふ迄慄へさまよふのだつた。

……あはれなマヅウ！ 彼の運命の皮肉は死後迄つきまといつて、塾長は彼を雇人として葬らうか、王子としてしやうかと永い事思ひ感つた。

一方には費用の問題があつたが、片方には廣告にもなる上虚榮心を充たす事が出来るといふ利益がある。さんざ考え抜いたあけくにモロンヴァルが決心したのは一つ世間の視聽をあつめなければならぬ、それに少年王は生前にその期待を満足させなかつたのだから、せめて彼の死を利用してやらなければといふのだつた。

それで壯大な葬儀が計畫された。

すべての新聞はダオメーの少年王の畧傳、あゝ！ 彼の生涯に相應した大層短い、が、サムナス・モロンヴァルと其の塾長に對する長たらしい讃辭をつらねた其の傳記を掲げた。

ドコステル式教育法の長所、王子についてゐた侍醫の學識、塾の保健設備何一つ忘れられて居ない。そして之等の讃辭の中で、最も心を惹いたのは各新聞の記事が總て同じ文章だつた事だ。さてそれで五月の或る日、忙しくめまぐるしい中にも物見高い巴里は、ブルヴァールと云ふブルヴァールを妙な御大層な行列が練つて行くのを見た。四人の黒奴學生が高貴な柩車の綱を執つ

て行く。とそのうしろから土耳其帽を冠つた黄色い顔の學生——我がサイド君だ——が天鵞絨の襦の上に、何か知らない妙な勳章と出鱈目の王家の表徴を捧けて續く。次に混血兒がチャックや少熱帶國等を引具して遣つて来る。それから教師や塾長の友人達、社會的落伍者の連中がみすほらしい恰好でぞろ／＼續いて来る。弱々しく屈めた脊中、運命の手に叩きのめされて、その五本の指の跡を消し難い頬の皺に留めてゐるひしやけたやうな顔、力の無い視線、今もまだ夢の後光を背負つてゐる禿けた頭、すりきれた外套、破れ靴、徒な望み、實現されない野心！……かうしたすべてが白日の影に惱まされながら、情無い態で進んで行く。そして此のいたましい葬列は王位を失つた少年王に全くふさはしいものだつた。この不幸な妄想家達、彼等も亦決して入る事の出来ない空想の國を夢見てゐたのではなかつたか？

かうした巴里なればこそ、このやうな葬列が見られたのだ。あらゆるボヘミアンの群によつて墓地に送られて行くダオメー王！

この涙ぐましい儀式を一層悲しいものにしやうと、雨、冷たい小雨が小止みもなく叩きはじめた。まるで脱れられない寒さが眠らうとする地の中に迄少年王を追ひかけて行くみたいだ。あゝ、

！さうだ、地の中にまで、何故なら柩が下ろされて、モロンヅアルが述べた弔詞の、情も何も無い形式だけの氷のやうに冷かな誇張の言葉は、哀れなマヅウよ！それはお前を温めるためのもではなかつた。混血児は死者の徳と、その優れた才智に就いて、やがては王者の模範たるべきであつたとまで言つた後、その哀悼演説をこの月並な讃辭でもつて結んだ。

『彼は一箇の人物でありました！』力をこめて言つた。彼は一箇の人物だつた。

哀れにいたましいあの小さな猿面、雇人の境遇に墮されて何時までも抜ける事の出来なかつた言葉や様子の幼稚さを知つてゐたものにとつて、モロンヅアルのこの言葉は悲しくも滑稽にひいた。

しかしマヅウを惜しむすべての人の空涙の中に、わづかに一つの眞實の感動、まことの悲しみからのがまぢつてゐた。それはチャックのだ。友達の死がいたく彼の心を動かしたので、その上温室の薄闇の中でわづかに眼にした如何にも悲しい、如何にも愁はしげなあの黒奴の小さな顔が二日前から絶えず眼を去らなかつた。さうした幻覺にその時は又いたましい葬ひの式と自分の不

幸をかなしむ心さへが加つてゐた。黒奴が居なくなつた。今は彼一人が塾長の怒りの的になるのだ。他の少熱帯國等は、たとひどんなに放つて置かれるといつても、銘々の保證人があつて時々面會にも來れば、目にあまる虐待を黙つて居る事は無いに違ひない。

チャックは捨てられたのだ。彼は夫をよく知つてゐた。母親からは少しも手紙が來ない。ヂムナスの誰一人としてその居場所を知つてゐる者はない。あゝ！若しも彼が夫を知つてゐるのだつたら、すぐにも彼女の傍に逃れて行つて其の不幸を訴へたゞらうに！

幼いチャックは墓地の長い泥濘道を降りて行きながらかうした事を考へてゐた。ラバサンドルとドクツール・ヒルスが、おほきな聲で話しながら前を行く。彼はこのやうに言つてゐるのを聞いた。

『彼女は確かに巴里に居るぜ』チャックは聞くともなく耳を敬てた『一昨日ブルヴァールを通るのを見かけたのだ。』

『で彼は？』

『ふん！ 解つて居るぢやないか。一緒に歸つて來たのだ。』

彼女と彼、この呼び方は如何にも曖昧だ。にも拘はらずチャックはテーブルの話聞いて苦んだ時の様に胸をときめかした。實際夫から間もなくはつきりと呼ばれた二つの名前が彼の思ひ違ひでない事を物語つた。

では母親は巴里に居るのだ。同じ都會に居るのだ。それだのに彼を接吻しに来ない。「僕が行つてやるから！」忽ち彼は自分自身に言つた。

ペール・ラシエーズからモンテーニュ街へ行く迄の永い永い道の間、この考えが彼から離れなかつた。

逃げ出さう。芝居がすんで、廣告の効果があつたところだ。規律など、いふ事にはもはやかまはず、疲れたのと、思ひ思ひのお喋りに夢中になつて、行列も何も滅茶々々になつてゆくこの隙を利用しやう。

教師と落伍者の一塊りにとりかこまれたモロンヴァルが先頭に立ち、時々後を振り返つては手をあけて、後に続く一隊を率いてゐるサイドに『さあ！早く！』と合圖をする。と今度は、埃及人がすつと離れておほつかなけについて来る小さな脚にむかつて教師の合圖を繰り返す。

『さあ！ さあ！』そこでおくれた者は一生懸命に駆け出して、やつとの事で先きの者に追ひ付く。たゞ一人チャックはひどく疲れたふりをしてだん／＼後に取り残されて行つた。

『さあ！』モロンヴァルが言ふ。

『さあ！ さあ！』埃及少年が繰り返す。

シャンゼリゼーの入口でサイドがもう一度最後に振り返つて、大きな手を動かした。が、すぐと夫を驚いたやうにがつくり下した。

今度こそチャックの姿は見えなかつたのだ。

七 郊外の夜道

222

最初彼は走らなかつた。逃げて行くやうな風をしなくなかつたのだ。

さうでない。わざと何気なくぶらついてゐるやうな様子を装つた。が然し眼は油断なく、脚はどのやうな飛躍にも耐へやうとして居た。がブルヴァール・オスマンに近づくにしたがつて駆け出さないでは居られない衝動が後から彼を押し遣つた。それで我にもあらず大股にはなる、それと湧き起る不安に氣はあせるばかりだ。

ブルヴァールには一體何が待つてゐるのだ？ 多分閉め切つた家だらう。若しもヒルスとラバサンドルが思ひ違ひをしたので、若しも母親が歸つてゐなかつたのなら、彼はどうなるのだ？ かうして逃げてしまつて来た以上、又ヂムナスへ歸らうなど、は考えるさへもしない事だつた。若しか考へたとしても、混血兒とマヅウが閉ぢこもつてゐた室から午後中間えて居たあの微かな鞭の音と苦しげな呻き聲を思ひ出して、恐しさに思ひ留つたにちがひない。

ちやうど母親が何處かへ出かける時のやうに門の戸が開かれて、窓もすつかり開いてゐるのが

遠くから見えた時、子供は嬉しさに小躍りしながら獨語した。

「母さんが居る！」

馬車が出てしまはないうちにと急いで飛び込んで行つた。

したが玄關から家の様子がまるつきり妙だつた。家中人で一杯だ。玄關の外にどん／＼家具を下ろしてゐる。室の薄明りにふさはせるために、薄色の織物で張つた腕椅子や、長椅子は往來のまぶしい光の中にさらけ出されて途方にくれてゐるやうだ。愛神にとりかこまれてゐる姿見が枯れた植木鉢や、窓掛のはづしたの、水晶の釣燭臺など、一緒に入口の冷たい石の上にござ／＼と立てかけてある。盛装した貴婦人達が階段を往來し、柔らかな絨毯の上で彼女等の小さい靴が、品物を擔いで通る男達の大きな靴と交錯した。

チャックは呆氣にとられながら、この人々にまぢつて階上に上つた。すつかり見違へるばかりだつた。まだ新しい家具類はちぐはぐにされ、置場が替へられ、どの室も一つにごつたかへしてゐた。人々は空の抽斗を開けたり、戸棚の木や、椅子の革を叩いてみたり、無作法に自分達のまはりを見廻はしてゐる。時々通りすがりに意氣な貴婦人が手袋をはめたまゝで、足も留めずに

223

ピアノを叩いて行く。子供は自分の家が、誰一人顔を知つた者とはない、そして自分自身も何處の者とも顧みられもしなかつた此の群集に占領されてゐるのを見て、夢ではないかと考えた。

で母親は一體何處に居るのだらう？

彼は客間に這入らうとしたが、其處には部屋の奥にある何物かを見やうとして人々が詰めかけてゐた。そして何やら數字を呼び上げる聲と、槌でテーブルを叩く小さな音を聞いた。けだ。

「天蓋付き金塗りの小兒寢臺！……」

チャックは彼のそばを黒い大きな足の間に挟まつて、ボンナミが呉れたので、其の上で一番楽しい夢を結んだ小さな寢臺が通りすぎるのを見た。

『其の寢臺は僕のだ！ 持つて行つてはいけない……』

彼はこのやうに叫びたかつた。が恥しくてようしなかつた。そしてすっかり開け放つた、ブルヴァールのどよみとめまぐるしい光のさしこんでゐる部屋々々の混雑の一つ一つに母親を捜しながら、うろく／＼と夢中に歩き廻つて居た。とききなり腕を持つて引き留められたやうな気がした。

『まあ、チャック様！ 貴方ヂムナスぢやないのですか？』

母親の侍女のコンスタンだ。外出の着物を着て、芝居の案内女のやうに桃色のリボンのついた帽子をかぶり、忙しさに眞赤な顔をした眞面目くさつたコンスタンだ。

『母さんは何處に居るの？』

子供は小聲で訊ねたが、それは又何といふ悲しく愁はしげな調子だつたらう。ふとつちよの萬端引受屋もさすがに心を動かされた。

『お母さんは此處にゐるのですよ。可哀さうな坊ちゃん。』

『では何處に居るの？……どうしたの？……この人達は何なの？……』

『この人達は競賣に來たのです。がチャック様いらつしやい……臺所へ降りませう……あつちへ行つてお話しませう。』

地下室も大入りだつた。オギユスタンにピカルディー女に、近所の雇人達も集つて來てゐた。何時だつたかの晩、そこでチャックの未來が決議された脂じみたテーブルの上では、シャンパーニュがさかんに酌まれてゐた。チャックを見るなり等しく感慨にうたれた昔の召使達はやさしく彼をいとほしんだ。彼等にして見ても、氣の措けない浪費に無頓着な女主人に心が残つてゐたのだ。

ヂムナスに連れ歸られるのを怖れて、チャックは逃げて來た事を言はずに、學課がお休みだつたので、母親の事を訊ねに來たのだと言ひ繕つた。

『お母さんは此處に居ないので、チャック様』コンスタンは隠し立てするやうに言つた。

『それに教へて上げたものか……』
が直ぐと氣を換へて、

『さうだ！ かまはしない！ 誰にしろこの御子に、母親の居所をかくすといふ權利はないのだわ。』

そして彼女は幼いチャックに向つて、夫人は巴里の郊外のエチオルといふ村に住んでゐるといふ事を話した。子供は心の中で何度もその名を繰り返した。エチオル……エチオル……さうしてはつきりと記憶に留めたのだ。

『此處からよつほど遠いの？……』
何氣なく彼は聞いた。

『たつぷり八里はありますよ。』

オギユスタンが答へた。

が以前コルベいの傍で奉公してゐたといふピカルヂー女が細かな事を言つて反駁した。それからエチオルに行く道に就て長つたらしい議論が始まつた。チャックは耳をすませて聞いてゐた。

何故なら彼はもうたつた一人でこの長い道を歩いて行く決心をして居たのだ。ベルシー、シャラントン、ヴィルヌーヴを通つてサン、チヨルジュ迄行き、其處から右に曲つてリヨンの街道を行かずにコルベいの道を執る。エチオル迄セーヌ河とセナル河に沿ふて行けばいいのだ。

『それでい、のだよ……夫人が住んでゐるのは森のそば……小さな可愛い、家だ、入口にラテン語が書いてあるのよ。』

コンスタンが嘴を挟んだ。

チャックは出来るだけ耳の孔を擴げて、すつかりこの名前、中でも巴里に出る所のベルシーと、行先のエチオルといふのを一生懸命で覚え込まうとした。そして夫は彼の頭の中に二つの輝く點をなしたので、其の間を暗闇と不安につ、まれた永い道が通じてゐた。

道の遠い事はちつとも怖くなかつた。『一晚中歩かう』彼は獨語を言つた『僕の足がどんなに小

さくても、夫だけか、つたら八里の道でも大丈夫行かれる。」

それから彼は大聲で言つた。

『ぢや僕行く……ヂムナスへ歸らなきやならない……』

彼にはもつと聞きたい事があつた。唇のさきをむづ、かせてゐた問だ。ダルヂヤントンもエチオルに居るのか？……母親と彼の間にも又あの厭な物を見出さなければならぬのだらうか……彼はその事をコンスタンに聞きたくなかつた。眞實の事をはつきりと知らないながらに、彼は其處に母親の生活の不名譽な半面がある事を知つて、それに就いての話を避けた。

『それでは左様なら、ヂヤツク様！』

女中達は彼を抱擁し、馭者は堅く手を握つた。それから彼は競賣の濟んだ後の混雑、呼び手と連れ立つた評價人、道具を運びながら口論してゐるオーヴェルニュー人達と一緒に玄關を出た。この言ひやうのない混乱の中に立留まらうとしないで、憩ひ場を求めに來たその時が都の隅々に四散してゆくのにまぢつて往來に飛び出した。ひとりほつちのヂヤツクは唯一の保護の許へと、この大いなる旅を計畫してゐるのだ。

ベルシー！

ヂヤツクはこの前モロンヴァルと一緒にマヅウの搜索で其處へ行つた事を覚えてゐた。道は面倒ぢやない。セーヌ河に出て上へ行きさへすればいいのだ。それは遠いとも、お、！ 随分遠いが、混血兒の手に捕へられやしないかといふ怖れが彼の足を急がせた。絶えず新しい恐怖に急ぎ立てられた。モロンヴァルの大きな帽子の影が塀にうつつたかと思ふと、今度は誰かの足音の後から追ひかけて來る。探るやうな巡査の目附きが彼を怖れさせた。そして巴里のあらゆる叫び聲、車の軋りや、通行人の高話や、活動の都會の忙しげな息遣ひの中に、絶えずかうした叫びを聞くやうな氣がするのだつた。

『あの子を捕へろ……あの子を捕へろ……』

この幻覺から脱れるために、彼は堤防に沿ふて降りると水際の狭い舗道を足にまかせて駆け出した。

日が暮れた。河はどんよりと水量をまして、降りつめた雨に黄色く濁りながら、大きな鐵の環が光つてゐる橋の迫持に、重たくぶつかつてゐる。風は夕燒の名残りを漂はせながら吹いて居

る。人々は忙しい巴里の一日の暮れてゆく此時を遽しく立ち働いてゐた。女達は濡れた洗濯物を抱へて、水にしみやすい薄い着物の所々を灰色にべたべたと濡らしながら共同洗濯場から出て来る。釣の漁師は水呑場から連れて歸る馬の群とすれ／＼に、釣道具を提げて上つて来る。砂採りの人夫達は支拂場の入口で立つて待つてゐる。船夫、荷揚人足、あらゆる河岸の労働者達が毛糸の頭巾をかぶり、脊中を丸くして歩いてゐるのにまちつて、それとは違つた仲間である河の上の浮浪人、セーヌ河の追剥、漂着物泥棒、十五法でなければ水から助け上げてくれない、が百ヌーのためにはそこへ投げ込まうといふ怖ろしい人達も歩いてゐた。時々この人達の誰か、直走りに走つてゐる、そしてセーヌ河の岸の大きな景色の中に、之は又ちつほけに見えてゐたこの制服姿を見やうとして振りむくのだった。

一足進む毎に土手の様子は違つてゐた。それはこゝでは眞黒で、撓み易い長い板が大きな石炭船に懸け渡してあつた。もつと行くと果實の皮で足が滑つた。新鮮な果樹園の香が泥土の臭ひとまちつてゐる。そして澤山つないである舟の半ばめくつた藪ひのかけに積み上げられた林檎の山が、その鮮かな田園の色を保つてゐる。

忽ち海の港といつたやうな感じを持たせられた。さまざまの貨物や、低い煙突が煙を吐いてゐない蒸氣船が集つてゐるのだ。快い瀝青や、石炭や、旅の臭ひがした。それから景色が急に狭くなつて、大木が根株を水にひたしてゐる。まるで巴里から二十里も離れたか、三世紀も後戻りをしたやうな氣持がされる。

この低い土手から見た町の景色は變つた趣きを持つてゐた。家といふ家は水に映つた影が一緒になつて一層高く、通行人は一層濃く見えた。そして無精らしく脰を張つて、河岸や橋の欄干に頭をもたせかけてゐるのが幾つとなく見える。まるで巴里のあらゆる隅々から、暇な人、無聊に苦しむ人間、失望に悩む人、かうした人達が、夢のやうに變化する、それで居ても悲しい生活と同じほどに耐へ難い迄單調なこの水の流れに、無言の思ひを寄せに來たみたいだ。多くの不幸な人々が落膽したやうなおも、ちでなければ漠然とした、でなければさも熱心な様子で眺めて居るのを見れば、この流れの水がどのやうな謎を轉ばせて行くのだらう？……時々息をつくために立留つたチャックは、頭がくらみさうな中にかうしたすべての眼が彼を窺ひ、彼を追つてゐるのを見て、又大急ぎで走り始めるのだった。

がたう／＼夜が来た。

橋の迫持は眞暗な淵のやうに黒くなつた。土手は人通りが絶えて、わづかに暗い水から上るかすかなうすらあかりに照らされてゐた。河岸の家はもはや頂だけしか見えなかつた。屋根か、煙突か、鐘樓のわづかな尖端だけが絶えず追ひ上げられて行くあかるみの中に模糊として泛び出てるのだ。空中の闇は蒼くほやけた線を描きながら河の霧と合し、其處ではともしたばかりの街燈と、走つてゐる馬車のランプが、かすかな陽の名残りに淡く輝いてゐた。

子供は氣が付かなかつたが、曳舟道は爪先上りに高くなり、段々に廣くなつて行つて、何時の間にか彼は、幾つかの枕で仕切りをした、けの土手と同じ高さの廣い石甃の上に居た。其處では瓦斯の灯が、大きな門を潜つて這入る運搬車を照らしてゐる下を、酒樽が音を立てながら轉がされて行く。

大きな通用門、假倉庫、窖、石甃の上に列べた數千の樽から、葡萄酒の糟の香が、濡れた木の微くさい臭ひにまちつて立上つてゐた。

ベルシーだつたのだ。そして同時にすつかり夜だつた。

チャックは直ぐには氣が付かなかつた。

あか／＼とあかるい河岸のどよみと、此處はまるで溝のやうに廣々とした、兩岸のかゞやきを十層倍にもして映し出してゐるセーヌ河が、既に夜になつてゐる時間を思ひ違へさせた。そして幼い想像は、門を通り抜ける事が出来なくはないかといふ恐怖に支配されてゐた。彼は既に總ての留置所に彼の逃亡した事が知れてゐるやうな氣がした。彼はこの事ばかり考へてゐた。

しかし何の雜作もなく、誰一人税關吏が此のかくれて通る小さな制服に氣付く間もなく柵を越える事が出来て、オギユスタンの言葉通り、セーヌを右にだん／＼疎らになつた街燈がまばたきをしてゐる長い道に踏み込んだ時、夜の闇と寒さは、彼の肩の上にすべりおりて、身震ひと一緒にその胸にまでしみとほつた。町の人込みにゐる時は時で、大いなる怖れ、見付けられはしないか、捕へられはしないかといふ怖れがあつた。今でもなほ彼は怖しかつたが、それは別の怖れ、静寂と孤獨によつて増して行く理由の無い不安だ。

が彼のゐた場所はまだ田舎ではなかつた。道の兩側には家が列んでゐた。が子供が進んで行くにつれて、之等の家は段々に間遠になつて、その間には長い板塀や、大きな材木置場や、全體が

屋根ばかりみたいないなけはしい勾配の小舎があつた。遠く行くにしたがつて家の高さが低くなつて行く。低い屋根の工場みたいなのが、長い煙突を石盤色の空に突き立たせてゐる。それから二軒の茅屋に狭まれてたゞ一軒六階建の、一方にだけ澤山の窓があいて、他の三方は暗く塞つてゐる大きな建物がほんやりと薄氣味悪い土地の真中に立つて居る。が斷末魔の町は最後の努力に疲れ切つたかのやうに、もはや、みすほらしい茅屋を殆んど地面と同じだけの高さ位に見せてゐるだけだつた。

往來も亦、歩道も里程標もなくして、死んでしまつてゐるやうに見える。兩側の溝は一つに合はさつてゐる。廣い大きな道路が村を横切つてゐるみたいだ。

まだやつと八時頃だつたのに、遠く向ふで暗闇の中に消えてゐるこの長い道は、殆んど人聲も人通りもなかつた。稀れな通行人は水溜りの多い濡れた地面を、足音も立てずに歩いて居た。チャックは祕密な仕事をしに柵に沿ふて滑るやうにして行く無言の人影が眼にはいらず、其方へ寄つて行つた。そして地面と空間をより大きく、沈黙をより飾しくする爲に、時々人の居ない工場の庭で犬が永い間吠えた。

チャックは感慨に耐へなかつた。一步運ぶ足は、巴里から、その響から、その燈火から、彼を遠ざけ、闇と沈黙の中により深く突き入れたのだ。ちやうどこの時彼は最後の茅屋の前に來た。燈火がまださしてゐる居酒屋で、長い光の條が道をふさいでゐるのが、子供の眼には人の住んでゐる世界との境目のやうに思はれた。

そのさきは未知の世界だ。闇黒だ。

彼は其處へ踏み込む前に長い事ためらつた。

『彼處へ這入つて、道を尋ねやうか？』

彼は店の中を覗きながら獨語を言つた。

あやにく彼はポケットに一スーのお金も持つてゐなかつた。主人は勘定臺に腰かけて、軒をかいてゐた。脚の折れた小さなテーブルのまはりに、二人の男と一人の女が脇をついて小聲で喋りながら酒を呑んでゐた。半分開いてゐる戸を子供が押した物音に、彼等は頭を上げて此方に向いた。氣味のわるい瘦せた恐しい顔、マヅウをさがしに行つた朝、留置場で見たやうな顔をしてゐた。その中でも、赤い下着を着た女が一等怖しかつた。

『あの人は又何しに來たんだらう？』
しやがれ聲で彼女が言った。

一人の男が立上つた。がチャツクは怖しくなつて逃げ出した。茅屋からさしてゐるあかりの條を一躍びに躍びこえた。うしろの方で悪口をならべてゐる聲と、戸をしめる音がしてゐた。彼の爲の隠れ場となつたこの氣味の悪い暗闇に我を忘れて飛び込んで勢一杯駆け出した。彼は廣い野原に出て、やつと走るのをやめた。

遠くの方は右も左も廣い畑で、何處も地平線をなしてゐるやうに見えた。

何軒かの野菜栽培家の低くて新しい家、インキのやうに暗い夜の中に散在してゐる此の白い小さな立方體がわづかに景色の單調さを破つてゐた。

遙か彼方の巴里はこゝでもなほ感じられる大都會の喧噪をつゞけながら、天の一角を眞赤にそめてゐた。

郊外の何處からでも、巴里はこの光の上昇によつて夫と見知られた。ある種の天體のやうに己れの活動に依るところの輝く雰圍氣につゞまれてゐるのだ。

子供は心細さに身動きもしないで其處に立留つた。

彼がこんなにおそく、しかも一人で外に居たのは此の時が始めてだつた。おまけに彼は朝から何も食はず、何も飲まずだ、烈しい渴き、耐へられぬ渴きに苦しめられた。彼はどのやうな怖い冒險に身を投じたか、解つたのだ。多分彼は道を間違へて、遠いあこがれの美しいエチオルとは反對の方に歩いて行くのではなかつたらうか？ 正しい道を進んでゐるのだとしても、目的地まで着くのによれだけの力がある事だらう！

そこで彼は道の兩側に掘つてある溝の中に寝て、朝迄眠らうと考えたが、其處へ近づいて行くと、彼の前やすぐ其の傍で、長く重たい鼾の聲が聞えた。一人の男が白つほく見える小石の間にほんやりとした襪の塊りを拵へながら、その砂利の山を枕に眠つてゐるのだ。

チャツクは腰が抜けた程に驚いて、脚はわな／＼震へながら、前にも進まなければ後へ戻る事も出来なかつた。

一層怖い事に、このうごめいてゐる何と云つてい、かわからない物は、體を動かさず、唸り聲をあけて、眠りながら伸びをした。

子供は赤い下着の女の血走つた眼と、あそこの塀のかけをうろついでゐた無頼漢の顔を思ひ出した。彼は心の中で此の眠つてゐる者もあのやうな厭はしい顔をしてゐるのだらうと考えた。そしてこの閉ぢた眼が開き、横はつてゐる長い體が往來の泥の上に靴を突き出して立上るのではないかと、怖しさに身を震はせた。

彼にはあたり一面の暗闇にかうした怨靈がみち／＼してゐるやうに思はれた。それらは溝の中を匍ひ廻り、彼のゆくてを寒いでゐた。右左に手を伸ばしたばかりでも、そのどれかに觸りはしないかと思はれた。

あゝ！ 砂利の山の上に仆れてゐるこの怖い男は眼を醒まして、彼に飛びか、つて来るかも知れない。チャツクは聲を立てる力さへも出なかつた。

不意に向ふから、燈かきと一緒に人聲がしてチャツクは我に還つた。自分の砲壘、巴里の前面に分布してゐる砲壘の一つに急いで歸つて行く一人の士官が、道が暗いので從卒に角燈を持たせて進んで来るのだつた。

『今晚は！』

子供は嬉しさに震へるやさしい聲で言つた。

提ランプを持つてゐる兵士が、聲の来る方に夫を向けた。

『こんな時分に何處へ行くの、小さい子』士官が訊いた『遠くへ行くのかい？』

『否、あなた、そんなに遠くではありません。すぐ其處です！』

かうして遠く逃げて行く事を話したもなかつたチャツクは無難作に答へた。

『それでは一寸の間一緒に行かれる……私はシャラントン迄行くのだ。』

この先一時間も、この勇ましい士官達と一緒に行かれて、彼等の歩調に、小さい自分の足を合はせ、彼を圍る兩側の闇を追ひのけて、夫をば一層濃く、一層怖しく見せてゐる提ランプの光の中を歩かれるといふ事は、子供にとつてどのやうな幸福だつたらう。おまけに彼は道をちがへてゐない事迄が解つた。何故といふのに今聞いた名前はたしかにオギユスタンの言つた夫だつた。

『さあ、私達は着いた』急に士官は立留つて言つた……『では左様なら、子供……之からはこんなおそくなつて外へ出るのぢやないよ。巴里の田舎は險難なのだからね。』

二人の軍人と彼等のランプはもう一度チャツクを一人シャラントンの長い道の入口に置いてけ

ほりにして、狭い小路の奥へ消えて行つてしまつた。

其處にはベルシーのやうな街燈に、酔拂ひの歌や、睡いので一層ほん／＼言つてゐるやうな荒々しい口論の聲などが洩れて来る、迂散臭い居酒屋があつた。

うしろの丘に家や庭が段々をなしてゐる聖堂のてつべんで九時が鳴つた。それから彼は河岸の縁に出、底の無い淵の上にかけたみたいな橋を通つた。夜はそんなにも暗かつた。彼は足を留めて一寸の間欄干に寄りか、らうと考へたが、今度は道の中から聞えてゐる先刻の唄聲がだん／＼近くへ寄つて来た。そして新しい恐怖に驅られた哀れな幼い者は、又も一心に野原へと走り出した。少くとも其處での怖れは夢に近かつたからだ。

此處はもはや、畑の間に工場が立つてゐる巴里の田舎では無かつた。彼は農家や、藁のがさこそと、羊毛や、寝蓐の温かいにほひが洩れてくる家畜小舎に沿ふて歩いてゐた。やがて道幅が廣くなつて、もう一度果のない堀と、兩側に列んだ砂利の山、それから旅人が勞れた足に距離をはかる低い里程標に行き逢つた。

視野の裡にひろがる此の沈黙、あらゆる活動の死は子供をして廣大な果しのない眠りがすべて

の物の上に擴けられてゐるのだとも考へさせた。そして彼は向ふの砂利の上で、いたく彼をおびえさせたあの疲れた駟の聲を又しても聞くのではないかといふ事を怖れた。かすかな自分の登音にさへ驚かされて、何度となく不意に後を振り返つた。

巴里のあたりが相變らず地平線を輝かして居た。遠くの方で車の軋る音と鈴の響が聞えた。子供は獨語した『待つて居やう！』が何も通らない。あえぎ／＼輪が廻つてゐるやうなこの見えない荷馬車は、地平線のあたりのどこか遠い所に消え去り、戻り、靜まり、困難な道の急な曲り角で眼を醒まし、そしてたう／＼姿を見せずじまつた。

チャックは又急ぎ出した。あそこの曲り角に立つて、彼を待つてゐる男は誰だらう？……一人、二人、三人……それは木だつた。端をかゞめずに葉といふ葉を震はしてゐるひよる長いポブラの木だ。それから檜、幹のくねつた葉の多い大きな長い佛蘭西檜だ。

そしてチャックは春の夜、草が萌え、芽がひらき割れる音を聞くといふ春の夜の此の大きいなる神祕の中を、自然にとりかこまれながら歩いた。で、とりとめのないかうしたすべての物音が彼をおぢけさせた。

「何か歌つて勇氣を出さう！」

暗闇の中で彼の心に浮んだのは、以前母親があかりを消した小さな部屋で、彼を寝かしてくれながら唄ひ唄ひしたツレーヌの夜の唄だった。

わたしの靴は赤い靴

いとしい女よ

冷たい空気の中で震へてゐるその聲は聞くさへいぢらしかった。

少年の恐怖は彼をして暗い大道の真中で唄はせ、そしてその唄を力にすることを考えさせたのだ。ちやうど震へ響く一節の糸にすぎるやうに……いきなり唄が途絶えた。

何か恐しい物が寄つて来た。彼を吞まうとまるで闇そのものが迫つて、も来るやうに、あたりの地面よりもつと黒い隆起だ。

何物かを見分ける前に彼は耳で聞いた。

まづ叫び聲、泣き聲か吠聲といったやうなはつきりしない人の叫び、それから大粒の驟雨、此のうとましい雲に運ばれて、彼の方へ進んで来る暴風雨の騒音みたいなのにまぢる物を打つやうなかなかな音だ。

とききなり怖しい啼聲が聞えた。牛だ。両側の溝の間にひしめき合つてゐる牛の群が、小さいチャツクの上にくんくおひかぶさつて来たのだ。彼は冷たい鼻息に撫でられた、くましい尻尾の鞭に打たれ、廣い尻の温かみを感じ、牛小舎を引掻きまはした時のやうな臭ひを嗅いだ。

牛の群は肥つた丈の低い二匹の犬と、半分牛飼で、半分屠殺人の二人の大きな男にまもられながら、龍巻のやうに通り返した。牛飼達は丸太棒と叫び聲で追ひながら、馴らされてゐない猛ましい群の後をついて行つた。

取り残された子供は恐しさに氣を失つたまゝ、其處に立つてゐた。彼等は行つてしまつた。がまだ他のが来るに違ひない。何處へ行つたらいいのだ？ 一體どうなるのだ？……畑の中を歩かうか？……さうすれば道に迷ふ事は解つてゐたし、それに眞暗だ。彼は泣き出した。跪いた。其處で死んでしまひたくなつた。と馬車の軋る音が聞えて、道の向ふから二つの灯りが慕はしい

眼のやうに見えて来た時、彼は忽ち生きかへつた心持がした。恐怖のために勇氣が出て、彼は呼びかけた。

『貴方……貴方!……』

馬車は停められた。そして幌の下から、耳付きの立派な大鳥打帽が出て、低く地面の上から起つたこの臆病な叫び聲の主を捜さうとした。

『僕大變くたびれたのです』チャックは震へながら言つた『一寸の間馬車に乗せて下さいませんか?』

大きな鳥打帽が何と答へやうかとためらつてゐると、幌の奥から女の聲が子供を助けに来た。

『まあ! 可哀さうに……乗せておやりなさいな。』

『何處へ行くの?』

鳥打帽が訊ねた。

子供は一寸の間考えた。追跡を怖れる逃走者の誰でもがするやうに、彼は注意深く其の目的地を隠した。

『ヴィルヌウヴ サン チョルジュです。』

い、加減に答へた。

『それでは、お乗り。』

彼は馬車の中の柔かい膝掛の中にくるまつて、肥つた紳士とたくましい女の人の間に腰かけ、彼等は此の道で拾つた小さな學生を馬車のあかりでしげくと見入つた。

『まあ! こんなにおそく何處へ行くのだらう。そしてたつた一人で!』

チャックは本當の事を言ひたかつた。頼もしい人には打ちあけたくなるものだ。が、どうしてく! 彼にはモロンヴァルのところへ連れて行かれはしないかといふ大きな心配があつた。そこで彼は作り話を考えた。

母親が田舎の友達の家に行つてゐて、其處で重い病氣になつたのだ……彼は夕方其の知らせを受けた。それで直ぐに歩いて出て来た。明日の汽車迄待ち切れなかつたのだ。

無邪氣で人のよさうな婦人はその話をよく解つたといひ、耳付きの鳥打帽もそれがよく解つた。がたゞ彼は、このやうな小さな子供が今時分一人歩きする事に就いて、いろくとお説教を

はじめた。さまざまな危険がある。そして少々物議り顔の烏打帽——それはほんたうに便利ではんとうに温かい——は幼い友達に一々それを得意さうに算へたてた。その後で彼は母親の友達の家はヴィルヌーヴのどの邊だと訊ねた。

『ずつとはづれ……』チャックはためらはずに答へた『右側の一番おしまひの家です。』

その時が夜でそして顔の赤くなつた事が、馬車の幌の下で見えなかつたのは、大層合せだつた。が質問はなか／＼終らなかつた。夫婦とも大變お喋りで聞きたがり屋だつた。お喋りといふものは、五分間も一緒に居る間に自分の事をあらひざらひ相手に知らせてしまふものだ。此の人達がやつぱりさうだつた。彼等はブルドンネ通りの羅紗商人で、土曜日毎に彼等の美しい持家とその商賣のむせかへる埃を散じに来るのだ。がそれが結構な商賣である事は間もなく彼等がスーチー スウゼチオルの『休息所』に樂隠居をきめる事が出来るはづになつてゐるのでも知られる。『其處はエチオルから遠いのですか？』

チャックは震へながら訊ねた。

『いや何……隣だ』

大きな烏打帽が彼の馬にやさしく一鞭呉れながら答へた。

何の因果だ！

それならば嘘など言はずに、エチオルに行くのだと簡単に言ひさへすれば、穩かにゆらめく光の敵の中をたやすく走つてゆく、この心地よい馬車に乗つたまゝ、道を續ける事が出来たのに、心地よくゆすぶられながら、棒のやうになつた小さな脚を伸ばせるだけ伸ばし、絶えず工合がい、か、寒くはないかと訊ねてくれる女の人のシヨールにくるまつて行かれたのに。それから耳付きの烏打帽は何か強い飲料の栓を抜いて、元氣をつけるやうに一口飲ませてくれた。

あ、！ 若しも彼等に向つて、このやうに言ふ勇氣があつたならば、

『それは嘘です……僕は嘘を言つたのです……ヴィルヌウヴ サン デオルジュには何も用事はありません。もつと遠く貴方々が行く處まで行くのです。』

がそれはこんなにも親切、こんなにも氣のよい人達の輕侮と疑惑を買ふ事だ。まだしも彼は彼等の情で救ひ出されたあの恐怖の裡にもう一度身を投ずる方がよかつた。とはいふもの、ヴィルヌウヴに着いた事をいはれた時、子供はもはや涙を抑へる事が出来なかつた。

『泣くのぢやありませんよ、お前さん』女の人が言った『貴方の母さんはそんなに悪かないのでせうよ。それに貴方に逢つたら、喜んできつとよくおなりだから。』
グイルヌウヴの最後の家で馬車は停つた。

『こ、です。』

チャツクは胸が一杯になりながら言つた。

女の人は接吻をし、良人は馬車から下ろしてくれながら手を握つた。

『あ、！ お前さんはもう着いたのだからい、けれど……私達はまだ四里たつぷり行かなければ。』

それどころか彼も亦、この四里たつぷりの道を行かなければならなかつたのだ。
恐ろしかつた。

彼は呼鈴を鳴らすやうな振りをして門に近寄つた。

『ぢや、左様なら！』

親切な人達が言つた。

彼は涙にむせぶ聲で

『左様なら、左様なら』と答へた。

それから馬車はリヨンの街道でなく、野原のくらやみの中に大きな光の圓を描きながら、木立に沿ふた道を執つて行つた。

その時彼はふと、庇護者なる燈火に追ひつき、それをば離れずに走りつゝ、いてゆく事が出来るだらうと考へた。彼は狂氣のやうに後を追ひはじめた。が休んだので一層なへてしまった足は、あかりのために闇を見る眼が一層くらんだと同じに、すつかり役に立たなくなつてしまつた。

彼は五六歩踏み出したところで立留らなければならなかつた。そして又駆け出した。そしてたう／＼涙をはら／＼こぼしながら、がつくり倒れてしまつた。

さうした間に心地のよい馬車は、そんなにも深刻な絶望を後に残して行つたとも知らず靜かに其の道を進んでゐた。彼は道端に倒れてゐた。寒く、地面は濡れてゐた。がどうでもい、のだ！ 疲勞は何物よりも強い。彼のまはりには無限の野が擴つてゐた。風は、地上にまれ、海上にまれ、無限の境地を馳驅する時のあの呼吸をもつて吹いてゐた。

やがて野の呼吸、草の葉擦れ、それと木の葉の鳴る音は、歎息と唄聲の果しなき動搖と一緒に子供をつゝみ、ゆすぶり、なだめ、深い眠りに眠らせた。

烈しい音響に突然眼を醒まされた。今度は又何物だ？ かすかに眼をあけたチャックはわづかへだたつた傾斜の上に、何やら怖しい怪物が火花を吐き吐き、眞黒な長い體をうねらせて、呻りながら進んで来るのを見た。怪物は凄まじい音をたて、空氣を突き抜ける巨大な彗星の尾のやうに、闇の中へ隠れ去つた。彼の過ぎて行つた場所は闇がひらけて、信號標と木の茂みが眼に入つた。やがて又闇は徐々にふさがり、怪物が早や遠くへ去つて、青いさ、やかな焰しか見えなくなつてしまつた時、子供ははじめてそれが夜の急行列車であるといふ事を知つた。

何時だらう？ 何處だらう？ どれだけ彼は眠つたのだらう？ 彼には少しも解らなかつた。が眠つた事は彼のためによくなかつた。眼を醒ました時、彼は汗にびつしより濡れて、手足はこぼり、胸ははげしく迫つてゐた。彼はマヅウの夢を見てゐた……

おゝ！ 眼を醒ますと同時に翔り去つた夢が身も世もあらぬ、あまりにも現實なその記憶に還つて來た時の怖しさよ！ 土のしめりが肌をとほして、チャックは自分があの墓地の下に少年王

と列んで臥てゐる夢を見たのだ。彼はもう一度この地面の冷たさに身震ひをした。彼はマヅウの顔を見、びつたりと自分に觸れてゐるその冷めたい小さな體を感じた。幻覺から脱れやうと、彼は立ち上つたが、夜風で乾いた道の上に蹻音が高く響くのを、彼は誰かが後をつけて來るのだと考へた。

マヅウが後から歩いて來る……

そして又夢中で驅け出した。

チャックは闇と沈黙の中を突き進んだ。眠つてゐる村を横切り、彼の頭の上から大きく重たい響を投げかけた四角い鐘樓の下を通つた。二時が鳴つた。別の村で三時が鳴つた。彼は歩いた、歩いた。眼はまはり、足はほてる。絶えず彼は歩いた。若し立留れば怖しい夢が歸つて來る。走つてさへ居れば、見ないで居られたのだ。時々彼は大きな蔽ひをかけた荷車とすれちがつた。馱者も馬も眠りこけてゐる。夢遊病者のやうな馬車だ。

疲れに疲れた子供が問ひかける。

『エチオルはまだ遠いのですか？』

返事をするのは唸り聲だ。

が間もなくもう一人の旅人が彼と一緒に歩き出すだらう。鶏の歌と、川邊の蛙の軽い鈴の音がその出發を合圖する。それは太陽だ。未だゆくてを定めずに、雲の下をさまよふてゐる太陽だ。子供は彼のまはりにそのけはひを感じた。そしてすべての自然とともに、掛念ぶかく朝の陽を待った。

忽ち彼の眼ざす方、母親が居ると聞かされたエチオルの方角の地平線で空が開られた。まづ一條の淡い光の筋、闇の縁にのべられた輝きのない蒼みだ。やがて此の筋は、昇り急ぐ炎のかすかな光の亂舞と俱に次第に擴つて行く。チャックは此の光の方へ進んだ。彼はある感激に十層倍の力を得て進んだ。何物か、彼處の恐しい夜の果てるところに母親が居ると告げたのだ。

今空の涯はすつかり開かれた。涙に濡れた大きく澄んだ眼が、やさしく心を動かされながら、子供の來るのを眺めてゐるやうだ。

『今行きます……今行きます！』

彼はこのうれしい光の招きに應へないでは居られなかつた。

早や白くなり出した道は、もはや彼をおどかさなかつた。おまけにそれは溝も無ければ石甃もない美しい道で、さも贅澤な馬車が走りさうな道だつた。兩側には夜露と朝の光にひたつた立派な家が、廣い石階や、早や生へ揃つた芝生、うねつた徑、其處では闇の影が砂の上を滑つて逃げて行かうとしてゐた——を展べてゐた。

白い家と立ち木の扉の間は葡萄畑と緑の傾斜で、それは闇の中から、くすんだ藍と薄緑と薔薇色の波を立て、流れて來る川まで續いてゐた。

そして空の光は絶えず擴がり、絶えず近づいて來る。

お、！ 輝き急げ、母なる曙の光よ！ 腕を伸べてお前に急ぐ、疲れ果てた子供に温かみと望みと力をそ、いでおやり。

『エチオルはまだ遠いのですか？』

チャックは、袋を背負つてまだねほけながら黙つて歩いて來る土方の群に問ひかけた。

『いや、エチオルは遠くはない。眞直に森について行きさへすればいゝのだ。』

森はこの時眼醒めた。道端にかけられた大きな緑の垂帘がふるへてゐる。生垣の野薔薇と、數

百年の古い樫の木で小鳥が囀りを交はしてゐる。忙しい翼の下で枝はふれあひ、うなだれ、そして闇の名残りが空に消え、夜の鳥が重くしづかに飛んで、隠れた巢に歸る時、かろやかに羽根をひろけて野原を飛び立つた一羽の雲雀が、美しい夏の日、空の大なる静けさと、地のあらゆる騒音がそこに合はさるところの眼に見えぬ畝の最初の一つを踏みながら、羽音はがらかに舞ひのほつた。

もはや子供は歩いてゐるのではない。體を引き摺つて行くのだ。

襤褸を着て、意地悪さうな顔をした老婆が山羊を連れて通りすぎた。

彼はもう一遍訊ねた。

『エチオルは遠いのですか？』

老婆は怖しげな様子で彼を見た後、森のはづれを爪先上りにたかくなつてゆくせまい道を指差した。

疲れてゐるのにも拘はらず、彼は休まないで歩みつづけた。早や太陽は温かくなりかけてゐる。今しがた東雲は光輝く炎の籠となつた。チャツクは近いたことを知つた。彼はかゝみ、よろめき、

足の下をまろぶ石に突きあたりながら進んだ。が彼は留まらなかつた。

終に彼は聖堂の鐘樓が緑の梢越しに、一團の屋根の上高く聳えてゐるのを眼にした。

さあ、もう一息だ。彼處まで行かなければならない。がたう／＼力がつきた。

彼はくづほれ、立上り、又倒れた。そしてしきりに眼をしばだゝきながら、鳩小舎と、桃色の煉瓦の色のまだ新しい塔の上まで、葡萄や、花の咲いてゐる藤、薔薇等の木でつゞまれてゐる一軒の小さな家をちらりと見た。入口の戸の上には早花をもつてゐるリラの影のゆれてゐる間に、金文字の此の銘がしるされてゐた。

バルヴァ ドミユス マグナ クイエス(家はさ、やかなれど、憩ひは大いなり)

おゝ！ 金色の光にひたつたしづかな美しい家！

何處もまだしまつてゐるが、中では眠つてゐない。なぜといふのに生々と嬉しげな女の聲で唄ひ出した。

私の靴は赤い靴

いとしい女よ……

この聲、この唄……チャックは夢だと思つた。が、壁のところで鏡戸があほつて、髪をあん
で、眞白な朝着の儘の一人の女がまぶしさうな眼をして現はれた。

私の靴は赤い靴

いとしいひとよ……

『母さん……母さん……』

チャックは弱々しい聲で呼んだ。

女は驚いて立留り、あたりを眺めて一寸の間さがした。が忽ち彼女はやつれて泥まみれの、息
もたえぐなこの幼き者を見出した。
彼女は一聲叫んだ。

『チャック!』

また、く間に彼女は彼のそばに來た。そしてその夜半の疲れと、寒さと、惱みとに、凍らされ
て、半ば死んでゐる子供を、母の心のありつたけの熱を以て抱き温めた。

八 ハルヴァ ドミニユズ マグナ クイエス

「いゝえ、チャックや、いゝえ、もう怖がるのぢやありません。そんな酷い事をする學校に何で歸すのですか……お前を打つなんて、よくも私の子供を打つたりした……ほんとに逃げて来てよかつた事……あの混血兒の悪者がお前を打つなんて……肌の色の事はぬきにしても、身分から言つて、お前こそあの男を打つてやる権利がある事を知らないのだ。母さんはあんな黒奴の混血兒をさんざ召使つて居たのだと言つてやればよかつたのに。さあ！ そんな悲しさうな大きな眼で、私を御覧でない。ね、もう歸らないでもいゝと言つて居るぢやないの。第一私はもうお前と別れたくないのだよ。此處に可愛い、小さなお部屋を作つて上げやうね。田舎に住むのはほんとにいゝといふ事が解りますよ。私達はいんなものを飼つてゐるのだよ。牝鶏だの鬼だの、それから山羊が一匹と、驢馬が一匹居るの。まるでノアの方舟みたいだらう……あゝ、さういへばまだ牝鶏に餌をやらなかつた！ お前が來たのですつかりあはてさせられてしまつたのだよ……お、！ お前があんな様子で道端に倒れてゐるのを見付けた時つたら……さあ！

お眠りよ。もう少しおやすみなさい。晩御飯に起してあげるからね。がその前にこの冷めたスープを少しおあがり、リヴァルさんが言つただらう。よく眠つて滋養物を食べるのでなければ丈夫にならないつて！ どう、おいしいかい、アルシャンボウ婆さんのスープは？

可哀さうに、私が眠つてゐた間にお前はたつた一人で道を歩いてゐるのだね。ほんとに怖い……

ね、牝鶏が母さんと呼んで居るでせう……行つて来るからね。ではおやすみ。』
彼女は足の爪先で身軽く幸福さうに、少し陽に焦けて、鼠色の木綿に黒天鵞絨を澤山付けた着物と、伊太利風の花を垂らした麥藁帽子が田舎めかせすぎはしてゐるが、相變らずあだつほい様子で出て行つた。今迄に無い子供らしさ、彼女は田舎で遊んでゐるのだ。

チャックはねむれなかつた。着いてからの数時間の睡眠、入浴、アルシャンボウ婆さんのスープ、それと何よりも少年の驚くべき反撥力、しなやかな抵抗力がその疲労に打ち克つたのだ。彼はこのおだやかな室の快い居心地をしみじみ味ひながら、あたりを眺めまはした。

それはあのブルヴァール・オスマンのふはくと軟かづくめな驕奢とはちがふ。彼の居る部屋

は薄色の紙を張つた、路易十六世風の金をまぜない白と灰色だけの家具を備へつけた広い室だ。外では廣野の静けさ、木の枝の窓を撫でる音、屋根の上でクウクウ啼いてゐる鳩の聲、一握りの燕麥をとりまく賑かな騒ぎにまぢつて、飼禽場から聞えて来る、母親の『コッ、コッ』と呼んでゐる聲。

チャックは周囲の静寂の裡に消えてゆく、この微かな物音を慕はしいものに聞き做してゐた。彼は幸福だつた。寛いで居た。たゞ一つ彼の心を掻き亂したのは、彼の正面寢臺の足許に、半ば開いた本の上に手を載せ、厳しい冷かな眼をして、暴君めいた威張つた様子をしたダルチャントンの肖像だ。

子供は考えた。彼は何處に居るのだ？ どの部屋に居るのだ？……どうして見えないのだから？ たうく彼は、彼を問ひ詰め、答めでもするやうに附いてまはるこの寫眞の眼付きに惱まされて寢臺から立上り、母親の傍へ降りて行つた。

彼女は腕迄の長い手袋をはめて小指を上げ、縞の下裳と踵の高いボタン靴を見せて着物の横をはしより、あでやかな不器用さで一心に飼物の世話をしてゐた。

アルシャンボウ婆さんは自分も兎の小舎の掃除をしながら、彼女の不器用を笑つてゐた。このアルシャンボウ婆さんは森林監視人のお女房さんで、掃除と食事の世話をしに、このオーネットへ通つて来るのだ。村の人はチャックの母親の住んでゐる家をさう云つて呼んでゐた。庭の隅が小さな榛の木ハシバキの林になつてゐるからだ。

『はてまあ！ 綺麗な坊さん……』

チャックがバスクールに出て来たのを見た田舎女は飛び立つやうな聲で言つた。

『ねえ、アルシャンボウ婆さん！ 私が言つた通りでせう。』

『だがお父さんよりお母さん似だね、ほんにまあ！ お早う、坊さん……接吻させて下せえましよ。』

彼女は子供の頬に兎に遣るキャベツの臭ひがする、黒い眼の婆顔をこしく押しつけた。お父さんといった言葉にチャックは頭を振り上げた。

『さあ、お前お眠りでないのならお家を見せませう！』

相も變らず飽きつほい母親が言つた。彼女は着物の裾をおろして、この妙な家、村から少しは

かり離れて、總ての詩人の夢である孤獨の安逸——がそれはエビシエ(酒類食糧品商)の力を俟たなければ實現されない——を具體化してゐるその家の子供に見せやうと歩き出した。

家は元、路易十五世の大宮殿に附屬する獵の休息場だったのでこのあたりに多くある物の一つだが、宮殿と運命を俱にして高貴の手を離れたものだ。この古い石造の家に、新しい小塔と鳩小舎を建て添へた様子は、如何にも手を入れた貴族の邸宅といふ感じを現はしてゐる。彼等はまた、厩にも、納屋にも、セナルの森と向ひ合つてゐる廣い果樹園にも行つて見た。最後に行つたのは塔だ。色硝子の明り取りに照らされた螺旋梯子に導かれてゐる圓形の廣間で、アーチ形の四つの窓が開いて、アルヂエリアの織物で張つた丸い腰掛が置いてある。それをいくつかの骨董品、樫の古木の棚、ヴェニユスの鏡、昔の壁布、それからアンリー二世時代の彫刻した高い木の椅子が、書き物を載せた大きな卓の前に据えてあつた。

森と谷と川の美しい景色が見る窓によつて、或ひは綠葉の垂吊にかざられ、或ひは眼もはるかに、セーヌの丘の彼方まで空高く光り輝いて居た。

『此處であの方が仕事をなさるの!』

母親は闕の上に立つて恭しく言つた。

チャツクはそんなにも尊敬すべき彼が誰といふ事を聞く必要はなかつた。

聖殿の中にも居るやうな小聲で、彼女は息子の顔を見ないやうにしながら言つた。

『今は旅行中なのだよ! がもうぢき歸つておいでになるの。お前が來た事を言つてあげやう。きつとお喜びになるよ。嚴しさうな様子だけれど、ほんとうだよ! あんない、人はありはしない。それにお前を大變愛してゐるのだよ……ねえ、チャツクや、お前も大好きにならなきやいけませんよ……さうでない、私は間に這入つて本當に不仕合せにならなきやならないのだからね。』

かう言ひながら彼女は部屋の奥に懸つてゐるダルクジャントンの肖像を凝視めてゐた。油繪の肖像で、チャツクが向ふの室で見たのはそれを寫眞にとつたものに他ならなかつた。實際果樹園の入口の芝生の上にあるフロレンス製のブロンズの胸像はさて置き、家中の部屋といふ部屋の全部に詩人の寫眞が掲げられてゐるので、家の何處にも彼の肖像より他無かつた事を特記しなければならぬ。

『チャツクや、お前、母さんに約束するね、あの方をお愛しだと……』

可哀さうな氣違女は嚴かな髭の肖像の前で繰返した。

子供はうつむきながらやつとの事で答へた。

『約束します。』

そこで彼女は戸を閉めて、彼等は無言で梯子を降りた。

之だけがこの嬉しい日の只一つの曇りだった。

濃いキャベツのスープが貴族好みのよい香を發散させてゐる陶器の壁の大食堂にたつた二人きりの水入らずでゐるのはほんとうに楽しい事だった。アルシャンボウ婆さんが臺所で皿を洗つてゐる音がする。家のまはりには靜寂、善き田舎の靜寂が人知れぬ番人か何ぞのやうに徘徊してゐる。チャツクはつく／＼と母親にみとれてゐた。彼女も亦彼が美しく大きく、十二にしては大層しつかりしてゐると考えた。そして母子はまるで二人の戀人のやうに、一口食べてはキスしあつた。

夕方來訪者があつた。アルシャンボウ爺がいつもの通り女房を迎へに來たのだ。何故なら彼等

の家は遠く森の中にあつたからだ。で食堂に招じ入れた。

「さあ！一杯遣つてちやうだい、ペール・アルシャンボウ！私の子供のための祝盃をね……」

……いゝ子でせう。時々森へ連れて行つてくれるわね。』

『さうですがとも、ダルチャントンの奥さん。』

葡萄酒の盃をあけながら、赤ら顔の目に焦けた、土地の密獵者の脅威である此の巨人は藪の中や木の蔭の見張りに慣れて、ちつともぢつとしてゐることのない眼を彼方此方に動かしながら答へた。

母親がダルチャントンの名で呼ばれた事は少しばかり我がチャツクの心を傷けた。が彼はまだ人生の威嚴とか義務とかいふ事に就いて、はつきりした觀念を持つてゐなかつたので、子供の氣輕さから心は早くも、別の思ひ、テーブルの下でフウフウいつてゐる二匹の犬を呼びながら、森林監視人の制帽を縮れ頭の上に載せた森番が立去りしなにもう一度繰返していつた栗鼠狩の約束に飛んでしまつて居た。

夫婦は立去つた。と靜かに喘ぎ喘ぎ、坂の小石の上を軋つて來る馬車の音が聞えた。

「おや、ムツシウ・リヴァルのやうなこと。いつもゆつくり歩いてゐるあの人の馬の足音だ。ドクツールでいらつしやいますか？」

『さうです、マダム・ダルチャントン！』

矢張り、エチオルの醫者が往診の歸りがけに、今朝の小さい病人の容態を見に寄つたのだ。

『どうです！ 私が言つた通り、ひどくつかれたゞけだつたでせう……今晚は、坊ちゃん！』

チャツクは赤つ鼻の幅広い顔、白髪を亂して踵迄引き摺つてゐるやうな長いフロックコートにくるまつたすんぐりした僂僂の小男、軍醫としての二十年の海上生活を思はせるその體のこなしを眺めてゐた。

何といふ誠實で善良らしい風采の人だらう。あゝ！ たのもしげな人々！ 彼は怖い黒奴の混血兒や、ヂムナス・モロンヴァルから遠く離れて、此の眞率な田園に居ることの幸福を深く感じた！

ドクツールが歸つた後、入口の戸に大きな門をかつた。間は塀のまはりにその無言の柵をとざし、そして母親と子供は寢に上つた。

其處で彼が寝てゐる間に、彼女はダルチャントンにあてゝ息子の到着を知らせるため、そして彼女の側近く垂帛のかけで安らかな規則正しい寢息を立て、ゐるこの幼い者の不安な運命について、彼の心を動かすための長い長い手紙を書いた。

その事に就いて彼女は二日後オーヴェルニュからの詩人の返事を受取つた上でなければ安心が出来なかつたのだ。

母親の弱氣と子供の我儘に忠言やら皮肉がたつぷり書いてあるにはあつたが、その手紙は思つてゐたより怖い物ではなかつた。要するにダルチャントンはヂムナスの爲に大層なお金がかゝるといふ事を最早とうから考へてゐた。で表面ではチャツクの逃亡を非難し乍ら、ヂムナスがさうした暴狀なのだし——彼が罷めてしまつてからの事だ。さうだとも！——まづは仕方がないといふ事にした。子供の未來に關しては彼が責任を負ふ。それで歸つた後で、つまり一週間後の事だ。今後なすべき總べてについて考へやうといふのだつた。

それこそチャツクにとつては、その少年時代と壯年時代を通じて、この嬉しく楽しく満ち足つた一週間に匹敵する一週間を再び見出すことは出来なかつた。母親は全部彼のものだつた。森も

飼禽場も小羊もさうだつた。日に十度も彼のイダに寄り添ふて階段を昇り、彼女の行く處へ行き、彼女が笑へば理由も知らずに彼も笑ふ。さうだ、幸福そのものがさまじく言ひ現はしやうのない喜びを作つたのだ。

と又手紙が来て、

『彼は明日歸る……』

たとひダルチャントンがこの子供を再び見る氣で、彼のために親切で寛大である事を言つてゐるにしても、母親は心配に耐へないでうまい工合に顔を合はさせるための工夫をした。

それで彼女は馬車に乗つてエヴリーの停車場迄行くのにもチャックを連れて行かなかつた。彼女は彼に向つて二人が赦し難き罪の共犯者同士で、もあるやうに、お互のために苦しい教訓を言ひにくさうにした。

『お前は庭の奥にゐるのですよ、解つて……飛び出して來るのぢやありません……母さんが呼ぶ迄待つてゐるのですよ。』

チャックにとつてどのやうな感慨！

彼は果樹園の中をぶらついたり、砂利を敷いた小徑に窺ひ寄つたりしながら、車の軋りが聞え出すのを待つてゐた。

それから彼は逃げ出した。そしてすぐりの木のうしろにかくれて家の中に這入る音、顫律に乏しいおごそかな彼の聲、いつもよりもつと優しい母親の聲を聞いた。

『え、あなた……い、え、あなた……』

やがて楯にかくれた塔の窓が開いた。

『チャック、すぐ上つておいで……來てもいいのだよ。』

階段を上つて行く間、彼の小さな心は恐れと息苦しきで激しく鼓動した。そして中に入るなり彼は例の椅子の陰鬱な彫刻の上の此の蒼白い顔に怖氣付き、おどくして居る子供に手を伸べる事さへしない母親の當惑に間の悪さを感じて、これほど重大な會見のために覺悟が足らなかつた事を考えた。

ようやくの思ひでボンデュールを言つて、彼の言葉を待つた。

説教はわりに短く、どうやら愛情さへこもつてゐた。此の罪人のしほらしい態度が詩人の心を

解けさせたばかりでなく、彼の親愛なる塾長に吠面をかゝせるのが愉快だつたのだ。最後に彼は言つた。

『眞面目でなければいけない、勉強しなければいけない、人生は小説ではない。私はお前が後悔した様子を見るのが何よりの望みだ。そして若しもお前が賢くして居れば、きつと私はお前を可愛がつて三人で幸福に暮して行く。それでお前に提議するのは、私が藝術的奮闘に捧げる時間から毎日一時間か二時間をさいて、お前の教育のために盡さうと思ふことだ。お前に勉強する氣があるならば、私は我儘で氣まぐれな少年のお前を、浮世の闘ひのために鍛へた自分のやうな人間に仕立て、やるつもりだ。』

『解つたの、チャック？』子供の沈黙をひどく氣遣つた母親が口を出した……『お前のためにそんなにも犠牲を拂つて下さるのですよ。』

『え、母さん……』
チャックは呟いた。

『お待ちなさい、シャロット』ダルクチャントンが言つた『まづ私の提議が氣に入つたかどうかを

知らなければならぬ。私は誰でもを決して強制しやしない。』

『どうなの、チャック？』

彼の母親がシャロットと呼ばれる事を聞いて面喰つたチャックは何といつて答へていゝ。かも解らず、此の寛大に報ひる爲の優しい能辯な言葉を永い事搜した揚句、たう／＼その感謝を深い沈黙の裡に葬り去つた。夫を見た母親は子供を詩人の腕の中に押しやり、そして彼は又しても厭惡の情を抑へるやうな様子で冷やかな音ばかり高い、まるで舞臺の上でするやうな接吻を與へた。

『あゝ！ あなた何といふ大きな心、何といふ親切……』

可哀さうな女はかう云つて呟き、手眞似で解放された子供は心の動搖を見せまいと、大急ぎで階段を駆け降りた。

内實の事、チャックが家に歸つて來たのは詩人にとつて、一つの氣晴らしでなければならなかつた。

引越しの最初の喜びが過ぎると彼はぢきと此のイダ、今彼がシャロットと呼んでゐる——ゲーテの作中の女主人公を記念するためと、元のイダ・ド・バランシーの何物も留めまいとしてだ——

との差向ひに飽いてしまつたのだ。彼女と共に居ても、彼はたゞ一人きりといふ感じしか持たれなかつた。それほどにも彼の侵襲的自我は、このあさはかで、自己といふもの、少しも無い哀れな女の上に働いてゐるのだ。

彼女は彼の言葉を繰返し、彼の思想を自分の物にし、彼の僻説ペクトクセツをその絶間無い饒舌の裡に述べ立てる。それで彼等二人でもつてたゞ一人にしかならないのだ。で人によつては理想の幸福であるべきこの一致が、あまりに議論好きである彼争論家にとつては、かうして絶えず同意されるのが満足にはならないで大なる苦痛になつたのだ。

少くとも今彼には苦しみ、指圖し、叱るための誰かゝ入用だつたのだ。何故なら彼は詩人ではない、中學校の生徒監督が相應してゐたのだ。それで彼があらゆる些細な事柄に拘泥した御大層な規則を以てチャツクの教育を計畫した動機といふのは其處にあつたのだ。

聖朝彼の小さな部屋で眼を醒したチャツクは詩人の見事な手でもつて書かれた書付けを鏡の縁に見付けた。それにはおそろしく太い字で、

規則書

としてあつた。

それは生活の概略、勉強のプラン、あふれるばかりの課目が盛られた澤山の小さな仕切りにくぎられた一日だ。六時起床、自六時至七時朝食、自七時至八時暗誦、自八時至九時……曰く曰く。

かうも規則立てられた日といふものは、閉め切つた鏡屏がつまつた隙間から辛うじて息をつくだけの空氣と眼を満足させるだけの光線しか通はせない窓のやうだつた。ところで多くの場合かうした規則といふものは、ぢきと亂雑になつてしまふものだ。がダルヂヤントンと來ては絶対に夫を枉けないといふこせつした嚴格振りだ。おまけに生れつきのシステム氣違ひだ。元ジムナス・モロンヴァル教師である彼が、勿論それを封じて置く事は無かつた。彼のシステムは各種の智識、羅旬語、希臘語、獨乙語、代數、幾何、解剖學、文章學といったものを、あらゆる初等の必須科目と共に幼い者の頭の中で錯綜させて置いて、夫を後に至つて區分をつけ整理をしやうといふのだつた。

此のシステムは多分優れた物に違ひなかつたらうが、子供の理解力にくらべてあまりに遠大に

過ぎたか、或ひは理論を實行するに當つて教師の熟練が足りなかつた爲か、チャックには全くそれを利用する事が出来なかつた。と云つて彼は年のわりに腦力が發達してゐたし、組織立たない教育を受けて來たにも拘はらず普通十二才の子供にくらべて、遙かに立ち優つた智識を持つてゐた。彼がわるいのではない。ヂムナスの學問の最初の混雜に加ふるに、新らしい教師の詰込主義のシステムのおかけだ。

274

それに第一彼は、高壓的な此の人間に烈しい壓迫を感じた。おまけに自然が彼を惑亂しに來た。心を奪ひに來た。ヂムナス。モロンヴァルの苔のむした小庭から、十二軒横丁の怖しい路地から、忽ち廣い田舎の眞中に運んで來られた彼は、自然の幻覺と、絶間ないその接觸に心を囚へられてしまつたのだ。

わけても午後の麗はしい時間、塔の中で本と教師の前に引き据へられて、行といふ行が躍つて見える大きな帳面の上に沈吟してゐる時、彼は規則書の何章かを飛び越えて楽しい自由の境地に躍り出て行きたいといふ激しい衝動に驅られた。

開け放つた窓に向つて、花につゝ、まれた五月はそのいみじき香を送り、森は緑の波をうねらせ

てゐる。そしてチャックは梢を飛び立つた小鳥、古い楹の木の薄暗い梢に見えがくれする栗鼠の描いてゐる茶色の點を追ふために、帳面から眼を放す。森の小高いはづれが野薔薇に映へて白く輝いてゐる時、羅句語の語尾の變化をいくつかの國語で言ひ分けるのは何といふ苦痛であつたらう！ 彼はもう戸外に出る事、日光を浴びる事よりほか考えてゐなかつた……

『この子は馬鹿だ！』

眺めてゐた木のいたゞきから、西の空に漂ふてゐる薄雲の上から、驚いて飛び降りたといふやうなうっかりした様子で、彼の質問や論證に答へる時、ダルヂヤントンはかう云つて叫ぶ。年のわりに發達した丈の高さが一層彼をうつけに見えさせ、それに詩人の嚴格さはなほも彼を狼狽させ、その混雜した記憶をかき亂すばかりだつたのだ。

一箇月の後ダルヂヤントンは、最早チャックの教育から手を引くといふ事、今迄彼が貴重な時間を割いてゐたのが全然無意義に終つたといふ事を宣言した。實際彼にしても、自分自身子供と同じだけに窮屈を感じてゐたこのいかめしい規則のさまじくな束縛から脱れるのが嬉しくなくなかつたのだ。又イグイやシャロットにしても、チャックは無能である。進歩の見込みが無いと

275

いふ彼の説を甘んじて承認した。困難な日課の大詰である怒りと涙の惱ましい場面を見たり聞いたりするよりは其の方がまだよかつたのだ。

彼女は何よりも事無かれ主義だつた。そして彼女の周囲の誰でもが満足してゐる事を望んだ。彼女の精神に肖て視野の狭い眼は、決して現在の一日より遠く馳する事はなかつた。そして未來の爲めに現在の安逸を犠牲にするのは、あまりに高い代價であるやうに考えてゐるのだ。

チャツクがこの眼の敵の規則書をもはや見ることがなくなつて、どのやうに幸福であつたかは解るだらう。六時起床、自六時至七時朝食、自七時至八時等々……時間は彼にとつて廣くなり、伸びもしたやうに見えた。彼は母親がキスをしてくれる時の様子、彼の前で自分に物を言ふ時の様子を見た。けで、自分が家の中の邪魔物である事がよく解つてゐたので、子供や閑人に通有な時間など無視した心持で一日中家に寄りつかなくなつた。

彼には一人の大きな友達があつた。監視人だ。そして大きな女友達、森があつた(佛蘭西語の森 forest は女性だ——譯者註)朝から彼は家を出て、アルシャンボウの小さな小屋へ遣つて来る。鬼が逃けて行くのを獵師が狙つてゐる繪を百ばかり描いてある薄緑色の紙をはつたさつぱりした室

で、これからバリヂャンの處へ出かけて行く女房が夫に朝飯の給仕をしてやつてゐるところだ。それから犬小舎に行つて見る。訓練中の犬達が小さな叫び聲や吠聲をあけて、躍り狂ひながら、格子の棒に殺到する。やがて解き放たれた短いや、長いやさまゝな顔、眞直な耳、垂れた耳の無数の動物は自由と幸福の最初の喜びに有頂天となつて、庭の四方に散つてゆく。共同の食物皿と犬小舎の薬を離れた時、それはまた何といふ嬉しげな飛び方、何といふ自然に還つた姿態だ。

慣れるのが早くて柔順な黄色い斑のデンマルク犬、驅ける時に脚がないやうに見える脚の短い小さなバツセ種、つや／＼しいなめらかな長い毛を動く度になびかせてゐる獅子犬、獵犬には大き過ぎ贅澤すぎる阿弗利加のスルギー種、由緒正しいレヅリエ種、あらゆる種類が其處に居た。ペール・アルシャンボウはおごそかに首環と鞭を以てその生徒を訓練した。中でもあるものはきびしいその眼の前に屈伏した。怖々震へながら縮み上つたり、伏したりした。チャツクはそれでも時々反抗するものがあるのを見て考えた。

『彼犬はシステムといふのが解らないのだ。』そして彼はそれを森の中に連れて行つて、彼自身大

いなる享樂を持つてゐるところの解放の自由をわけてやりたかつた。

幼いチャツクは番人に連れられて森の中を歩きまはり、果限の脅威である、そして肩に背負つた小銃が如何にも勇者らしく見せてゐる此の怖しい人間の傍を歩くのが満足でもあれば、自慢でもあつた！ 彼と俱にあるチャツクは人々の知らない、生きた命にみち／＼た世の常ならぬ森を見たのだ。わづかな聲に駭き騒ぐ葉の間や草の蔭の微かな音のかはりに、彼は自由に働らき自由によぶ動物達のやすらかな光景を眼にした。雌を連れて、木の根に堆い眞珠の粒みたいな蟻の卵を襲ふ母の雉子、眼を腫り、足を伸ばして怖いよりも面白がりながら細徑を横切つたり、木の芽を頬張つてゐる鹿の群、森のはづれから畑の方へ出て行く兎や鴿鳩。

花盛りの野薔薇が祭壇の夫のやうなよい香を放つ眞白な大きな花束をひろけてゐる新緑のなよやかなとばりのうらに、之等の生命は高い梢の影にまちつて蠢き流れる。

森の番人は巢や雛の見張りをし、鴉や、鴿や、栗鼠や、野鼠のやうな有害動物を退治する。

人々は彼の許に、之等有害動物の頭なり尾なりを持つて来る。そして又彼は半年毎にコルペイの郡役場まで、丹精して貯めて置いたそのこなく／＼な乾いた破片を一袋持つて行く。あゝ！ 若

しも其の中に密獵者や、わけても森林泥棒の頭を入れる事が出来たならば！ 何故なら彼ペール・アルシャンボウは動物より以上に彼の樹木を愛したのだ。

鹿の替りは出来る。雉子が一羽死んだにしても、春には又千羽も生れる！ しかし一本の木が出来るのはなか／＼の事だ！

だから彼が夫等々を注意する事といつたら！ 彼等の聊かの病氣にも氣を付けるの何のつて、中でもバスツリックに襲はれた縦の一むらぎ彼の心をいたく悲しませた。このバスツリックといふのはきはめて小さな虫で、何處からとも知らず何千となくかたまつて集つて来るかと思ふと、中で一番強く一番美しく一番丈夫な木を一つ選んで一度に攻めかゝる。此の怖しい襲撃に備へるため、縦の木は彼等の脂アヂを持つてゐる。そして全力をあけてこの樹液——夫が流れ、ば流れるほど木の生命も奪はれて行くのだ——でもつて敵にむかはうとする。彼等は脂の流れをバスツリックと、樹皮の中に生みつけられた卵の上に注ぐ。そして無益な此の戦闘によつて力がつきて枯れてしまふのが常だ。チャツクはかうした哀れな樹木の運命に興味をそゝられた。そして戦闘の間に此の香よき汗が流れ、純粹の琥珀であるつや／＼しい植物の涙がしたゝり落ちるのを見た。往々

樞は辛うじてこの不幸から免れる事が出来た。が多くの場合衰へ果て、洞にされる。そして鳥の歌や、蜜蜂の羽音、宿を貸してゐる生物のすべての囁き、たくましい梢の風のさやぎにつ、まれたこの巨人は、いつかやがて雷火にうたれた樹木の如き有様をなして、高い梢の緑の浪間に滅びの跡の空隙を一つ残して竟に倒れ伏す。

山毛櫨は又他の敵を持つ。赤色をした穀象の一種で、同じやうに殆んど肉眼で見分け難い。そして其の数の多い事一枚の葉は必らずその一匹と、まざぐくと赤く美しい蝕ひ痕を持つてゐる。遠くから見た森の此の部分、秋を待たぬ時ならぬ死に染めなされた此の梢は表面ばかりの健康の態、若い肺病患者の頬の色を憶はせる病的の赤みを持つてゐた。そして夫をペール・アルシヤンボウはちやうど醫者が匙を投じた病人の前でするやうに、頭を悲しげに振りながら眺めるのだつた。

かうして森を巡回する間監視人と子供は、少しも言葉をかはさない。大いなる樹木のシンフォニーが彼等を包みくるんでゐる。風は揺り動かす木の種類によつて其の吐息を異にした。松の林では波のうねり、長い歎息だ。白樺と丸葉柳にあつては梢をゆする事の無いさつ／＼の調べで、

さまざまの金属音を響かせながら葉面を過ぎる。それから森のこゝらに数多い池のほとりではやさしいそよぎ、なめらかな長葉をなびきあはせてゐる芦のさ、やきだ。それと鵠の甲高い笑ひ聲、啄木鳥の嘴の音、杜鵑の悲しげな叫び、このとりとめのない物音が四五里へだて、も聞かれた。チャックはその微妙な音がいつも耳から離れなかつた。そして彼は夫れを愛した。

がかうして一日中番人と一緒に森の中を駆けめぐつてゐる彼には敵が出来た。森のはづれに密獵者の一團が住んで居たのだが、彼等はアルシヤンボウの嚴重な警戒のおかげで、ひどく苦しめられてゐたので死ぬほど彼を憎んでゐたのだ。陰險で臆病な彼等は森の中で番人に出逢つた時には帽子を脱いで挨拶をする、子供迄がお辭儀されるのだつたが、彼一人で歸つてゆく時にはいつも脅かされるのだつた。中でもメール・サレといふ丈の高い、石切場の砂のやうに赤い阿米利加土人の女といつた皮膚の色をして薄い唇をへこませてゐる老婆は夢にまでチャックを追ひかけた。夕方オーネットに歸るために番人と別れたチャックは、お月様の中に居るといふあの作り癖のニコデムみたいに枯木を背負つて、火焰に照らされた悪魔といつたやうな影像を夕日の光に浮き出させながら、きつと彼の通り道の溝のふちに坐つてゐる此の森の泥棒婆を見出した。彼女は

少しも動かないで彼を待ち伏せてゐるので、子供がその前を駆け抜けるのを待つて、イルド・フランスの田舎言葉で語尾を長く引きながら後から浴びせかける。

『いら！　こら！　お前は何だつてそんなに走るだね？　ちやんと見て居たよ！……待ちな、待ちな、俺の鉈で鼻さぶつかいてくれるだから……』

それから彼女は立上つて鉈を振り上げると追ひかけるやうな振りをしながら、彼をこはがらせて面白がる、チャックは彼女の駆けて来る足音や、枯木の束が地面にさはる音を聞いて息せき家へ逃げ歸る。がかうした恐怖はその雄大さに神祕な危険の魅力を加へることによつて森林の詩的情緒を増すばかりだつた。

森から歸つたチャックは番人の女房と小聲で語り合つてゐる母親を臺所に見出す。重い沈黙が家全體を領してゐるので、食堂の大きな柱時計の振子の音が聞えるばかりだ。子供は母親に飛びついて接吻をしやうとする。彼女は手眞似で止めながら、

『しづかに……お黙り……階上^{づえ}においでだから……仕事をしておるでだから……』

チャックは片隅の椅子に腰かけて、猫が夕日を浴びて脊中を丸くして居るのや、芝生の上にい

かめしい影を落してゐる詩人の胸像を可笑しい物に見とれてゐた。音を立てるなど言はれ、ば言はれるほど姦しくしないで居られない子供の不器用さで、彼は絶えず何かを倒したり、テーブルに突き當つたり、時計の振子をぶつかせたりする。充實した小さな生命の片時も動かすには居られない本能のする業だ。

『まあ、しづかになさいてば！……』

シャロツトは繰り返す。そして食卓の仕度をしながらアルシャンポウ婆さんは、大きな足の、無い爪先で歩き、廣い脊中を一心にかゝめ、肩でもつて歩き、氣が利かなく不器用に、が熱心にムツシウの仕事の邪魔をしないためありつたけの注意をする。

彼は仕事をしてゐるのだ。

高い塔の中では空想でなければ倦怠を規則正しい歩調で刻み、椅子を動かす、テーブルを押しやつてゐる音が聞えて居る。彼は例の『ファウストの娘』に着手したのだ。嘗て彼によつて發表され、それで居ながらまだ一行の詩も出来てゐないこの題を掲げて一日中其處に閉ぢこもつてゐるのだ。しかも彼は夢に迄望んだところの總べてを持つてゐた。閑暇、田舎、孤獨そして見事な書

齋、若しも彼が森、窓硝子に映るこの緑の反射に飽いたならば少しく椅子の向きを替へさへすればいいので、彼の前方には水と空と遠景の果しなき藍色がある。あらゆる森の香とあらゆる川のさやけさが直ちに彼に来る。そして梢の風の音、波と小蒸氣の遠く微かな囁きが自然の大なる静寂に響を與へ且つ擠がらせる。何物も彼を妨げ彼の心を散らさせる物はない。たゞわづかに頭の上で鳩が屋根を歩く音と、美しく暈かされた頸をふくらませでルルウ……とやさしい聲を立て、居るばかりだ。

『あ、！ 仕事をするに何てよい場所だ！』
詩人は聲を出して叫ぶ。

そしてペンを取り上げてインキ壺をあける。が何も出て来ない、只一行も。紙は白い儘で思想と同様に空虚だ。そして前から書かれてある章の題だけが——何故なら題氣違ひが何處までもつきまといつてゐたのだ——ちやうど種子を蒔くのを忘れた畠の中の番號札のやうにとびく／＼に記されてゐた。

彼はあまりに居心がよすぎたのだ。彼の周囲にはあまりに詩がありすぎたのだ。あまりに現實

化された理想と幸福に息がつまつたのだ。

考へても見るがい、！ 寵妃ボンバジュールの記憶が今もなほ桃色のリボンの糸やダイヤモンドの卸金で結びつけられてゐる、美しいエチオルの森に臨んだ路易十五世の狩の家に住み、詩人、大詩人になるために必要な總べてのもの、シャロットといふロマンチックな此の名が如何にもふさはしい美しい愛人、専心を要するこの嚴肅な研讀をやさしくはけますところのアンリー二世時代の椅子、彼の散歩の後を追ふダラチと呼ぶ眞白な小羊、そしてその幸福な毎日の時間をはかるための古い七寶の懸時計、そのおだやかな深味のある音色は過去の世界から鳴り出すので、過ぎ去つた時の寂しい姿を喚び返すやうに見えた。

あまりに幸福がすぎたのだ。それで憫れむべき詩人は一日中チャツクを責めながら教へた時と同じにインスピレーションの欠乏を自覺する。夕方も室から踏み出さない。

お、！ 煙管と長椅子の上に過す長い時間、窓の立見、倦怠……

シャロットの蹠音が階段を上つて来るのを聞くと、大急ぎでテーブルに寄つて行つて、熱心らしく顔をしかめながら、ありもしない思想の表現に思ひを凝らす振りをして眼を据えてゐる。

『お這入り!』

おづ／＼と戸を叩く音に答へる。

彼女は美しい腕もあらはに袖をまくし上げていき／＼と快活らしく這入つて来る。何といふ鄙
びた姿、顔に刷いた白粉のこながまるでオペラ・コミックの粉挽場からこぼれ散つた小麦粉みた
いだ。

『私の詩人に逢ひに来たのよ!』

這入つて来ながら彼女が言ふ。

詩人といふ言葉を妙に發音する癖があるのが彼の氣に入らなかつた。

『どう?……うまく行つて?……満足していらつしやる?……』

『何?……精神の絶間無い努力そのものであるこの怖しい文學に於て假にも誰か満足出来る
といふのか?』

彼は激昂し、その聲は皮肉になる。

『ほんとうにさう、あなた……唯ね、私^{わたし}あなたの『ファウストの娘』が……』

『ふん! 何! 俺のファウストの娘?……ゲテがファウストを書くのに何年か、つたか知
つてゐるのか?……十年ぢやないか?……おまけに彼は智的環境の裡にあつて、錚々たる文學
者と伍しつゝ、あつたぢやないか。彼は俺のやうに思想的孤獨、人をして無爲、冥想、思索の空虚
といふ事に誘導する孤獨の中の最も非なるものに陥し入れられてゐなかつたのだ。』

可哀さうな女はそれに答へやうともしないで聞いてゐた。ダルヂヤントンのかうした文句を絶
えず聞かされてゐた彼女は、其の言葉でもつてどのやうな非難が彼女に向けられてゐるかを悟つ
てゐたのだ。詩人の言葉の調子はかうした意味を持つてゐたのだ。

『可哀さうに。俺に缺けてゐる環境、火花が散るやうな精神の接觸に、お前では替りになれない
のだよ……』

實際彼には、彼女が限りなく愚に見えたので、彼女と一緒に居ながら、彼はたつた一人で居る
のと同じ倦怠を感じたのだ。

彼が彼女の何處に魅せられたかといふと、はつきりと意識してゐないが、それは唯彼女を識
り、彼女を渴仰した時の周圍、彼女をとりまいてゐた豪奢、ブルヴァール・オスマンの邸宅、召

使、馬車、かうした愛人を持つ事に依つて他の落伍者共に起させるとにろの羨望の念だつた。今の彼女はたゞ彼一人のもの、すつかり彼のものなので、彼の手で作り替へ、魂を入れ替へられたので、彼は其の魅力の半ばを失はせてしまつたのだ。しかも彼女は其の溢れるやうな美に全くふさはしい野の空氣に、いと美しさを増して居た。が腕をとつて歩く姿を誰にも見られないのだつたら、美しい情人を持つてゐるところで何の役に立つ？ それに彼女は少しも詩を解さない。田舎者の僞舌の方が好きなのだ。要するに彼女は、孤獨と無爲が葬り沈めたところの盡きぬ倦怠からこの無能の詩人を救ひ出す事が出来なかつたのだ。

それで、朝どのやうな熱心で三四の新聞が配達されてゐるのを待ち受け、まるで自分自身に關する何かの記事、例へば彼の書いてゐる戯曲の批評、でなければ彼が書かうと空想してゐる書物の豫告といつたやうな物を多くの行間に見出さうとでもするやうな意氣込みで、いろ／＼な色の帶封をちぎつたらう。そして彼はそれらの新聞を一行も飛ばさず。それこそ印刷人の名前迄も讀んだものだ。で必ず何かしら憤慨の理由、朝飯の時の長つたらし平凡な話の種を見付けた。他の人間共は間がいゝ。彼等の戯曲が上場された。しかもどのやうな戯曲だ！ 彼等の本が出

版された。どのやうな本だ！ それで彼はといふと無、相變らず無だ。最も悪い事には題材は空間に漂つてゐるので、誰でもがそれを吸ひ込み、それを書き現はす。そして最初に活字となした者が他の人々のすべての勞作を破滅させてしまふ。たゞの一週間も何かしら彼の思想を盗まれたな事はなかつた。

『おい、シャロット！ 昨日テアトル・フランセでエミル・オジエの新作を上場したのだ………俺の「アタラントの林檎」その儘の筋だ。』

『まあ、随分失敬だわ………貴郎の「アタラントの林檎」を盗むなんて！ 私そのロジエとかいふ人に手紙を書いてやるわ。』

可哀さうなシャロットはむきになつて言ふ。

と彼はさも惱ましげに、

『彼方に居ないからかうなのだ………皆に位置を奪はれる………』

田舎に傭を持つといふのが彼の一生の望みであつた事などは忘れてしまつたやうに、まるで彼女を咎めるやうな口ぶりだ。人々の不正、金銭づくめの批評、弱者のあらゆる怨恨をゞダンチツ

クな針のやうな言葉で吐き出すのだ。

かうした雲行の悪い食事の間、チャックは存在を忘れられ、あたりをこめてゐる暗い気分につきこまれまいとするかのやうに、静かに一言も口を利かずゐる。がダルチャントンが益々苛立つて行くにしたがつて、子供に對する無言の憎悪が外に現はれ出した。そして彼に葡萄酒を注いでやる時の手の震へ、彼を見る時の眉のひそみに、何かの機會を待つて、今にもこの憎しみが爆發するであらう事は、幼いチャックにも窺ひ知られて居た。

九 ベリゼールの最初の出現

あらゆる遊食者につきまとふ、環境を替へてみたい要求に驅られて、ダルチャントンとシャロットがコルベイへ出掛けて行つた日の午後、暴風雨の來さうなけはひに森行きを断念させられたチャックは、アルシヤンボウ婆さんと二人きりで家に留つて居た。重たい水蒸氣のか、つた七月の空は、微かな雷の音を轟かせてゐる黒い雪の縁を銅色に染め、一體に暗く暈かされた佗しげな沈黙の谷は、大氣の變化を待つ地の不動をは持ちつゞけてゐた。

チャックの退屈を察した森林監視人の妻は天氣模様を見てから彼に言つた。

『ねえ、チャック様、雨は降つてゐませんだよ。降り出さねえ前にちよつくら往還さ行つて、兎に遣る草取つて來て下さつしやりませんか？』

チャックは用事を頼まれたのが嬉しくて籠を取り上げると下のコルベイの街道迄オーネットの坂を一散に駆け降りて、溝の土手で百里香や何か兎の食べる貧しい小さな草を捜しはじめた。

眼の届くかぎり廣い道が大きな楡の木の茂つた梢や森の縁を灰色に變へてゐる焼けたゞらせる

やうな細かい埃に眞白くつ、まれて、何處までも續いてゐた。通る人も馬車もないこの無人の往來は、人影が無いので一層廣いものに見えてゐた。暴風雨が段々近づいて來るらしい雷の音に、

溝の中で一心不亂に草を捜してゐたヂャツクは、忽ち傍近く甲高い單調な聲が叫ぶのを聞いた。

帽子！ 帽子！ 帽子！

と思ふと、今度はずつと低い調子で、

バナマ！ バナマ！ バナマ！

品物を背負つて田舎を廻つて歩く行商人だ。その男は兩方の肩の間に、高く積み重ねた麥藁帽子を入れた籠を負つてゐた。彼は脚曲りの外に向いた足を黄色い大きな靴に包んで、怪我人みたいに苦しうに引摺るやうにして歩いてゐた。

廣い道の上には、一人徒步者を眼にするのはどんなに寂しいものであるかに気がついた事があつたらうか？

人々はこの放浪の生靈が何處へ行くのか、運命が彼に假の宿、眠るための納屋の片隅を得させるかどうか知らない。彼は過ぎて來た道の疲れと、行手の不安を伴つてゐるやうに見える。田

舎の人にとつて、かうした通行人は他所者、山師だ。彼等は危處の眼もて彼の後を追ひ、村のはづれ迄見送る。そして廣い街道がたのもしい憲兵の靴に踏まれるその石礎の上に、悪者にちがひないこの見知らぬ人間を迎へ取る迄不安を去らないのだ。

シャツボウ！ シャツボウ！ シャツボウ！

この哀れな人間は誰に向つて叫んでゐるのだ？ 見渡すかぎり一軒の家もない。動かない里程標、暴風雨を怖れ憂ひながら楡の梢に身をひそめてゐる鳥にむかつてだらうか？

叫びながら彼は石を積んだ上に腰を下して額を袖で拭いてゐる。ヂャツクは道の反對の側から、その醜い顔、幾才位であるかも知解らない、いぢけてしよほくした眼を絶えずしばだ、いてゐる、そして狼のやうに尖つた間のすいた齒を覗かせてゐる、黄色つほい顎髭で蔽はれた唇の厚い不恰好な口を眺めてゐた。中でも心を動かされたのは大いなる苦痛の表情、曇つたその眼、重たけな口、有史以前の人類の標本とでもいふ様な完成されない異形な顔貌の現はしてゐる無言の歎きだ。不幸な男は多分彼自身、見るに耐へない自分の醜さを知つてゐたのだ。何故ならやゝ不安らしく自分を眺めてゐる此の少年を彼の正面に見出した時、彼は愛嬌よく微笑んで見せた。が

この微笑は一層彼を醜い者にした。口の端や、眼の縁に無数の小皺、微笑が伸ばさせるのではなくてなほも皺苦茶にするところの貧乏人の顔のあの皺が寄せられた。しかしさうして笑つた彼の様子が如何にも善人らしかつたので、直ぐにチャックは不安を去つて相變らず草を摘んでゐた。忽ちひどく近寄つて来た雷が空と谷全體を鳴り轟ろかせた。一陣の風が埃を舞はせ、木々をふるはせながら道の上を過ぎた。

男は立上つて心配さうに雲を眺めてゐるが、やがて子供に向つて村はまだ遠いのかと訊ねた。

『もう十五分位歩かなければ。』

子供が答へた。

『やれ〜！』可哀さうな行商人は言つた『降り出さない前にはとても行かれないぞ。帽子をすつかり濡らさなければならぬ。あんまり持つて来すぎた。藪ひは小さすぎるしな。』

チャックは彼の困惑を見て心を動かされた。それに例の徒歩旅から、的無しに道を行く者に深い同情を持つやうになつたのだ。

『おい！ 帽子屋さん、帽子屋さん！』

彼は一生懸命で、が大してはかどりもしないで葡萄の木のやうに振られた足を運びながらよろめいてゆく男を呼び歸した。

『僕の家はすぐ其處だから、帽子を濡らさないやうに雨宿りに来たらどう？』

可哀さうな男はこの提議を大喜びで受け入れた。彼の商賣物は實際脆弱だつたのだ！

さて彼等はぐんぐんと迫つて来る暴風雨を避けて石塊の道を攀ぢながら足を疾めた。男は出来るだけ早く行くのに驚くべき努力をしてゐるやうに見えた。靴の甲で歩きながら、踏みつける砂利が一つ一つ火でもあるやうな様子で一步毎に足を持ち上げた。

『君痛いの？』

チャックが訊ねた。

『はい〜、いつもののです……靴のおかげです。私の足は馬鹿に大きすぎるので、見て下さい、ちやうど合ふのがどうしても見附からないのですよ。歩くのにとても耐りません。あゝ！若しも私が金持だつたら、誂へて一足すつかりす法に合はせて拵へるのですけれど……』

そして彼は汗を流し流し、愚痴をこぼしながら、躍るやうな恰好で苦しい登り坂を上つて行く

間、時々思ひ出したやうに悲しげな聲で、

「シャツボウ！ シャツボウ！ シャツボウ！ を遣つてゐる。」

オーネットに着いた。行商人は入口に丸い荷物を下ろして、其處に小さくなつて居た。がチャツクは無理に食堂に掛けさせやうとした。

「さあ！ 君、其處にお掛け、葡萄酒とパンを上げやう。」

片方は遠慮して断つた。がたう／＼言ひまかされて例の人のい、笑を泛べながら言つた。

「では坊ちゃん、折角言つて下さるのだから御遠慮致しますまい。たつた今ドラヴエイでパンを一片遣つて来たのですが、御承知の通り、食べたそばから腹がへつてゆくのですからね。」

田舎女、森林監視人の女房といふ立場からかうした放浪者に大きな臍を抱いてゐるアルシヤンボウ婆さんは顔をしかめては居たが、それでもテーブルの上に一塊のパンと葡萄酒の大きな壺を持つて来た。

「さあ！ それからハムを一切！」

断乎とした調子で命令した。

「だつてもはあ、ハムに手さつけるのは且那樣が喜ばつしやらないだに。」

アルシヤンボウ婆さんはぶつ／＼言ひながら留めた。

實際詩人は大の食道樂なので、食物戸棚の中にはわざ／＼彼一人のためのがしまつてあるのだつた。

「いやよ、いゝからお遣り。」

幼いチャツクは少しばかり主人顔するのが嬉しかつたのだ。女房は従つたがさも不服らしくぶり／＼しながら、ぢきと臺所へ引込んでしまつた。

感謝をつげながら男はさもおいしさに食べた。子供は彼のコップを満たしてやりながら、彼が長い大きな切にパンを切つて、うまく口に這入るやうに横さまに頬張るのを眺めてゐた。

「ねえ、おいしいかい？」

「お、！ おいしう御座いますとも！」

外では雨が窓硝子を叩き、風が怒り狂つてゐた。

男と子供は安全な場所に身を置いてゐるといふ幸福觀念にひたりながら語り合つてゐた。行商

人は自分がリベゼールといふ名である事、大家内の總領だといふ事を話した。彼等、彼と其の父親と三人の弟に四人の妹は巴里のユダヤ人町に住んでゐるのだ。彼等の仲間は夏は麥藁帽、冬は鳥打帽子を作つてゐるので、商品が揃つたところで行商や卸賣りの爲に或る者は巴里の郊外、或る者は地方を廻つて歩くのだ。

『それで君は遠くへ行くの？』

チャックが訊ねた。

『ナントまで。私の姉さんがかたづいて居るのです……モンタルヂからオルレアン、トゥルヌ、アンジユウを通つて行くのです……』

『君は雜儀さうに歩いてゐるのだから随分くたびれるだらうね？』

『さうですよ……夕方厄介な此の靴を脱いだら、やつと少しばかり息をつくだけです。しかし又明日の朝之を履かなければと考えるとすつかりがつかりしてしまひます。』

『で何故君の弟達が代りに行かないの？』

『皆まだ若いのです。それに親爺がどうしても手離したくないのです。辛いのですよ。私の方は

さうぢやないのです。』

彼は弟達が自分より愛されてゐるのをすつかり當然のやうに思つてゐる。彼は無理に押し込んだ足が丸く不恰好にふくれ上つてゐる平べつたい黄色の靴を悲しさうに眺めながら附け加へた。

『唯、寸法に合はせた靴が一足出来さへすれば……』

さうかうしてゐる間に暴風雨は愈々勢を増して行つた。雨と風と雷が怖い音をさせてゐる。

話聲は聞えなくなつてしまつた。そしてペリゼールが黙つて食事を續けてゐると、忽ち一度ならず烈しく戸を叩く音がしたのを聞いて、幼いチャックは眞蒼に顔色を變へた。

『あゝ！ 大變！ 歸つて來たのだ。』

彼は言つた。ダルチャントンがシャロットと一緒に歸つて來たのだ。

彼等は夜でなければ歸らない筈だつたのだが、暴風雨を怖れて、急いで來れば避けられると考へた爲に歸途を早めたのだ。このひどい雨に逢つたので、詩人は風邪を引きはしないかといふ掛念からすつかり不機嫌になつてゐた。

『大急ぎ、大急ぎ、ロロット！ 食堂に火を早く！』

『え、あなた！』

が彼等が體をゆすり／＼傘をきり、アルシャンボウ婆さんが玄關の石の上に傘を擴けてゐるうちに、ダルヂヤントンは麥稈帽子の途方もない堆積を見付けて呆氣にとられた。

『一體之は何だ！』

あゝ！ 若しもチャツクがこの異様な賓客と御馳走の食卓もろとも地の底百尺も隠れる事が出来たならば！ がどうするひまもなかつた。何故といふのに詩人はすぐと中に這入つて来て、冷かな眼で、食堂を見廻はすなりすべてを悟つてしまつたのだ。子供は譯を話して詫びるために口ごもりながら二言三言言つた……が彼は聞く耳を持たなかつた。

『シャロット来て御覽なさい。お前は今日ムツシウ。チャツクが御客をする事を言はなかつたぢやないか。ムツシウは御客をしてゐる。友達をもてなしてゐるのだ。』

『おゝ！ チャツク、チャツク！』

母親は咎めるやうに言つた。

『奥様、坊ちゃんを叱らないで下さい』ベリゼールが口を開いた『私が……』

ダルヂヤントンは腹立たしげに入口の戸を開けると、可哀さうな男に夫を指示しながら、『貴様は先づ黙つて一寸も早く立去つて貰はう。さもなければ警察に突き出すぞ。人の家に這入るにはどのやうな順序があるかを解つて来い！』

行商人といふ糊口の業がすべての侮辱に慣れさせたところのベリゼールは少しも反抗しなかつた。急いで籠を脊負ふと、瀧のやうに水の流れてゐる窓硝子に悲しげな一瞥を與へた後、今度は感謝に充ちた眼を幼いチャツクに向けて恭しく小腰を屈めると、雲のやうにバナマをはじいてゐる雨の跳ね返してゐる闕の石をまたぐにも脊をかゞめた儘だつた。外に出てもまだ彼は眞直にしようとしなかつた。そしてあらゆる運命の苛酷とあらゆるエレメントの怒りを脊に受けながら遠ざかつて行つた。そして夕立の雨の下に悲しげな聲をあけて機械的に叫びはじめた。

シャツポウ！ シャツポウ！ シャツポウ！

番人の女房が大きな火爐の中に葡萄の枝の火を燃やし、シャロットが詩人の服を乾かす工夫をして居り、そして上着を脱いだ彼が無言の怒りに胸を震はせながら勿體ぶつて室を歩きはつて居る間食堂は一しきり沈黙を保つてゐた。

と忽ち、テーブルの前を通りすぎながら彼は強い食欲に導かれた行商人のナイフに深く抉りとられた、浪立つ海に穿たれる底知れぬ洞穴といったやうな大きな穴のあいてゐる彼のハムを見付けた。

彼は眞蒼になつた。

考えても見るがいゝ。このハムは詩人の葡萄酒や辛子の壺や、炭酸水と同じに神聖な物だつたのだ。

『おゝ！ おゝ！ 之には氣が付かなかつた……すつかり本式の御馳走ぢやないか……何といふ事だ！ ハム迄やつたのか！』

『ハムに手をつけたのですつて？』

シャロットはこの大層な僭越に呆れて、色をなして立ち上つた。

番人の女房が口を出した。

『あゝ！ 私わたしらも、こんな立派な豚さ、あのボヘミアンにやつてみさつしやれ、且那樣にえらあ叱られますに言つたのですが……でもはあ、坊ちゃんには解らないんですがすよ、まだほ

んと小さいで！』

チャックは最早その慈善的の感激、あの鐵だらけの微笑の魅力——おゝ！ やさしいちらしいあの微笑——をさへ忘れてしまつて、彼の仕出かした事に恐れおのゝいた。胸を打たれて震へながら吃り吃り言つた。

『御免なさい……』

『あゝ！ さうだとも。御免なさいはい。』

誇りと食欲の兩方に痛手を負はされたダルチャントンは、たう／＼こゝで此の子供、それは露ほども尊敬してゐるはしないが少しばかり愛して居る女の前身を語る者、秘密の過去そのものである彼に對して抱いて居た焦燥と不愉快と憎惡のすべての感情を爆發させた。

彼としては珍らしく、怒りのあまりチャックの腕を掴んで、青年と云つてもいゝやうな長い體を振り動かしながら、彼の無力を證明するためかのやうにそれを持ち上げた。

『何だつて此のハムに手をつけたのだ？ どういふ権利があるのだ？……あれはお前の物ではない事を知らなかつたといふのか……第一この家にある物は何一つとしてお前のぢや無いのだ

ぞ。お前の寝る寝臺も、食べるパンもみんな俺のおなさけ、感謝しなければならぬ施しなのだぞ。實際こんなに情深くしてやつたのは俺が間違つてゐたのだ。一體お前は俺の何だ？ お前は何者だ？ 何處の馬の骨だ？ お前の早熟振りを見て、生れをさへ疑はれる時がある……』

彼を眺めてゐるアルシャンボウ婆さんのいぶかしげな黒い眼に氣付かせやうとしてゐるシャロットの絶望を見てようやく言葉を切つた。村の人達は彼等は夫婦だと信じてゐるので、チャックはダルヂヤントン夫人の先夫の子として通つてゐた。

言葉を切つて、胸に溢れるやうな罵詈譎の波をせきとめるべく餘儀なくされたダルヂヤントンは躍起となつて腹を立てながら異様に亢奮して、まるで乗合馬車の馬のやうに汗びつしよりになつて湯氣を立てながら、急いで部屋に駆け上るなり怖しい勢で戸を閉めた。チャックは美しい胸をねぢ曲けながらも一度神様に、このやうな運命におとされるために一體どのやうな罪を犯したのかと歎き問ふてゐる絶望した母親の面前に何としたらいい、かも解らず立つてゐた。いつもの通りこの問には答がなかつた。が神様が彼女をかうした男に愚しくも戀ひこがれて一生をその盲目的な伴侶となつて終るべく運命づけるには、彼女がどんなにか大きな罪を犯したにちがひない事を信じなければならなかつた。

既にこんなにも險惡になつてゐた詩人の神経を愈々とがらすため、孤獨の悲哀と倦怠に加へて病氣までが一緒になつて來た。永い事貧乏生活を送つて來た人間の例に洩れず彼には持病があつた。その上大の養生家で泣言屋でいつも體ばかり氣にしてゐた。そしてそれは此のオーネットの大いなるやはらぎの中にあつて、之ほど彼にとつてたやすい事はなかつた。その上彼の頭腦の不振、長椅子の上の永い眠り、氣をつまらせる此の無爲について辯解するよい口實だつた！ でそれからは例の『お仕事だ……ムツシウはお仕事だ……』のかはりに『ムツシウは加減がお悪い』といふ言葉を聞くやうになつた。彼はかうした曖昧な言葉で、時々起るその微恙を云はせた。かうした時でも日に何度となくパン箱に近づいて出來立てのパンを大きく切ると、クリームを添へたチーズをべつたり塗りつけて髭を汚しながらかぶりつく事をやめはしなかつた。がそれ以外にはすつかり病人らしい容態をそなへてゐた。衰弱したやうなものごし、不機嫌、絶間無い氣難しさ。

人のい、シャロットは彼を憫れみ、看護り、あまやかした。すべての婦人の心の底にかくれて

る看護尼僧が彼女にあつては無智なセンチメンタリテイを以て二倍にもなつてゐるので、彼が大した病氣であると考えるやうになつてから、彼女の詩人が殊更いとしい者になつてゐたのだ。それで彼の氣をまぎらせ苦痛を和けるためにどれほど工夫を凝らした事だらう！お皿や銀器の觸れる音を少しでも消すためにテーブル掛の下に毛織の布を敷いたり、アンリー二世式椅子の眞直な脊中にクッションをあてる工夫をしたり、フランネルの布切とか煎じ薬だとかの細かくあた、かい注意に、氣立てのい、病人だつたならば氣力を沈めて聲の調子まで和らけずにはゐられない程だつた。ではあつたがこの可哀さうな女は時々顔を出すあの賑かなお轉婆で一たまりもなく彼女の看護婦としての美德を臺無しにしてしまふ。例の饒舌と目まぐるしい振舞に立ち還るので、顔をしかめた詩人から物憂げな調子で『お黙りな………勞れさせるぢやないか………』と言はれてから、少し鼻白んではじめて止めるのだつた。

ダルヂヤントンの病氣のおかげで、しよつちう家に入内りする人が出來た。ドクツール・リヴァルで、患家が十里四方も散らばつてゐる、絶えず引張風で街道の何處の角にも人々がその來るのを待ち構へてゐるといふ人だ。彼はもちや／＼にちぢれた白い絹糸のやうな髪のををして懸

の痕のある快活さうな人のい、顔をして這入つて來る。ポケットの中にも本を握ち込んでゐる馬車だらうが歩くのだらうが頓着無しに道々讀む事をやめない。シャロットは廊下に彼を迎へると四角張つていふ。

『あ、ドクツール、どうぞ早くいらして。可哀さうな詩人がどんなにしてゐるとお思ひになりまして？』

『ふん！ そんなに言ふほどの事はありません。氣がまぎれさへすればい、のですよ。』

實際弱りきつた聲を出して醫者を迎へたダルヂヤントンは、新らしい顔に向ひ合つて彼の生活の單調の裡に一の異分子を見出したことがどんなに幸福であつたらう。忽ち病氣を忘れてしまつて政治を語り、文學を談じ、巴里生活と、彼が識つてゐるのだと云ふ、そして何かの痛罵を浴びせかけたさうな知名の人達の話で善良なドクツールの魂を奪ふ。頗る無邪氣で眞率なドクツールはさうした不條理な物語りにあつても一々文句を吟味してゐるやうなこの熱の無い虚榮の言葉に疑念を挟むやうなことはなかつた。第一リヴァル老人はそのやうな疑ひ深い人間ではなかつたのだ。

彼はこの家が気に入つた。詩人は聰明で、妻君は美人で、子供は可憐であると考へた。そして今少し注意が働らく人ならば考へずには居られなかつたこの事、どうした偶然の糸がこの人達をつなぎ、どのやうな鋭いそれで居てうまく留められてない留針で彼等が一つの家庭を作るに到つたかと思つて見る事さへしなかつた。

度々お晝頃馬を柵の環につないでおいて、此の好人物はバリヂヤンの家に腰を落付けて、シャロットが彼のために拵へたグロググをちびり／＼やりながら、パロネーズ號で印度支那に航海をした時の話に時のたつのを忘れてゐる！ チャックは隅の方に坐つて靜かに注意深く耳をすましながら、すべての子供に共通の、そして間もなく生活の平調と刻々に視野の狭まつて行く事によつて壓倒されてしまふところの此の冒險慾に囚はれてゐる。

『チャック！』

いきなりダルヂヤントンが指差しながら荒々しく叫ぶ。

とドクツールがとりなす。

『此處に置いてお上げなさい。子供が傍に居るといふのは氣持のいゝものです。實際子供といふ

ものは驚くべき鼻の力を持つてゐる。此の御子を見たゞけで私が子供氣違ひだといふ事、私が孫を持つてゐるといふ事を察してしまつたのですよ。』

それから彼はチャックより二つ年下の孫娘のセシルの事を喋り出す。そして彼女の事を讚める段になると、旅行の話よりもつと詳しくなる。

『何故連れておいでにならないのですの、ドクツール？』シャロットが言つた『きつと此の子と一緒に喜んで遊ぶでせうのに！』

『おゝ！ どうして、夫人！ お祖母さんが承知しません。彼女は子供を誰にもまかせないのですよ。それに自分では私共の不幸以來少しも外に出ないのです。』

リヴァル老人が度々口に出していふ此の不幸といふのは、彼の娘とその婚が結婚したその年、セシルが生れると間もなく二人とも死んでしまつた事を指すのだ。この二重の不幸には秘密がつきまつてゐる。ダルヂヤントン家の人々に對してはたゞ『私達の不幸』といふ此の言葉よりは出さなかつた。そして話をよく知つてゐるはづのアルシヤンボウ婆さんは曖昧に言葉をにこしてしまふ。

『あゝ！ほんになあ！あの方達はひどい苦勞をさつしやつた……』

しかしオーネットに來た時の快活な様子では大してさうなやうにも見えなかつた。多分シャロツトのグロッグ、濃い強い、苦しもマダム・リヴアルが見でもしたなら、大急ぎで水を澤山割つたに違ひないそのグロッグが何かの働きをするのに違ひなかつた。兎も角この好人物はバリヂャンの家で退屈しなかつた。幾度か之からリスへ行かなければならない……チジュリーへとか、モルサンへ……とか言つては立上るのだつたが、又腰を据えてやりかけた話をつゞける。そして戸口で待ちくたびれてゐる馬の足踏にあはて、詩人にさよならを言ひ、病人の事で夢中になつてゐるシャロツトにはいつも相變らずの『氣をまぎらせるやうになさい』といふ處方を殘して大急ぎで立去る。

氣をまぎらせる！

彼女はそのため最早何をし、かを知らなかつた。彼等は食事の献立を工夫するのに時間消したり、晝飯と捕虫網と新聞や本を持つて馬車で森に出掛けた。が彼は退屈した。

彼は又小舟を買つたがセーヌの真中で脱れつこのない絶對の差向ひは一層悪かつた。彼等に

はとても耐へられなかつた。絶間ない沈黙の口實を無言を要する釣によつてもとめやうとしては口をつぐんで糸をたれた。間も無く舟は岸の燈心草の間につながれて、水と落葉を一杯ためてゐた。

その次には一番風變りな氣まぐれが始まつた。壁や塔を修繕したり、外階段と、詩人の日頃の理想である伊太利風の露臺、それから葡萄の蔓をからませた低い柱を列べ立てたりした。しかも彼はテラースが出来たにも拘はらず退屈した。

或る日、時々彼がボルカを弾く翼琴を直させるために調律師を呼んだ。この男は一風變つた發明家で、屋根の上に空氣堅琴を据えつける事を詩人に勧めた。五尺ばかりの高さの蓋無しの大きな箱で、その中に張つた長さの違つた絲が風のふく儘に微妙な音色で嘖び泣くといふのだ。ダルヂヤントンは喜んで承諾した。が据えつけたばかりでもうたまらなかつた。僅かな風にも歎息の聲、腸を絶つやうな音色、悲しげな叫びを立てるのだ……

ウウウ……チャックは床の中で例へやうもなく怖れた。そして聞えないやうに頭を布團に隠した。高い屋根から氣でも達はせさうな無氣味な憂鬱が降つて來るのだ。

『あの堅琴は遣り切れないぢやないか！……もう御免だ。御免だ！……』
詩人はいきり立つて叫んだ。

機械をみな下ろし、空気を庭の隅に運んで音を立てないやうに土に埋めなければならなかつた。が地面の下でもなほ泣いてゐた。それで、どうあつても死ぬまいとして荒れ狂ふ獸か何ぞのやうに足で蹴るやら、石を投げつけるやらして、たう／＼糸を絶ち切つてしまはなければならなかつた。何もしないといふ事が其のマニーになつてしまつた此の不幸な人間をまぎらすために、最早何を考え出す術も無かつた、シャロットはふと寛大な考えを起した。

『誰か友達を呼んだらどうかしら？』

それは全くの犠牲になる事だつた。何故なら彼女は彼をたゞ自身一人きりのものにして置きたかつたのだ。ガラバサンドルとドクツール・ヒルスが逢ひに来るといふ事を彼に告げた時の其の喜びは彼女の勇氣に酬ひをあらしめた。彼は久しい以前から外部よりの氣晴らしに就いて考へてゐたのだが、孤獨といふ事、彼等二人だけの生活の幸福を力説した今となつて、それをよう言ひ出されないで居たのだ。

それから程たつて、夕飯に歸つたチャックは家の近くまで来て、何時に無い賑かさ、新しいテラースから来る笑聲や、コップのちか合ふ音、かと思ふと鍋を動かす音や階下の廣い臺所で火を燃やすために薪を割つてゐる音を聞いた。近寄りながら、ヂムナスの元の教師達の聲や調子、夫にまぢつたダルヂヤントンの何時ものやうに訴へるやうな生氣の無いものではない、議論に活氣付いた言葉を聞き分けた。子供は此の人達と顔をあはせる事によつてあの苦しかつた時を思ひ出さなければならぬのだといふ恐怖に胸を打たれて、夕飯を待つため震へながら庭の中に忍び入つた。

『皆さん、何時でも食事がよう御座いますよ！』

いき／＼と頬をかゞやかせて、白い前掛に顎までつゝみ、必要な場合にはレースの袖をたくし上げて、粉をこねることも知つてゐると云ふ主婦ぶりを、テラースに現はしたシャロットが言つた。

皆は急いで食堂に降りた。其處で二人の教師は十分な好意を以てチャックを迎へた。それから揃つて、大急ぎの料理で野生の草の風味と自在鍋の香を留めてゐる田舎の御馳走のテーブルに向

つた。

芝生に面した開け放つた二つの戸口からは、眼に見える境もなく森と續いて庭が見えてゐる。鶉の呼び交はす聲、眠りに入る小鳥達の囀りが、窓硝子を照らしてゐる太陽の燃え立つやうな斜めの光線と一緒に食卓の人々をおとなつた。

『斉生： お前達皆くやつてるな！』

一息にスープを啜り込んで、銘々が思ひ思ひの考えを取り返した時いきなりラベサンドルが叫んだ。

『實際俺達は幸福だよ。』

一人きりで眺めて居た時とは違つた別の美しさ、別の魅惑を持つてゐるやうに思はれて來たシヤロットの手を押さへながらダルチャントンはかう言ふと、やがて彼等の幸福について述べはじめた。

彼は森の散歩、舟遊び、川岸の古い宿屋での休息、鐵の欄干と正面の壁にさびついてゐる二つの大きな馬をつなぐ環を持つた昔の馬車立場の話をした。それから夏の大きいなる静寂裡の長時間

の午後の執筆、涼しくなりかけた秋、木の根株があける煙がばち／＼と鳴りながら高く上る火の傍の永い夜更かし。

彼は其の場で考へてゐる通りを語つた。そして彼女も、二人してそんなにも苦しく辛く過して來た死ぬ程の倦怠の時を、かうした理想の幸福で送つて來たやうな氣がして居た。他の二人は感歎と羨望と愉樂の何とも形容の出來ない澁面を作つて聞いて居た。慇懃を湛へた眼と、抑へ切れない無念にゆがんだ口が矛盾を現はして居た。彼等の微笑は寂しく苦かつた。

『あゝ！ お前は運がいゝんだ！』ラベサントルが言つた『考へると厭になる。明日の今頃お前が此處で御馳走を食べてゐる時には、俺は息のつまるやうな何處かのスープ屋のテーブルに向つてゐるのだ。其處で吸ふ空氣も湯氣で濡れた窓硝子も、持つて來る皿も何もかもが汽罐室と蒸氣の臭ひがしやがる。』

『まだしも、毎日スープ屋でちゃんと晩飯にありつけたならばな！』

ドクツール・ヒルスが呻るやうに言つた。

ダルチャントンは急込んだ。

『それならばさ！ 暫くの間此處に居たらいい、ぢやないか、家は廣いし、穴倉は一杯だ……』
『さうですとも』急いでシャロットが合槌を打つた『お泊りなさいな……まあ、い、事……
遠足をませうね。』

『ぢやオペラはどうするのだ？』

ラバサンドルが言つた。彼はオペラに出てゐるのだ。

『それならヒルスさん、貴方はオペラをなさらないのですもの。』

『あゝ、伯爵夫人！ 貴女の御親切を是非お受けしたいと思ふのですが……今は別段用事が無いのです。私の患者は大低田舎に避暑して居ますから。』

ドクツール・ヒルスの患者が避暑だ！ とんだ御戯談だ。が誰も笑はなかつた。蒸^ス伍^ゴ者^{シヤ}同士で彼等がかうした與太を飛ばす事にすっかり慣れつ子になつてゐるのだ。

『さあ、きめてしまへ』ガルヂヤントンが言つた『第一俺のためだよ。い、かい、俺はこんなに弱つてゐるのだから時々診てくれるがい、さ。』

『たう／＼捕つちやつたな……俺は言つたらう。リヴァールは駄目さ。俺だつたら一月で丈夫

にしてやる。』

『ぢやヂムナスはどうするのだ？ モロンヴァアルは？』

自分が仲間に這入れない樂しみにありつくのを見て憤慨したラバサンドルが叫んだ。

『あゝ！ 仕方が無いよ！ ヂムナス・モロンヴァアルもメトード・ドコステルも俺はもう澤山だ……』

それから當分の宿と食事のあてが出来たドクツール・ヒルスは、自分が養つて貰つて居るヂムナスに就いて愚痴やら、呪咀やらを始め出した。モロンヴァアルは喰はせ者に過ぎないので、今はもう一錢の金も持つてゐない。ちつとも俸給を拂はないのだ。それに皆彼から去つてしまつた。マヅウの事件が致命傷となつたのだ。

他の者が又輪に輪をかけて、たう／＼モロンヴァアル夫婦をさん／＼にこきおろした。二人はヂヤツクが逃げ出した事を祝ひまでした。何でも混血兒は腹を立てたあまり黄疸に罹つたといふ。

彼等の總べてが詳かにする處の此の陣地に襲ひかかつたが最後、三人はもはや留る事を知らなかつた。そして一晩中けなしつける、彼等の間の言葉で云へば、『砂糖を割つて』過した。

ラバサンドルは又夫をオペラの立役者、優れた聲も才も無い氣取屋の大根役者の頭の上で割つた。それから態と彼に端役ばかりを振る舞臺監督の頭の上でもかいた。さうした不正が行はれるのは、彼が社會主義者である事、元は職工だった事を人々が知るからだ。

『さうだ！ 嘘ぢやない。俺は平民が好きだ』亢奮した音楽家は大きな拳骨でテーブルを叩きながら言った『夫が又彼等にどうするといふのだ？ さうなら俺に聲が無いといふのかい？ が生憎ちやんとあるのだ……聞いてくれ。』

で彼は自分の聲を試みて、さも愛着に耐へないもの、やうに眼を細くして轉ばせる。

次はダルチャントの番だ。彼はその砂嚙を冷靜に、理論的にさも憎々しげに細かく砕く。

劇場の監督、本屋の主人、作家、公衆、誰も彼もがその分前を持たされた。そして小さいチャックに手傳はせてシャロットが珈琲の支度を見張つてゐる間、彼等三人はテーブルに肘をもたせて、この美しい夏の夕に對ひながら飽食の快さに鱗のやうに涎を垂らして居た。

ドクター・リヴァルの出現は益々一同を活氣付けた。賑かな大勢の仲間を見出した事を喜びながら、この善良な醫師はテーブルに座を占めた。

『どうです、マダム・ダルチャントン、病人は氣晴らしがありさへすればい、でせう。』

盛上つた眼鏡の奥でドクター・ヒルスの眼が光つた。

『私は貴方の説に賛成しません。』

戦闘準備に手を顎に置いて無遠慮に言ひ放つた。

リヴァル老人は、この白いネクタイをして垢にまみれて、禿頭で頬を剃つてゐる妙な人間を見て呆氣にとられずには居られなかつた。左の眼の僅かな隅のほか満足な所の無かつた片方は、相手が視線から外れないやうに傍へ行つて坐つて横向きに話をしなければならなかつた。

『君は醫師ですか！』

リヴァル老人が訊ねた。

ダルチャントンは嘘をつかなければならない難儀から彼を救つた。

『ドクター・ヒルス……トクター・リヴァル……』

お互を引合せながら言った。

彼等は剣を合はせるまへに眼と眼とを交はす、決闘場に立つた二人の敵手のやうに禮を仕合つ

た。

温厚なりヴァルは、巴里の有名な實際家、天才的奇人に接するのだと考えて、最初は謙遜な態度を執つてゐたが、ぢきと彼は其の隙間だらけな頭の無秩序さ加減を發見した。それでドクトール・ヒルスが嘲弄するやうな侮蔑的な調子で、ふだんから熱い彼の耳を尙も熱させやうとするのに答へるため、彼も亦聲を荒らけた。

『君、私はかういふ事を……』

『いや、お待ち下さい……』

羅旬語やら、譯のわからない言葉だらけのモリエルの喜劇をつくりだ。只違つて居るのはモリエルの時代にはまだドクトール・ヒルスのやうな落伍者のタイプが無かつたので、夫を産するに混亂した思想で充滿してゐる逆上したわが十九世紀を要したわけだ。

ダルチャントンの病氣が議論の種だつた。そして如何にも滑稽な詩人の様子は、實際見物だつた。一方彼はドクトール・リヴァルがあまりに自分を假想病人扱ひにするのが氣に入らなかつたし、又一方ではドクトールヒルスが言ひ張るところの複雑な疾病の怖しい名前を聞きながら顔を

しかめずには居られなかつた。

と忽ちヒルス醫師が立上つて、

『もうやめやうではありませんか。それより紙と鉛筆を呉れ給へ……よし、さあ、夫では打診板を使つて、氣の毒な友人の患部を敷き寫しにしてお目にかけやう。』

かう言ふと、眞蒼になつて居るダルチャントンを呼んで其のフロックコートの胸をあけると、胸一杯に紙を擴げて聽診しながら打診板を彼方此方にあてがつて、順々に線を引いて行つた。それから彼はまるで子供の描いた地圖のやうなさつぱり譯の解らない形で一杯になつてゐる紙をテーブルの上に擴げた。

『さあ、皆に見て貰はう。之が實物通りに寫されたこの人の肝臓だ。どうだい、肝臓と見えるかい。本當に？、實際はこゝにある筈なのが、此處のところにある……それから他の内臓のわりにとても大きくなつてゐる。ほら、周圍がこの通り滅茶苦茶だ。まるつきりひどくやられてゐる……』

鉛筆を取つてやたらにぎざぎざを付けながらやられてゐる場所を示した。

『いりや叶はない。』

打ちのめされたやうにそれを眺めて居たダルヂヤントンは、はじめの蒼白色から黄色になつて
咳いた。

シャロットは眼が涙で一杯になるのを感じた。

『で皆さんは夫をお信じになるのですか！』

リツアル老人は失笑しながら叫んだ……『まるで野蠻人の醫學です。愚弄されて居るのですよ。』
『あ、！ 君、どうか……』

が老人は最早耳を籍さなかつた。彼はいつもよりも強いグロツグを呑んで居たので戦闘は恐し
い勢で開始された。

二人向ひ合つて拳骨を振廻しながら、醫師の名や、希臘、羅甸、スカンヂナヴィア、印度、交
趾支那等の本の名が口をついて出た。ヒルスはやたらに長い引證で勝を制してゐるやうに見えた
が、誰にも夫が正確であるかどうかは判断出来なかつた。ガリヴァル老人は其のすさまじい喇叭
の音と語句の美と力に依つて勝利を得た。

ヂヤツクにしろ、シャロットにしろ、かうした激しい議論に少しも驚かなかつた。ヂムナスで
何度も聞いて居た。ラバサンドルは一言も挟まれないもどかしさにテラースの欄干にほんやり凭
れながら、よく響く胸間聲を眠つてゐる森の木霊に送つた。

とあたりの總べてがざはめき出した。羽搏きの音が棺にして近くの城の孔雀、臆病で神経質の
孔雀は夏の日の荒模様の空で叫ぶやうな悲鳴を以て答へた。近所の小舎の中で百姓達も眼を醒ま
した。サレ婆さんと彼の亭主はバリチャンの明るい窓の方に好奇の眼を投げ、そして其の時、月
は白い小さな棟の軒に金文字の家の銘句を浮き出させて居た。

家は小なれど憩ひは大いなり！

『こんなに早く、一體何處へお出掛けです？』無精らしく自分の室から降りて来たドクツール、ヒルスが、もうすつかりお化粧をして彌撒の本を手に持つて居たシャロットに訊ねた。一緒に居たチャックは久しぶりでロード、ビームバックの氣に入りの服を着せられて居たので、間に合せに裾をおろしてはあつたがまだ矢張短か、つた。

『御彌撒に行くのですよ、貴方、今日は私が祝別パンを寄附する日なのです。ドルチャントンが言ひませんでしたか？ さあ、大急ぎです……今日は皆聖堂へ行かなければいけないのですよ。』

八月十五日の聖マリア被昇天の祝日だ。この名譽を負はされた事にすつかり上機嫌になつてゐたマダム、ドルチャントンは鐘が鳴り終つたところで家を出て、チャックと一緒に唱歌隊のすぐ傍の定めてあつた席に着いた。聖堂は祭日の装ひをして、陽に照り輝き花に飾られて居た。唱歌隊の少年や歌手達は火熨斗をかけたばかりの白衣をまとひ、唱歌場の前のひなびたテーブルの上

には村人の驚歎的である冠形の祝別パンが黄金色に堆く積んである。おまけにすべての森林監視人が青色の制服を着けて獵刀を腰に、騎銃を足許に置いて彼等も亦この公けの祭日のテデオムを歌ふ爲めに席に着いてゐる。密獵者や森林泥棒がどれだけ跋扈してゐる事か。

實際今から一年前、若しも誰か、彼女にむかつて、いつの日か彼女がドルチャントン子爵夫人の名で村の聖堂の唱歌隊の傍に坐り、祈禱書の上につましく眼を落しながら、結婚した婦人の外觀と尊敬と威信を持つたらうと告げたならば、イダ、ド、パランシーはどんなにか驚いたに違ひない。

彼女にとつて新奇なこの持役はいたく彼女を興がらせた。彼女は、チャックの上に眼を配り、彼女の書物の頁を、敬虔らしく繰りながら、デュツプの擦れる音をつましやかに立て、跪いてゐた。

献金の時に鐘を持つた聖堂守がチャックを連れに来て、献金袋を持たせるために、どの女の子を擇んだらいいかと母親の耳に囁いた。シャロットは一寸の間ためらつた。彼女は花のついた帽子や、巴里風の突張つたデュツプが平生の頭巾や上つ張りの代りをしてゐる日曜日の装ひのこの

集りの殆んど誰でもを識らなかつたのだ。そこで聖堂守が喪服の老婦人と一緒に唱歌場の向ふ側に坐つて居たドクター、リヴァルの可愛らしい孫娘を指差した。

二人の子供はいかめしい鋒のうしろから小さい歩調を揃へて歩き出した。セシルは彼女の愛らしく小さな指に較べて大き過ぎる天鵝絨の袋を持ち、チャックは襦子の帛と造花と銀糸で飾つた蠟燭を持つてゐた。二人は同じやうに可愛らしかつた。彼は體を大きく見えさせる英吉利風の着物で、彼女は美しい眞珠の色の二つの眼に輝かされた蠟人形のやうな顔を包んでゐる髪の毛を長く編み下げた無難な姿で。香のかほりにまぢる祝別パンのおいしいにほひが、日曜日に重なる宗教的祭日の呼吸そのもの、やうに二人の周圍に漂つてゐた。セシルは愛らしい様子で献金を乞ひながらやさしく微笑んだ。

チャックは謹嚴だつた。白い手袋をはめて彼の掌の中に震へてゐる小さな手が、森の中の巢から奪つて来たまだぬくみの消えない、そして彼女のやうに優しい小鳥に對して、も持つやうな切ない感じを彼に抱かせた。夫ならば早くも彼はこの小さな手が彼に親しい物で、後々彼の生涯に楽しい事があるとすればすべては其處からもたらされるといふ事を知つてゐたのだらうか？……

彼等は腰掛の間を往來した。

『ほんとにまあ可愛らしい一對だ』番人の女房は二人の通るのを見て言つた。それから聲をひそめてあたりに聞かれないやうに續けた。

『可哀さうな嬢さん！ お母様よりもつと綺麗になるだ…… あ、した不仕合せがこの方には來ましねえやうに！』

献金が終つて席に歸つたチャックはあゝも軽く執つてゐた小さな手から齎らされた魅力を尙も感じてゐるやうな氣がして居た。然も彼の幸福は夫だけに留まらなかつた。歸りがけ消防夫の兜や、森林監視人の小銃が女達の種々な色の着物にまぢつて陽に輝いてゐる小さな前庭の人込みの中で、マダム、リヴァルはダルチャントンに近づいて、チャックを午餐に連れて行きたい、そして彼の小さい集金者と遊ばせるために夕方迄留めて置きたい事を言つて許しを乞ふた。シャロットは嬉しさに赤くなつて子供のネクタイを結び直し、美しい髪の毛をふくらませてやつてから接吻した。

『おとなしくなさい！』

そして二人の少年少女は献金の時のおごりかな歩みと同じやうに祖母の前を連れ立つて進み、老人はせか／＼後を追つて行つた。

この日から若しもチャックの姿が家に見えないで、『彼は何處？』と訊く人があつた時には『森に居ますよ』といふ代りに『リヴアルさんの所です』と立派に言ひ切る事が出来た。

リヴアル醫師はオーネットと反対の村のはづれの百姓家とあまり違はない二階建に住んでゐるので、入口の戸につけた呼鈴のわきに『夜間使用』と書いてある銅の板がはつてゐるのが、僅かにまはりの家々との相違を見せて居た。古い家らしく壁はくろづみ雨戸はふくれてゐた。が遣りかけた儘でそれなりになつてゐる當世風の飾りの後を見ると、以前に夫を若返らせやうとした氣持があつたのが、急に不幸が來た爲に折角若くならうとした家の化粧が途中で罷められてしまつた事が窺はれた。それで入口の戸の上には雨除けの亜鉛の庇が硝子の屋根を置かれるのを待ちながら、呼鈴を鳴らす人の頭上に空しい縁だけの冠を置いてゐた。又樹木の植わつて居る前庭の右手にも離れ家を建てかけた痕跡があつて、一階だけで罷めてしまつたのに、窓と入口が四角い孔を開いてゐた。

この氣の毒な人達の「不幸」はちやうど修繕の最中に遣つて來たので、愛する者を持つ人々には了解されるだらうところの迷信から工事は中止され、放棄されたのだ。

それは今から八年前の事で、八年以來すべては其の儘になつてゐる。そして村中の人々がすっかりそれに慣れてしまつてゐるにしろ、この中途半端の工事は家全體に、すつかりのぞみを失つた。そして事毎に『何の甲斐があるのだ！』と獨語を呟く人のそれといふやうな失望の態を與へて居た、家の背後、漆喰塗りの廊下の奥に波を打つ緑のカーテンをひろけてゐる庭も亦放り捨てられたまゝの姿でゐる。草は徑を埋め、菖か何ぞの廣い葉が最早水を噴いてゐない水盤を包んでゐた。

住む人達の様子も物の夫と同じやうだつた。八年後の今でも白い帽子一つかぶる事無しに娘のための喪服をまつてゐるマダム、リヴアルから、年に似合はない嚴格と憂鬱の表情を幼い顔に泛べてゐるセシル、三十年からこの家に仕へて彼等の不幸の重みの一端をわかつてゐる年取つた女中迄誰も彼も沈黙の裡にかくされた同じ悩みと同じ憾みをもつて生きて居た。

たゞドクツールだけが局外者だつた。絶間無く外の空氣に觸れるのと、道で氣をまぎらせるた

め、それと多分は度々人の死ぬのに出逢ふ人間の哲學的思想が、開放的で快活な生れつきの性質を一層完成させたのだらう。

マダム、リヴアルにとつては母親の佛を再び眼にするやうな幼いセシルが傍去らない事は彼女の悲しみを絶えず新たにするものだつたが、ドクツールは反對に孫娘が成長して行く姿を、失つた娘を少しづつ、取り返して行くやうな氣で眺めながら益々上機嫌になつて行つた。

それで一日中外に暮して夕方食事の後、妻君は何か家の事をして居て子供と二人きりになる時だ、快活と青春、そして大聲の艦の歌が彼に還つて來るので、それは戻つて來たマダム、リヴアルが投げかける無言の非難、こんなにも言つて居るやうな眼の前にびつたり聲をひそめる『忘れたのですか？』彼等が打ちのめされたこの大きな不幸には彼のせいもまぢつて居るのだと云ふやうに。

此の單なる悲しみの回想は彼を狼狽させ、沈黙させるに十分だつた。そして彼は孫娘の編みさけの髪を弄びながら黙つてしまふ。

かうした中で、セシルの少女時代はいつも悲しく過ぎて行つた。彼女はめつたに外に出なかつ

た。庭でなければ、家の人が藥部屋と呼んでゐる名簿や、乾燥中の草や根で一ぱいになつてゐる廣い室で日を暮して居た。この部屋の隣が、そんなにも惜しまれてゐる若い婦人の室で、その入口はいつも閉ざされてゐた。其處には短い彼女の生涯のあらゆる變遷が、遊びや、學問や、信仰や、衣裳や、何等かの記念物によつて記されてゐた。書籍、衣装戸棚におさめられた衣服、壁にかけられた初聖體の記念額、はや黄色に色のあせた形見の數々だ。その室には母親唯一人がはかない物の上に見せてゐる過ぎ去つた時の足跡に、その憾みを露も和ける事なく敬虔な心遣ひもて遣入つて行くのだつた。

度々幼いセシルが墓穴か何ぞのやうに閉ざされたこの入口の前に考え深く立つてゐることがあつた。

おまけに彼女はあまりに考え込む事が多かつた。彼女は一度も學校に入れられなかつた。まるで村の他の子供達との接觸を恐れでもするやうに、そしてこのひとりほつちは彼女に害をなした。彼女の小さな體はあまりに動かさない事によつて疲れた。子供達が謹嚴な人達から叱られたり、笑はれたりする事の無い時でなければしない理由の無い叫び聲、氣遣ひのやうな足踏、かう

した喧噪の生活が欠けてゐたのだ。

『あの子の氣をまぎらさせなければいけない。』ムツシウ・リヴアルは妻君に言ひ言ひした。

『デルチャントンの息子なら可愛らしくて年も大抵同じだし、あの子ならお喋りはしない！』

『ですが……あの人は何ですか？ 何處から来たのです？ 誰もよく知つて居ないぢやありませんか……』

マダム、リヴアルは例に依つて不安らしく答へる。

『立派な人達だよ、お前。主人は實際變人だ。が解るだらう、藝術家といふものは皆あれだ。妻君は恰憫ぢやないがよい人間だ…… 身許は大丈夫、俺が引受ける。』

マダム、リヴアルは頭を振つた。彼女は夫の眼識に信用がなかつた。

『お、！ でも貴方……』

それから彼女は咎めるやうな眼付きで歎息をついた。

リヴアル老人は罪人のやうに額を伏せた。が彼は言ひ張つた。

『用心おしよ！ あの子は退屈してゐる。今に病氣になるだらう。それに何だ。チャックもセシ

ルもまだ子供だ、一體どんな事になると思ふのだ？』

終に祖母は決心をして、チャックはセシルの友達となつたのだ。

彼にとつて新しい生命が拓けたのだ。はじめはたまに來て居たのが、中頃度重なり、しまひには毎日になつた。

マダム・リヴアルはちきと、此の無口で優しい少年の美質に愛情を持ちはじめた。セシルの同じ性質は悲しみのためであつたが、彼のは大様から來て居たのだ。彼女は間もなく子供がうつつちやつて置かれる事、服のボタンはいつもとれてゐたし、一日中勉強もさせられないで居るのに氣が付いた。

『貴方は學校へ行かないの、チャックちゃん？』

『え、行かないの。』

そして彼は、『母さんが教へるの。』と付け加へた。何故なら子供の心には時々かうしたデリカシーの實がひそんでゐるものだ。

若しもさうだつたら、鳥のやうな脳味噌の持主である可哀さうなシャロットはさぞ困る事だら

う。そればかりではない。家中の人が彼をかまひつけないといふことは誰の眼にもたやすく見られた。

『私には解りませんわ、あの人は何だつてあの子を朝から晩迄ほつたらかして置くのでせう。』

マダム・リヴァルが良人に言った。

『仕方が無いさ！』ドクツールは友人を辯護するやうに言った『勉強が嫌ひなのだらう。でなければ出来ないのかも知れない。頭が少し悪いのだ。』

『さう、頭が少し悪い。それから継父が愛してゐないので……継子といふ者はいつも除け者にされるのですよ。』

チャックは眞實の友達といふものを此の家に見出した。セシルは彼を好いて、もはや彼無しには居られなくなつた。

彼等はお天気の日には庭で遊び、さもない時には薬部屋へ行つた。マダム・リヴァルはいつも其處に居た。エチオルには藥劑師がなかつたので、良人の簡單な處方、鎮痛用の水薬や、散薬や舍利別等を自ら調劑した。彼女は二十年もこの仕事をしてゐるのですつかり經驗を積み、それで

醫師が居ないでも多くの人達が彼女に薬を貰ひに來た。子供達はかうした患者が來るのを面白がつた。不透明硝子の瓶に貼つてある羅旬語の薬の名をときれ／＼に讀んで見たり、鉄をもつて貼紙を切り抜いたり、小さな藥袋を貼つたりした。彼は男の子の不器用さで、そしてセシルは不斷に勤勉な引籠勝ちの生涯の準備をしてゐる有益な婦人となるべき小娘の眞面目な注意を以て。彼女は眼の前に祖母といふ手本を持つてゐた。その女はまづ藥部屋を受持つてゐる外、良人の書籍を整理し、處方を記し、藥禮の收入から、その日歩いた往診を記して置くことまで手一つで遣つてゐた。

『さあ、今日は何處と何處へいらつしたのですか？』
ドクツールの歸りを捕へて言ふ。

好人物は途中から其の半分は忘れてゐる。そしてわざとであるか、うつかりしてゐてだかは知らないが、いつも其の一部分を省いてしまふ。何故なら彼はうつかりであると同じ程に寛大であつたのだ。請求書が二十年このかた村の家々ところがつてゐる。あゝ！ 若しも妻君が居なかつたら、どのやうな滅茶々々であつたらう。彼女はしづかに彼を吐り、彼のグロッグを量り、細か

い身装の世話を焼く。それで彼が出掛ける時孫娘迄がすっかり眞面目でかう言ふやうになつた。
『さあ、お祖父さん、にいらつしやい。ちやんとなつてゐるか見て上げますから。』

この人物の情誼にはどこか神々しいところがあつた。それは無邪氣に澄んだ子供らしい、が不
断に眼ざめてゐる子供のこすさの無いその眼の中に讀まれた。廣く世間を歩いて、多くの人、多
くの國を知つてゐたにも拘はらず學問の力が彼を無邪氣に保たせてゐたのだ。彼は惡の存在を知
らなかつた。そしてすべての生物、動物に對して迄も人間に對すると同じやうな寛大ないは、
見を持つてゐた。それで二十年以來の伴侶である彼の馬を疲れさすまいとして、僅かな登り坂、
少し峻しい道に出逢ふか、さうでなくとも馬が一寸足を引摺りさへすれば、彼は馬車から降りて
帽子をかぶらず、日向だらうが、風が吹かうが、雨が降らうが、暢氣に後をついて來る動物の手
綱を執つて歩き出す。

此の馬とこの主人は全く切つても切れない深い間柄だ。彼はドクトールが往診の間に時々神輿
を据えてなか／＼立上らない事をよく知つてゐた。それで彼は病家の入口で手綱を振り動かして
催促する。又晝飯なり夕飯なりに歸らなければならぬ時分が來ると、往來の眞中に立留つて強

情に家の方に頭をむける。

『やあ、成程お前の言ふ通りだ。』

リヴァル老人が言ふ。そこで彼等は大意で引返すか、さもなければ何時迄も争つてゐる。

『あゝ！ 仕方がない奴だな。』たう／＼ドクトールがやさしく怒る『こんな動物があるものなら
うか？ 俺はもう一軒どうしても行かなければならないのだ。それなら一人でお歸り。』

さうして彼はぶり／＼しながら驅け出す。と同じやうに強情な馬は、本と新聞だけで軽くなつ
た馬車を曳きながら、しづかに村の方へかへつて行く。往來で行き逢つた百姓達がそれを見て言
ふ。

『はて！ リヴァルの旦那、又馬といがみ合ひをやらつしやつたな。』

さてそれからといふもの、エチオルのまはりの往診に二人の子供を連れて行くのがドクトール
の大きな喜びになつた。馬車は大きかつた。三人でゆつくり載られた。で一度小さな二人の笑顔
の間に挟まれると、彼は自分の家の悲しみが、苦痛をつ、みゆすり眠らせるこの自然の美しい景
色の中に飛び去つて行つたやうな感じる。彼は子供達と一緒に、自分も子供であるやうに打ち興

じた。チャックは喜んだ。彼はこのやうに廣い澤山の牧場や、葡萄の木や、水を見た事がなかつたのだ。

『其處の畑に植わつてゐる物をあて、御らんない。』セシルはセールの岸迄浪を打ちながら頷いてゐる廣い緑の傾斜の前で言ふ『大麥？ 小麥？ 裸麥？』

チャックはいつも間違へた。ですぐとそれは喜びや笑ひになつた。

『一寸お祖父さん！ あれが裸麥ですつて……』

それから彼女は、つんだ小麥の穂、芒のある大麥、燕麥の浪を打つてゐる房、桃色のサンフォアン、紫の紫雲華、黄金色の芥子畑、牧場に展べられた之等の毛氈、それから秋が來て廣くなつた野良の其處此處に山と積まれる之等の草を見分ける事を教へた。

何處で、も醫師が呼ばれた先で子供達は歓迎された。ある時は一軒の農家で、ムッシウ・リヴアルが居間へ通ふ木の梯子を昇つてゆく間、人々は彼等を擧りたての雛や、パンを籠から出す所や、牛小舎の入口で乳を搾るところや、それからオルヂユとかイエールとかエツソソヌの川に臨む、緑の橋といひ大きな壁や隙だらけの石組みに實際以上に古めいた光景を與へてゐる水苔とい

ひ、昔の城塞の佛を持つてゐる水車場を見せに連れて行つた。

粉埃が、床や壁の震へてゐる中に絶間なく立ちのほつてゐるこの大きい眞白な部屋に飽いた時には、彼等は水車の板が水を打つてゐるのや、水門のところであつたぎつてゐる水や、上の方枝垂柳の影の暗いおだやかな水をかけた小川の上に鴨の群が遊んでゐるのを何時迄も何時迄も眺めて居た。

かうした百姓の家の病氣はまことに妙な物だつた。家畜達は定めの際に出たり入つたりした。若しも夫が病氣ならば妻が代つて彼の仕事をする。付き添つたり、心配したり、悲しんだりするひまさへ無かつた。土地は待つてくれない、家畜もさうだ。女房は一日中外で働らく。そして夜は疲れて前後も知らず眠つてしまふ。白が軋つてゐる部屋、でなければ牛の啼いてゐる牛小舎の階上に寝てゐる可哀さうな男は戦鬪中の負傷者だ。誰も彼の世話をしない。わづかにもの蔭に移し、立木か堀の縁によりかゝらせるだけだ。一方戦鬪はすべての腕が戦を続ける事を要求してゐる。それと同じ事だ。彼の周圍では麥を打ち、穀物を篩ひ、鶏はしやがれ聲を立て、ゐる。絶間ない活氣と活動だ。

そして其の時家の主人は壁の方にあきらめの顔を向けて無言に苦痛を忍びながら、暮れて行く夜が、硝子を白らませる朝が、或ひは死、或ひは生命をもたらすのを待つて居るのだ。

それだから彼等が行つたさきの家で、子供等は悲しみといふものに出逢はなかつたのだ。人々は彼等をちやほやした。いつも彼等の爲の御菓子、馬の御馳走の選り分けた燕麥、祖母への土産の果實の籠があつた。

親切で慾が無いドクツールは皆からこんなにも愛されて居た！そして百姓は彼を愛してゐながらごまかした。

『何ちう情深い方だんべ……』かういつて噂をした『あゝ！その氣になればよ、どんなにも金持になれるだに！』

しかし彼等は少しも藥禮を拂はない工夫をした。そして夫は難しい事では無かつた。診察が済んで一軒の家から出ると、忽ち彼はしつこく森しい群集にとりまかれる。王の巡幸の馬車にして、動き出さうとするドクツールの粗末な馬車ほどに嘗て取り巻かれた事は無かつたらう。

『リヅアルの旦那、俺の娘つ子には何をやりますだ？』

『そいから俺のこの亭主は、リヅアルの旦那、どんなにしますだ？』

『お前様が下さつしやつた粉は、吞ませるでがすか？こするんでがすか？もうちよつびりありましねえかね、俺等ではもう了へました。』

ドクツールは銘々の質問に答を與へ、舌を出させて見たり、脈を押へたり、散藥の小さな包を分けてやつたり、規那葡萄酒や何やかや、有りつたけの物をやつてしまふ。そしてからつばになり、引き抜かれ、絞りとられた揚句、地に働く人々の祝福と感謝の中をやつとの事で家に向ふ。彼等は『何てありがたい方だ！』と叫びながら片方の眼を拭ひ、『何てごまかしの利く人だ！』かうでも言はうとするやうに片方の眼をこすさうにしばだ、く。それでも最後の時に、木履をはいた小さな使が四里も離れた所の病人のために、大急ぎで彼を迎へに來なかつたなら、夫こそ合せなのだ！

ようやく家に歸られる。夕陽に照らされながら、長い枝を伸ばしてゐる森の小徑や、燕が飛びかひ、子供達が戯れ、家畜の群が散らばつてゐる村の道を行くこの歸途はなつかしいやはらぎに満ちて居た。夜の迫り來る方は早も濃い藍色になつてゐるセーヌ河は、はるかな地平線上を黄金

の波もて流れてゐる。この輝きを地の色にして、棕櫚の木のやうに上の方だけ鬱蒼としてゐる細い木の茂み、丘に沿ふてならんでゐる白い家が、忽ち眼に見るといふよりは夢に描かれる東洋の族、夕方聖家族が山道を辿りつゝ、あるユダヤあたりの町の一つといった情景を偲ばせた。

『ナザレの景色に似てゐるわ。』

幼いセシルは聖書を思ひ出して言つた。そして二人の子供は小聲で物語を話し合つた。その間に馬車は、度々チャックも仲間入りをしたところの楽しい夕飯の方へ走つて行つた。

かうして一緒に歩いてゐるうちにムツシウ・リヴァアルは、ダルチャントンの少年が僅ばかり受けた學問が大いなる痕跡を留めてゐたところの開發された智識と、集中した深味のある才能の持主である事を知つた。彼は直きとこの哀れな少年が家庭に於てどれだけ放られてゐるかといふ事に氣付いた。そして親達の無頓着を自分が憤つてやる決心をして、それから晝飯の後今迄午睡に費してゐた時間に一時間づつ、彼を勉強させる事にした。

この食後の午睡の習慣がどんな物であるかを知つてゐるところの人々には、之を罷めるのにとれだけの勇氣と犠牲的精神が必要であるかゞ解るだらう。

チャックは熱心に聽んだ。勉強にふさはしい靜かなリヴァアルの家で、學問は彼にとつてたやすかつた。セシルは大抵いつも其の稽古に列つた。幼い友達が讀むのを、ましく聞きながら、彼が了解するのを授けるためかのやうに愛情にみちた眼の光を投じてゐた。そして晝飯の後で祖父が課題の帳面をテーブルの上に據けて、満足と驚愕の『やあ、之は上出来だ！』と言ふ時、すっかり誇らけにも嬉しく感じるのだつた。

母親の許で、チャックは彼の勉強の事を語らなかつた。いつか彼女に、詩人が其の的確で恐惶的な鑑定を以てすつかり判断を謬つてゐた事を意氣揚々と證據立てたかつたのだ。

そして親切なドクツールと彼との間の陰謀はたやすく秘密を保つてゐた。何故といふのに、バルヴァ・ドミユスの住人は日一日と彼等の子供をかまひつけなくなつて行つたのだ。彼は自分の思ひのまゝに家も出れば歸りもした。行きたい所に行つて、只食事の爲にだけ歸るので、毎日新しい客を迎へて一日毎に廣さを増して行く食卓の隅に坐つた。

彼の孤獨を充たし、智的環境と呼んでゐる此の空虚の喧噪を彼の周圍に留めて置くため、ダルチャントンは落伍者共にすつかり家を開放した。併し彼は彼の財寶を窓から捨てる事を好まな

つた。彼は頷るけちんぼだつたので、シャロットが怖る怖る『もうお金が無いのよ、あなた』と云ふ度に、さも面白くなさうな佛頂面と如何にも力強い『もう無いのか？』で答へるのだつた。しかし彼の性格にあつては虚栄心が他の總べての物に勝つてゐた。それで自分の幸福を見せびらかす事、主人公振る事、この貧乏人達の嫉妬心をそゝらせる喜びが、收支等といふ事の上に勝利を博したのだ。

落伍者の仲間では、彼處かしこ空氣の清い美しい田舎では、よい食卓とよい寢床に、万一の場合若しも汽車に乗りおくれたら、ありつけるのだといふ事が知れてゐた。それはピヤホールの隅から隅に知れ渡つた。

『誰かダルヂヤントンの家に行かないか？』

それから汽車賃をやつとの事でかきあつめて、そろ／＼と前觸れもなく押しかけて行く。シャロットは疲れ切つてゐる。

『早く！ マダム・アルシヤンボウ、お客様よ。兎を一匹殺して頂戴……大急ぎでオムレッツを一人前！』

時には兎が二匹の事も、オムレッツが三つの事もある。

『やれ／＼、お客様！ 又違つた顔だね！』

番人のおかみさんはおつたまげながら言ふ。なるほど絶えず新らしい顔、といふよりも新らしい頭、髭、様子だ！

ダルヂヤントンは来る人毎を家中の隅々迄引き廻して、その飾りつけを見せびらかす事に何時も變らない満足を感じた。それからこの胡麻鹽髭の不良老年共は、牧場に放つた年取つた馬の氣違ひじみた跳躍と、快活の嘶きを以て街道や水のほとりに四散する。

爽かな景色の中で、此の人達の毛の摩り減つたシルクハットや、擦り切れた黒の禮服、巴里のどん底生活の苦痛にやつれた顔は、一層きたならしく一層萎れて見えた。

それから食卓が彼等を一所に集めた。食堂は絶えず開かれてゐるので、食事と食事の間にパンの粉を掃ふひまもなかつた。

午後中飲むのと、議論するのと、煙草をふかすのに過ぎされた。

森の真中のピヤホールだ。

ダルヂヤントンは得意だつた。彼は例の萬年詩を繰り返し、同じ計畫を十遍も述べ立て、上等の葡萄酒と家として總べてを持つてゐる紳士の權威を以て、事毎に『で俺は……で俺は……』を言ふことが出来た。シャロットも亦幸福だつた。その移り氣な性質とボヘミアンの本能によつて、かうした忙しい明け暮れは彼女のための青春の繰返しだつた。人々は彼女に諷ひ、彼女を歎美した。さうして其の戀に忠實であるながら、詩人を陽氣にし、その幸福の價を量らせるために程よく手管を用ひる事を知つてゐた。

日曜日には彼女は落伍者の妻君等の訪問を受けた。

之等の健氣な女達は一週間で死物狂ひに働いてゐるので、たまさか夫達から彼等と共に外出する贅澤を許されるのだ。この女達の前で彼女は少しばかり城主の夫人を氣取つた。彼女等を『私のよい娘』と呼び、彼女等の爲の急務への化粧室に路易十五世好みの化粧着を置いた。

しかしすべての落伍者の中で、オーネットの一番の入り浸りはやはりラバサンドルとドクツール・ヒルスだつた。ドクツールの方ははじめ四五日の筈で泊り込んだのが、もう何ヶ月といふ間動かうとはせずつかり自分の家にしてしまつた。彼はそれを他の連中に誇り、詩人の肌着をつ

け、帽子に紙を入れてかぶつた。何故といふのにこの放浪家の頭はその小さい事小さい事、夫を見たと人はこのやうな小さな頭によくもそれほど澤山な智識を詰め込む事が出来たものだと考へる。そして夫以來、かうした集積の大した混雜を最早驚かなくなるのだ。

かうした工合でダルヂヤントンはもはや彼無しでは過されなくなつた。彼は自分の傍に假想病氣のあらゆる苦痛に對する注意深い相談相手を持つてゐるのだ。でヒルスの蕪蓄に大した信用を持つてではなく、その命令を一つとして用ひるのではなかつたが、その存在は彼の心を安からしめた。

『俺がなほしてやつたのだ！……』

片方では得意で言つてゐる。それでドクツール・リヴァルがこの家で大分巾が利かなくなつた事は確かだつた。

さうかうしてゐるうちに日が重なり、月が過ぎた。秋はバルヴァ　ドミユスを其のメランコリックな霧でつ、み、冬の雪が破風を蔽ひ、四月の驟雨が響きのよい石盤屋根ではねかへつた。そして又新しい春が、花の咲いたリラの枝で美しい縁飾りをした。その他には何の變りも無かつ

た。詩人は何か又家の作りをかへる計畫を立て、頭の中では新しい別の病氣を作り出してゐたので、それを又ヒルスがとても奇妙な新しい名で飾り立てた。シャロットは相變らず何といふ事も無しに只美しく感傷的だつた。チャックは大きくなりそして大層勉強した。方式も規則も無い十ヶ月の間に彼は驚くべき進歩を遂げて、今では同じ年の學校の生徒にくらべてより廣く深い智識を持つてゐた。

『私は一年で、この子を之だけの者にしたのです』ムツシウ・リヅアルは誇らしげにかう言つた『今度は中學校にお入れなさい。きつと何かしらになりますよ、夫は確かです。』

『あゝ、ドクツール、ドクツール！ほんとに御親切な……』

シャロットは母親の無頓着に引きかへての此の他人の心盡しにかくされた間接の非難に少しは恥しく感じながらかう叫んだ。ダルジャントンはより冷やかだつた。彼はその中考えて見る事、中學校の教育には大なる欠陥があるといふ事を言つた。シャロットと二人きりになつた時、彼はありつたけの不機嫌をさらけ出した。

『彼奴は何だつて餘計な世話をやくのだ？ 自分の義務は自分が知つてゐる。俺のする事を教へ

やうといふのか？ そんな暇に自分の醫者の事でも勉強するがいゝさ。へほ醫者奴！』
が實際は彼の自尊心をひどく傷けられたのだ。この時からおごそかな様子で度々こんな風になつた。

『ドクツールの言つた事はもつともだ。この子供の事を考えてやらなきゃいけない。』

彼は考へてやつた。あゝ！

『此處へ御出で、坊主！』

或る日ヒルスとダルジャントンと一緒にひそ／＼話しながら庭の中を歩きまはつてゐたラバサンドルが幼いチャックに怒鳴つた。子供は少し心配しながら近寄つて行つた。何故なら詩人も其の友達もめつたにふだん彼に聲をかける事が無かつたからだ。

『誰があれを拵へたのだい……ブウ！ ブウ！ 庭の奥の……高い胡桃の木の上の栗鼠の良よ……』

チャックは叱られる事と思つて蒼くなつた。が嘘を言ふ事が出来なかつたので彼は答へた。
『僕です。』

セシルが生きた栗鼠を欲しがったので、旨い工合に針金を組み合はした鼠を木の間に懸けて置いたので、まだ捕れてはゐなかつたが確かにとれるやうに出来てゐるのだ。

『お前が拵へたのかい、たつた一人で、手本も無しに？』

彼はこわく答へた。

『え、さうです、あなた、お手本無しで。』

『素敵だ……とても素敵だ。』肥つた聲樂家は他の者の方を見ながら繰り返した『この子は生れつきの機械師だ。たしかにさうだ、指がそのやうに出来てゐるのだ。どう思ふ？ 天性だ！ 天分だ！』

『あ、！ 天分……に違ひない。』

詩人は偉らさうに頭を振り立て、言つた。

ドクツール・ヒルスも反り返つた。

『さうだ、大した天分だ！』

子供の事はもう放つて置いて、彼等は再び果樹園の小徑をぶらつきはじめた。おごそかにゆつ

くりと改つた身振りをしながら、そして一人が何か大切な事を言はうとする場合には三人して立留まるのだ。

夕方食事の後テラースで大した討議が始つた。

『さうです伯爵夫人』ラバサンドルは既に彼等の間で決議された何かの真理に彼女を服させやうとするかのやうに言つた『来るべき時代の人間は職工です。貴族の時代は去り、中流階級もはや後何年といふところです。胼胝の入つたその手と、彼等の神聖な茶葉服を輕蔑なさい。二十年の後にはこの茶葉服が世界を支配するのです。』

『この男の言ふ通りだ……』

ダルチャントンがおごそかに口を出した。ドクツール・ヒルスの小さな頭も熱心に賛成した。

不思議な事に、デムナス以來社會問題に關する音樂家の長廣舌に慣れつこになつて、面白くないのに少しも聞かうとしなかつたチャックが、其の晩は深い感動を以て耳をすました。この聯絡のない言葉が、どのやうな目的に向ひ、誰の生涯を踏みにじらうとするかを知つてゐたかのやうに。

ラバサンドルは職工生活の楽しさを語つた。

『おゝ！ 獨立獨歩の麗はしい生活だ！ 俺はそれを語めた事をほんとに後悔してゐる。あゝ！ もう一度なれたら……』

それから彼はアンドレの鐵工所の鍛鐵工だつた時代の話をした。彼は其の時分には只ルヂツクと云つたので、このラバサンドルといふのはロアル河の岸のブルターニユの大きな村である彼の生れ故郷の名なのだ。彼は帶のところまで裸體で、元氣な仲間と一緒に調子よく鐵を打ちながら鍛鐵爐のそばで過した楽しい時を思ひ出した。

『ねえ！』彼は言つた『お前達は俺が芝居で大成功をした事を知つてゐるだらう。』

『知つて居る。』

ドクツール・ヒルスはしやあ〜と答へた。

『それで賞與として巻煙草入とメダルを呉れたらう。が、かうした記念物は俺にとつて大切な事は無い。一つだつて之に匹敵する物はないのだ。』

かう言ひながら襦袢の袖を肩までまくり上げて、熊の脚のやうに毛むくじやらの腕を露はした音

樂家は、赤と青の大きな黥、櫻の葉の環の中に二つの槌を組み合はせて『労働と自由』といふ字を花模様で現はしてあるのを見せた。遠くから見るとそれは拳骨で打たれた痕が消えずに残つてゐるやうに見えた。そして不幸な彼は摩つても、ポマードを塗つても消えない此の黥が、彼の劇生活の大なる失望をなしてゐる事は言はなかつた。それは擔骨屈筋の運動を妨けて、ラ・ミュエツトとかエルキュラノムの主人公の、露はな腕を差上げる太陽の國の勇士に扮する事をさせなかつたのだ。この黥を消す事が出来なかつたラバサンドルは意氣揚々と夫を奉じ、見せびらかし、旗のやうに振りまはした。あゝ！ ある晩工場で彼が怪我をした仲間のために歌つてやつてゐるのを聞いてゐたナントの劇場の監督に呪ひあれ！ 自然が彼の喉に置いたたぐひなき聲にも呪ひあれ！ 若しも彼の進むべき眞の道から外れさせられなかつたら、今頃彼はアンドレ鐵工所の職工長である彼の兄ルヂツク同様、すばらしい俸給をもらひ、老後のための恩給の保證も得て、家も燃料もあかりも無料で彼處に居られたのだ。

『さうですわ、本當にいゝ事。』シャロットは臆病らしく言つた『ですが、さうした生活に耐へるのにはよつほど力がいらしますわ。貴方も先に仕事が大變辛いと仰つたでせう。』

『辛い？ さう、弱虫には辛いだらう。が今のところそれは問題ぢや無いやうですよ。當の本人は立派な體の持主だと思ひますがね。』

『立派な體だ。それは俺が受け合ふ。』

ドクツールが嘴を入れた。

彼がさう言つた時から、もはや何も言ふべき事は無かつた。

がシャロットは尙も反對を試みた。彼女が言ふのには、すべての人間はみんな同じではない。或る仕事に耐へられない、より華奢な人間があるといふのだ。

とそこでダルチャントンが色をなして立ち上つた。

『女といふ奴はみんなさうだ。』荒々しく怒鳴つた『この人間のことを考えてやつてくれと言つて歎願する——しかも面白くもない。恐れ入る代物なのだ——それでも考えてやつた。友達にも心配して貰つた。と今になつて餘計な世話だといふ顔をする！』

『あら、さう言つたのではありませんわ。』

主君の怒りを招いたのを悲しみながらシャロットが言つた。

『なに！ さうぢやない。さう言つたのぢや無いのだよ。』

他の二人も繰り返した。

そして人々が自分をかばつてとりなしてくれるのを見た哀れな女は、ぶたれた子供が人にかばはれた時でなければ泣く事をようしないのと同じやうに泣き沈んでしまつた。チャツクは急いでテラースを去つた。彼女をそんなにも苦しめてゐる此の悪人の頭に飛びかゝる事なしに、母親の泣くのを眺めるなど、いふ事はとても彼に出来なかつたのである。

其の後暫くの間は何の話も出なかつた。たゞ子供は母親が彼に對する態度が之迄とは違つてゐる事に気が付いた。彼女は今までよりもしげ／＼と彼を眺め、接吻をし、彼女の傍に引き寄せて置いて、其の抱擁の裡に、間もなく別れなければならぬ人に持つやうな烈しい情熱を感じさせた。その事は或る日ダルチャントンが太い口髭をひきつらせるやうな苦笑ひを浮べて、ムツシウ・リヴァルに言つてゐる言葉を聞いた時と同じほどに彼の心を騒がせた。

『ドクツール、貴方の生徒の事を考えてやつて居ますよ……近々決定するでせう。貴方もお喜びになるだらうと思つてゐます。』

それで善良なドクツールは喜びにみちて家に歸つて行つた。

『御覽、』彼は言つた『俺はあの連中の眼を開けてやつたのだ。』

マダム・リザアルは頭を振つた。

『どうですか？……私はあの冷かな眼が気に入らないのですよ。何だかあの子のために心配です。敵に何かされるより、放つて置いて貰ふ方がよつほどよう御座んす。』

チャツクも此の考えに賛成だつた。

十一 人生は小説ではない……

或る日曜日の朝、ラバサンドルの他に騒々しい落伍者をひと積み積んで来た、十時の汽車が着いて間もなく、例の良のまはりで栗鼠を見張つてゐたチャツクは、彼を呼んでゐる母親の聲を聞いた。

聲は詩人の書齋、敵の怒りと暇つぶしの叱言と辛氣臭い見張りが降つて来る森嚴な書齋から出て居た。

母親の調子によつてか、それとも或る人々に於て特に過敏な神経の鋭さによつてか、チャツクは『たうく今日だ……』と獨語をした。そして震へながら螺旋梯子を昇つて行つた。

十ヶ月以來少しも彼がこの至聖所に這入らなかつた間に、種々な變化が其處に行はれてゐた。彼には場所の威嚴がそこなはれたやうに見えた。日光にあせ、煙管の煙にいぶされた壁、破れたアルヂエリアの長椅子、幾ヶ所となく罅のいつた檯のテーブル、どろくしのインキ壺、議論とぶらつきが居酒屋に漂つてゐる凡俗の氣を此處にも持つて來た事を語つてゐた。

たゞ一つアンリ二世風の椅子だけが變らない威嚴を以て相變らず此のこはれ物の真中に控へてゐた。ダルヂヤントンにはそれに腰をかけて子供を迎へたので、ラバサンドルとドクツール・ヒルスは陪席判事のやうに其の兩側に立ち、そのほかベリセリユスの甥と後三人の胡麻鹽鬚は煙草の煙につまねながら長椅子の上に列んで居た。

ヂヤツクは夫等の總べてを只一眼見た。法廷、裁判官、證人、それから母親は少し離れて窓の際に立つて遠く景色を凝視めてゐた。之から起らうとする事に就いて、彼女の注意と其の責任を取り除かうとして、もゐるやうに。

『こない、へ來い。』

詩人が言つた。古い檜の木の椅子は時々彼にかうした古めかしい言葉を使ひたい心持を起させるのだ。

このわざとらしい言葉を言ふ彼の聲は如何にも冷やかな調子、如何にも剛腹らしい形式を持つてゐたので、腕椅子夫自身が口を利いたのぢやないかと思はれた程だ。

『俺は度々お前に「人生は小説ではない」といふ事を言つて來た。お前は俺が文學的争鬭の先頭に

立つて、時と力を惜しむ事なく、屢々疲れ、が言て降る事なく苦しみあらがひ、且運命に抗して何處迄も勇敢に戦つてゐるのを見て、夫を證明する事が出來た筈だ。今度はお前が戰場に立つ番だ。お前はもう大人になつたのである。』

可哀さうな少年、彼は僅か十三に餘つてゐるばかりだ。

『お前は大人となつた。年と文ばかりでなく、勇氣にも欠けてゐないといふ事を見せなければ可けない。俺は一年あまりといふもの、お前の心身を自由に發達させ、筋肉と精神に必要な總べての遊戯を許してゐた。俺がお前を放つて置くといつて咎めた者もあつた。あゝ！ いらざる事だ！ それどころか俺はお前を監視して一分間も眼を放す事は無かつたのだ。この綿密な長い働き、わけても誇るに足るこの的確な觀察によつて、今や全くお前といふものを了解するにいたつた。私はお前の天性、才能、氣風が如何なる物であるかを見た。お前の最大なる利益の爲に如何なる方面に事を運ぶべきかを了解した。それで俺の見る所をお前の母親に通じた後實行にとりかゝつた。』

説教の此の場所でダルヂヤントンは、ラバサンドルとドクツール・ヒルスの讃辭を受ける爲に

言葉を切り、黙つて長い煙管に没頭してゐたベリゼリユスと其の他の連中は、首振人形のやうに頭を縦横に振りながら勿體振つて繰り返した。

『よし、大いによし！』

チャックは呆氣にとられて、まるで稻妻を帯びた雲のやうに、彼の頭上高く過ぎるこの不可解な言葉のうちに何かしらを捕へやうと試みた。彼は心の中で考えてゐた。

『一體何が今に頭の上に落ちて来るのか？』

シャロットはと言ふと、彼女は何か知らないが遠くの物に見入りながら、眼に手をやつて相變らず外を眺めてゐた。

『さあ、本題に入らう』詩人はいきなり椅子から立ち上ると、鞭の一打ちのやうに子供を叩きつけたすさまじい聲で言つた『今読んで聞かせる手紙が、すべての説明以上によく了解させるだらう。はじめてくれ、ラバサンドル。』

軍法會議の書記のやうにおごそかに、音楽家はポケットから、百姓か何ぞの書いたみだいな不細工に封じた手紙を取り出して、二三遍朗讀聲をあけてから讀み始めた。

拜啓、先日の御手紙で申上候通り、お前の友達の子の事支配人に話し候。年も若過ぎ、見習となる資格は無けれど、支配人は私の工場の見習になる事を許してくれ候。私の家に寄宿させ、四年後には立派な職工に致すべく候。家内一同無事。女房とゼナイドよりよろしく。ナンテよりもよろしく。

ルヂック。

『どうだ、チャック！』ゲルヂヤントンは眼を光らせ、腕を振つて言つた『四年後にお前は立派な職工になるのだ。この屈從の世界に於て、最も立派な、最も誇るべきものだ。四年の後にお前はこの神聖なもの、立派な職工になれるのだ。』

彼にはよく聞えた。あゝ！立派な職工。たゞ彼にはよく解らなかつた。彼は考えた。

巴里で時々彼は職工を見た。十二軒横丁の路地にも住んでゐた。それからヂムナスのすぐ近くにあつて、度々彼が退け時間に覗いた事のある馬車のランプの工場からは、六時頃仕事のために

形の悪くなつた荒れた眞黒な手をして、油じみた茶葉服を着た大勢の人達が溢れ出した。

茶葉服を着なければならぬといふ考えが先づ第一に彼の胸を打つた。それから彼は、昔母親が『あれは職工、茶葉服の人達』と言つた調子と、往來で彼等の汚れた着物にさほるまいとした注意を思ひ出した。十九世紀に於ける職工の勢力と任務に就いてのラバサンドルの雄辯は、頭の中の此の微かな思ひ出に反し、でなければそれを薄くするものだつた。が彼がはつきりと悲しく捕へた事は、こゝからもその頂きの見えて居る森や、リヴアルの家や、母親迄、あんなにも苦勞して再び手に入れた、そして深く深く愛してゐるその母親を捨て、行かなければならぬといふ事だつた。

あゝ、一體彼女はどうかしたといふのか？ まはりの人達の言葉に耳も籍さず、何だつて何時迄も窓に居るのだらう。がさつきからもう彼女は無頓着な不動の姿勢ではなかつた。痙攣的な戦慄が彼女の全身を震はせてゐた。そして眼にかざしてゐた兩手は涙をかくすもののやうに下にさけられてゐた。して見ると遠く彼女が遙か彼方の陽が沈まうとしてゐる地平線、多くの夢と幻と愛と煙の消えて行く地平線の上に見たのはそんなにも悲しい物だつたのか？

『それでは僕行かなければならないのですか？』

子供は微かな、機械的と云つてもいい、聲で訊ねた。恰も彼の思ひ、彼にあつた唯一の思ひそのものに口を開かせたかのやうに。

この無邪氣な問ひに法廷のすべての人々は、憐憫の微笑を泛べながら顔を見合はせた。が窓の方からはけししい啜り泣きが聞えて來た。

『一週間したら出掛けやうな』ラバサンドルがあつさり返事をした『俺は永いこと兄貴に逢はない。おかげで昔の鍛鑛場の火でもう一度鍛へて來られるといふものさ。』

かう言ひながら彼は袖をまくり上げて、黥をした毛むくじやらの太い腕に力瘤を拵へた。

『とてもすばらしい！』

ドクトール・ヒルスが叫んだ。

が窓に立つて泣いてゐる女から眼を放さないでゐたダルチャントンは氣のない顔をしながら烈しく眉をひそめた。

『向ふへ行つてよろしい、チャック、そして一週間後に立つ支度をするのだ。』

子供に呟附けた。

チャックは臆をひしがれ、呆氣にとられて『一週間！ 一週間後……』と獨語を繰り返しながら下へ降りた。

入口の戸は開いて居た。彼は帽子もかぶらないまゝ、外へ飛び出して、友達の家へとエチオルのはづれまで駆けつけた。そしてドクツールが出て来たのに行き逢つて、手短かに事の次第を告げた。

ムツシウ・リヴァルは怒つた。

『職工だ！ 彼等はお前を職工にするつて！ それがお前の未來を考えると、いふ事なのか。よし／＼。俺が行つて話してやる。』

親切なドクツールは大聲で手眞似をしながらしやべり、幼いチャックは帽子もかぶらず願けたので、彼等が息をはづませながら村を通つて行くのを見た人達は言ひ合つた。

『オーネットに誰か病人があるだな。』

誰も病氣ではなかつた。醫師が来た時には皆してテーブルに着いてゐた。何故なら家の主人公

の胃の爲と、人々が退屈する場所では何處でもさうであるやうにいつも食事の時間が早いのだ。

どの顔も晴れやかだつた。夫ばかりか彼女の部屋から降りながらシャロットは階段の途中で唄をうたつてゐた。

『一言申したい事があるのです。ムツシウ・ダルチャントン。』

リヴァル老人は唇を震へさせながら言つた。

『それではドクツール！ 其處へお掛けなさい。今皿を持って來ます。食べながらお聞かせなさい。』

『いや、有難う！ 澤山です、それに私が貴方にそれから夫人にも——彼は這入つて來たシャロットに挨拶した——お話するのは全く内密の事なのですから。』

『貴方のお出でた理由はよく解つてゐます』ドクツールとの差向ひが有難くなかつた詩人は言つた『子供の事ですね。』

『さうです、その事です。』

『夫ならお話なさつてかまひません。此の人達はみんな知つてゐるのです。それに總べて私はう

しろめいた事をして居るのぢやありませんから。』

『ですが貴方……』

シャロットはいろいろの意味からこの皆の前での釋明を恐れて言葉を挿んだ。

『話して下さい、ドクツール。』

ダルヂャントンは冷やかに言つた。

片方はテーブルの正面に立つたまゝ始めた。

『チャックさんから、あの子はアンドレの鐵工所に見習ひにやられるのだといふことを聞きました。一體夫は眞面目な話なのですか？』

『頗る眞面目です。ドクツール。』

『お考えなさい』ムツシウ・リヴァルは怦へ怦へ言つた『あの子はそんな激しい仕事をするために育てられてゐないので。發育の最中に新しい世界、新しい雰圍氣の中に投げ込まうとしてゐられる。あの子の健康、あの子の生命を賭ける事ですぞ。あの子はさうした素質を少しも持つて居ません。十分強い事も無いのです。』

『あゝ！ お待ちなさい、君。』

ドクツール・ヒルスが嚴かに遮つた。

ムツシウ・リヴァルは肩を聳かして、彼には眼もくれないで續けた。

『夫人、私が夫を申し上げるのです。(彼はわざとシャロットに話しかけ、そして彼女は踏みにじられてゐた感情を再び喚び起させられて異様に心を悩ましてゐたのだ) 貴女の子供は決してあゝした生活に耐へられませんが。母親である貴方はあの子をよく識つてゐられる筈です。あの子はかよわくかほそくて、疲労に耐へる事が出来ないのを御存知です。それに私は此處で唯肉體上の苦痛の外語りません。があれほど天稟の才を持ち、その開發された智能は既にあらゆる學問のために準備を整へてゐる子供が、どうして其の總べての智的才能の強制的滅びと眠りに耐へられるでせうか。』

『貴方の考へは間違つて居ます』ダルヂャントンは苛々しながら言つた『私は誰よりもよく本人を識つて居ます。私は彼に勉強させました。彼は手工的の業以外には不適當なのです。彼の才能はたゞ夫だけです。そして私が其の才能を發達さすべき手段を授け、立派な職業を與へやうとす

れば、感謝をすることは家に泣言を言ひ、保護を求めに行くのだ！」

チャックは辯解しやうとした。が其の友達が代つて言つてくれた。

「あの子は泣言を言ひに来たものではありません。只貴方の定めた事を話したに過ぎないのです。で私は彼にかう言つたので、もう一度貴方の前であの子に向つて繰り返します。チャックよ、黙つてゐてはいけない。お前の両親、お前を愛してくれるお母さんと、彼女のためにお前を愛してくれる筈である母さんの夫の頭におすがり、二人にお頼み、歎願おし。お前を卑しい者にする、彼等の足の下に突き落さうと考えさせるやうな、一體何事をお前がしたかをお訊ね。」

『ドクツール！』ラバサンドルはテーブルがゆるぐほど拳骨で叩きながら怒鳴つた『工具は人を卑しめません。それを尊くするのですぞ。工具は世界の再建者です。十の時基督は鉋をふるつたではありませんか。』

『さういへばさうだわ。』

シャロットは呟いた。直ちに彼女は彼女のチャックが小さな鉋を携へた幼き耶穌の姿で聖體祝日の行列の中に歩いてゐる幻を見た。

「夫人、そのやうなくだらない事を真にうけてはいけません」ドクツールは火のやうに怒つて言つた『貴女の子供を職工にするのは、永久に貴女から引き離してしまふ事です。貴女があの子を世界の果に送つたにしても、貴女の魂、貴女の心をより遠く去りはしません。何故ならば距離にかゝはりのない接近の方法があるのです。が社會的位置の相違は永久にそれを破壊するのです。今に解ります、解るでせう。いつか貴女は彼があらくれた手を持ち、野卑な言葉を使ひ、全く異つた感情を持つのを知つて、貴女の前、母親である貴女の前に彼より高い身分の赤の他人の前に居るやうにして立つ彼を見て顔を染める日が来るでせう。』

まだ一語も言はずに食器戸棚の隅にかゝんでゐたチャックは注意深く耳を傾けてゐたが、母親と自分との間の免れ難い愛情の離反といふ事に忽ち胸を打たれた。

彼は室の真中に一歩踏み出し、聲を強めて、

『僕は職工になるのは厭です！』

きつぱりと言ひ放つた。

『お、チャック！』

シャロットは絶えも入りたい風情で言った。

今度口を開いたのはダルヂヤントンだった。

『あ、成程、貴様は職工になるのが厭といふのか！ どうだ。俺、此の俺がきめた事を厭だとか、厭ぢやあ無いと言ふ！ ああ！ 貴様は職工になるのは厭か。だが食べるのは厭ぢやないだらう。よし！ 俺はもう貴様は御免蒙る。圖々しい居候奴、若しも貴様が働らくのが厭なら、俺はもうこのさき貴様に嘗められてばかりは居ないぞ。』

彼は狂的な怒りから持前の冷静に還つた。

『部屋へ行きなさい』彼は言った『俺はどうするかを考える。』

『貴方がなすべき事は、ダルヂヤントンさん、私が言ひませう……』

がチャックはムツシウ・リヴアルの言葉の終りを聞かなかつた。ダルヂヤントンの身振が彼を外に逐ひ出したのだ。彼の部屋に上つた時、議論の聲はちやうどオーケストラの部分々々のやうに聞えて来た。彼はすべての聲を聞き分けた。すべてを識つてゐた。併し夫等は一一つが入りまぢつて響きを合し、調子の不揃ひの騒音をなして、たゞきれぐの言葉だけが聞き取られた。

『貴方は嘘を言つたのです。』

『皆さん！ 皆さん！』

『人生は小説ではないのだ。』

『神聖な茶葉服、プウ！ プウ！』

やがてリヴアル老人の叱咤の聲が入口の方で響きわたつた。

『もう決して此處には足を踏み入れませんぞ！』

それからけししい音を立てて戸がしまつた。食堂は静かになつて、フォークを忙しさに動かす音だけが聞えて来た。

彼等は食事を始めたのだ。

『貴方々は彼を卑しい者にさせ、足の下に突き落さうとするのです。』

子供は此の言葉を覚えてゐた。そして實際さうするのが敵の意志であると感じた。

いや、決して、決して、彼は職工になることを望まなかつた。

戸が開いた。母親が這入つて来た。

彼女は大層泣いたのだ。眞實の涙、皺を穿つところの眞實の涙でもつて。ついで無く、まことの母親がこの美しい女の顔の上に現はれてゐた。虐けられたなやめる母親が。

『お聞きなさい、チャック。』彼女はわざときびしく言つた『私は眞面目にお前と話をしなければならぬのです。お前はお前さんの眞實のお友達に反抗し、その人達が授けやうとした職業を厭だなどと言つて、母さんに大きな心配をかけたのですよ。そりや母さんも知つてゐます。この新しい生活には……』

彼女は話しながら、子供の視線、苦痛と非難の視線を避けやうとした。夫は彼女にはとても耐へられない、それははげしく、それは悲しいものだった。

『私達がお前のために考へて上げた新しい生活には、今日までお前が送つて来た夫と較べて大きな違ひがあります。母さんでさへもはじめて聞いた時にはほんとに恐しく思ひました。でもお前は皆が言つたことを聞いたでせう？ 労働者の位置といふものは昔のやうではないのです。お前がすつかりく變つて居るのです。職工の番がまはつて来たのですよ。中流階級の時代は過ぎた

のです。貴族ですよ。けれども貴族は……それにお前はまだ小さいのだから、お前を愛してゐる、そして経験のある人達のいふ通りになつてゐるのが一番いいではないの……』

子供の泣聲が彼女を遮つた。

『それなら母さんも追ひ出すの、母さんも僕を追ひ出すの？』

今度こそ母親はもう我慢が出来なかつた。彼女は彼を兩腕に抱へて強く抱きしめた。

『母さんがお前を追ひ出す？ お前はそんな事を考へてゐるの？ どうしてそんな事が出来るでせう？ さあ！ お落付き、お震へでない。そんなに亢奮するものぢやありません。私がどれだけお前を可愛がつて居るかは知つてゐるでせう。あ、若しも私一人の事だつたら、私達は決して決して離れたりはしないのですよ。でもね、道理を考へて、未來の事も少しは考へなければならぬの……あ……その未來も私達のためには闇なのだ。』

主君から離れた時には今でも度々出て来る饒舌の癖で、ためらひながら、言葉を切りながら、彼女は彼等の變則な境遇に就て説明しました。

『ねえ、チャックや、お前はまだほんとに小さいのだから、いろんな事がわからないのですよ。』

今にもつと大きくなつた時、母さんはお前の素性の秘密をすっかり教へて上げます。本當に小説なのだよ、お前！ お父さんの名前も、それから母さんとお前がどのやうな不思議な不幸の犠牲になつたかといふ事も教へて上げます。が今お前が知つて、解つて呉れなければいけないのは、私達には少しも財産が無いので、何も彼もあの方のおかけを蒙つてゐるといふ事ですよ……だから私は、お前を行かせる事にどうして反對出来るだらう、おまけにあの方はお前の利益のために行かせやうとなさるのだし、私はあの方に何も頼む事は出来ないのだよ、今迄にも私達のためにいろいろ盡して下さつたのだから、それにあの方自身もそんなに金持ではないのですよ。そればかりか、この恐しい文學者の生活のためにどれだけいりめがかかるだらう！ あの方はお前の教育の費用を出して下さるわけにはゆかないのだよ。母さんは間に這入つて一體どうしたらいいの？ でも何かにきめなければならぬ。ああ！ 若しも私がお前の代りに、そのアンドレといふのに行けたら！ 夫はお前の手に授けられた仕事なのだよ。お前はもう誰の助けも借りなくてよくて、自分で自分のパンが得られる、自分で自分の勝手に出来るといふ事を誇りたくはないの？

子供の眼の中を過ぎた稲妻を見て、彼女は彼の急所に觸れたと覺つた。そして低い穩かな世の母親獨りがもつ聲で囁いた。

『母さんの爲にそれをしておくれ、チャツクや！ ねえ！ 早く自分一人で生活されるやうになつておくれ。私だつても、いつか一度お前の助けを借りに行かなければならないかもしれないやしない。私のたつた一人の助け手、たつた一人の友達として。』

彼女は考へて夫を言つたのか？ それとも人自らの生活のあらゆる破綻と、運命の深奥を人々の眼に示す、未來そのものにはかな割目である豫感あつての事が、或ひは單なる感傷にまかせて、言葉の渦卷に捲き込まれながらかくは語つたものだったか？

とはいふものの、彼女はこの健氣な小さい魂を征服するのに、之に増したよき手段を見出す事は出来なかつたのだ。効果はまのあたりにあつた。彼の母が彼の助けを要する、彼が自分の働らきで彼女を助ける事が出来るだらうといふ考へが、直ちに彼に決心させた。

彼は彼女を見まもつた。

『母さんがいつも僕を可愛がる事、僕が眞黒な手をもつやうになつても恥しく思はないと云ふ事

を約束して頂戴。』

『どうして母さんがお前を可愛がらずに居られやう！ 私のチャックや！』

すべての言葉のかはりに彼女は彼を愛撫もて包んだ。接吻のかけにその懊惱と悔恨をかくしながら。

何故ならばこの時からといふもの、彼女は後悔に責められたのだ。それでその後の一生涯子供
の事を憶ふ時、又で胸を抉られない事は無かつたのだ。

が彼はこの抱擁が羞恥と、躊躇と、恐怖もて包み蔽ふてゐるところのすべての物を覺つてゐる
かのやうに、やがて振りもぎつて階段の方へ行つた。

『さあ、母さん降りませう。承知した事を言ひに行きませう。』

階下では落伍者共がまだ食卓に着いてゐた。皆は、這入りながらチャックが見せてゐた謹嚴な
確乎たる態度に眼を瞠つた。

『御免なさい』彼はグルヂヤントンに言つた『先刻言ふ事をきかなかつたのは僕が悪かつたの
です。仰る通りにします。有難う御座いました。』

『うん、偉い！』詩人は莊重らしく言つた『俺は熟考の結果がどうなるかを知つてゐた……お前
が俺の正しい意志を解つてくれたのは喜ばしい。ラバサンドル君にお禮を言ひなさい。お前のこ
の幸運はこの人のおかげだ。お前の未來への門を開いてくれたのはこの人だ。』

音楽家は彼の太い手を差し伸べて、チャックの小さな手はその中に吞まれてしまつた。

『よし來た！ 兄貴！』

彼はまるで、二人が同じ工場で、同じ仕事を働いてゐる昔馴染の仲間だといふ風に、かう言つ
た。そしてこの時から出立の日迄、彼は職工達がお互の親交の絆みたいに用ひて居るところの、
此の打ち解けた荒つほい調子で話しかけるよりしなかつた。

此の最後の一週間、チャックは森や街道を歩き廻つてばかり居た。彼は悲哀よりも以上に懊惱
と不安に苦しめられた。そして時々將來の責任に就いて考へては、その美しい顔の上に今迄嘗て
無かつた表情、年若い人々にあつては、その意志の力を現はすところの眉の間の皺を寄せるのだ
つた。

今では彼は老ひたるチャックだつた。彼は過ぎ去つた若い日の巡禮に行く人のやうに、愛した

場所のすべてを見に行つた。

あゝ！ サレ婆さんが遠くからどんなに彼を脅かし、後を追つたにしても、老ひたるチャックはもはや少しも恐れなかつた。そして彼女のために、その薪を背負つてやらうといふ勇氣をさへ感じたほどだ。ガセシルに別れを告げにリヴァルの家に行く事が出来ないのが、その大いなる悲しみだつた。

『ねえ、チャックや、あんな騒ぎがあつた後だから駄目でせうよ。』

息子の歎願の度毎に、シャロットはかう繰り返すだけだつた。

がたう／＼出發の前日、その勝利の喜びの邪惡な心から、ダルチャントンは、子供が彼の友達に暇を告げに行くのを許した。が行つたのは夕方だつた。玄關には誰も居ない。薬部屋も雨戸がしまつて誰も居なかつた。僅かに光の條が圖書室から洩れてゐた。圖書室といふのは、字引や、地圖や、醫學書や、脊の赤いパンクイクの叢書が一杯つまつてゐる廣い屋根裏だ。

ドクツールは其處で熱心に荷作りをしてゐた。

『あゝ、來たね！』彼は子供に言つた『俺はちやんと、お前が左様ならを言はないで行きはし

ないといふ事を知つてゐたよ。よこしてくれなかつたのだらう、ねえ！だがそれには俺にも罪がある、俺も云ひ過ぎたのだ。お婆さんからさんざ叱られたよ……さういへば彼女は昨日あの娘と一緒に他所へ行つた。ピレネーの俺の妹の家へ一月ほど保養に遣つた。あの子が少し加減が悪いのだ。お前の行く事をいきなり有の儘に言つてしまつたのが悪かつたのだ……あゝ！子供達……何も解らないと思つてゐると、我々以上に激しく心を悩ます。』

彼は今チャックにまるで大人に向つて話すやうに言つてゐる。それなのに、彼の幼い友達が彼のために病氣になつた事、彼女に逢はずに行かなければならない事を考えて、老いたるチャックは子供みたいに泣きたいやうな心持になつた。彼はちらばつてゐる本と、テーブルの隅のグロツグとブランデーの瓶のそばに置かれた蠟燭の淡い光に照らされてゐるこの廣い陰氣な部屋を眺めてゐた。

ムツシウ・リヴァルは妻君の留守を利用して艦上生活の昔の習慣を取り戻したのだ。それで彼は眼を輝かしながら異常な熱をこめて埃を息でふき／＼、すべての本をかきまはして、せつせと足許の箱に詰めてゐる。

『何をしてゐるか解るか？』

『い、え、ムツシウ・リヴァル。』

『俺はお前の本、お前がもつてゐて読む本を選んでゐるのだよ。い、かい、一分でも暇があつたら読むのだよ。この事をよく覚えておいで、「書籍は眞實の友なり。」人は人生の大きな苦痛に悩んでゐる時、書物といふ彼等に話しかける事が出来る。何時でも夫を見出す事が出来る。まづ俺にしても、あゝした不幸を受けてから、若し本が無かつたらもうとつくにこの世から居なくなつてゐたらう。此の箱を見ておくれ、澤山あるだらう、えエ！……今はまだお前にすつかりは解らないが、そんなことはかまはない、読みさへすればいいのだ。読んで解らない物であつても、お前の頭の中に光を残すだらう。それを讀むと約束しておくれ。』

『お約束します。ムツシウ・リヴァル！』

『ほら！ 荷作りが出来た。持つて行かれるかい。いやとても重い。明日持たして上げやう。さあ！ お別れを言はなければならぬのか。』

そして此の善良な人物は彼の頭をその大きな手で抱へながら、二度三度強く接吻をした。

『セシルの分も這入つてゐるのだよ。』

やさしい微笑を泛べながら附け加へた。そして戸をしめた時、ヂャックは彼がかう呟いてゐるのを聞いた。

『不憫な子！……不憫な子供！……』

ちやうどゾオデラールの修道院學校の時と同じだ。たゞ彼は今何故人がそんなにも自分を憫れむかを知つてゐるのだ。

翌日は出發の日で、オーネットは大層なざはめきだつた。

門に待つてゐる車に荷物を積んで、ラバサンドルはまるで南阿米利加の大草原の跋涉でもするやうな奇妙な扮装で、高いゲートル、青天鷲絨の脊廣、鏝廣の帽子に鞆を肩からかけ、音聲を試みながら往つたり來たりしてゐる。詩人は嚴かに且喜ばしけだつた。嚴か、何故なら彼は自分のした事は人道的社會的義務の實行であると考えたからだ。喜ばしけ、何故ならこの出發は彼のため限りなき満足であつたからだ。

シヤロットはヂャックを抱擁した。もう一度抱擁した。そして足りない物はないかと眺めた。

いや、何も足りなくはなかつた。成長盛りに小さすぎる服を着せられてゐる發達の早い子供の憂目を見ながら、祝別パンの日の窮屈な着物で、却つて職工には勿體ないほど着飾り過ぎてゐた。

182

『よく氣をつけてやつて下さいよ、ラバサンドルさん！』

『自分の喉ほども氣をつけますよ、夫人。』

『チャックや！』

『母さん！』

今一度最後に抱き合つた。シャロットは泣いてゐた。チャックは感動を見せなかつた。母親の爲に働らきに行くといふ考へが、この老ひたるチャックを強いものにしたのだ。

道を下りきつて彼はふり返つた。森と家と庭と、そして涙の中で彼に微笑んでゐるこの女の顔をもう一度見、そして眼の底に留めて行くために。

『度々手紙をおくれよ、チャックや。』

母親が叫んだ。

それから詩人は嚴かに、

『チャック、よく覚えてゐるのだぞ、人生は小説ではない。』

人生は小説ではない、がこの男の一生はそれだつた。

まあ、見るがい。銘句を掲げた小さな家の入口の薔薇の木の下に、まるで何かの戀物語の石版刷のやうな厭味な風で、彼のシャロットにもたれながら、自我の満たされた喜びに憎悪を忘れて、父親らしい親切ごかしのアデュウを、彼が今家から追ふた子供に送つてゐるのだ。

(前篇終り)

大正十三年九月十日印刷
大正十三年九月二十日發行

私生兒

定價金貳圓



著者 八木 さ わ 子

發行者 東京市外日暮里谷中本十八
佐藤 三 郎

印刷者 東京市牛込區皇稻田鶴卷町四百三番地
谷口 熊 之 助

發兌
發賣

東京市外日暮里谷中本十八
振替東京四參八八七番
東京市神田區錦町一の十九
振替東京六四〇五九番

新 作 社
文 行 社

〔社 茲 八 所 刷 印〕

辻潤 著

ですべら

四六版三百頁上製
定價金壹圓八拾錢
書留送料金拾八錢

『ですべら』と云つたツテアンペラやウスツペラの親類ではない。己れのボンクラと無能
とに食傷した自稱ダガイストの文集である。丸ビルやマルクスを知らないでもダダを知ら
ないことは毫も諸君の恥辱ではない、ダガ明日の生活意識はダダに熟してゐる、絶望の奈
落から出産した愉快なダダの福音を聴け！ (著者)

内容 ◇ですべら ◇ダダの話 ◇ぶろむなあとさんちまんたる ◇文學以外 ◇らぶ
そでいやほへみあな ◇あびばつち ◇わりあちおん ◇ふもれすく ◇陀々羅
断語 ◇享樂の意義 ◇きやぶりんすぶらんたん ◇ぐりんぶすDADA

發兌

東京市外日暮里谷中本拾八
振替口座東京四參八八七番

新 作 社

岡本綺堂 半七捕物帳

好評 八版

第壹輯

内容 ◇お文の魂 ◇石燈籠 ◇湯屋の
二階 ◇春の雪解 ◇猫騒動 ◇お
化師匠 ◇筆屋の娘 ◇帯取の池
朝顔屋敷 ◇勘平の死
四六判四百頁 定價金貳圓廿錢
上製布装箱入 送料十二錢

好評 七版

第貳輯

内容 ◇雪達磨 ◇山祝の夜 ◇津の國
屋 ◇半鐘の怪 ◇辨天娘 ◇廣重
と河瀬 ◇奥女中 ◇鷹のゆくへ
四六判三百五十頁 定價金貳圓
上製布装箱入 送料十二錢

忽ち 五版

第參輯

内容 ◇半七先生 ◇化銀杏 ◇鬼娘 ◇
少年少女の死 ◇雷獸と蛇 ◇狐
と僧 ◇旅繪師 ◇お照の父 ◇向
島の寮
四六判三百餘頁 定價金貳圓
上製布装箱入 送料十二錢

發兌

東京日暮里 振替東京四三三八七番
谷中本十八 振替長野三〇九三番

新 作 社

松崎天民先生著

好評 六版

四十男の悩み

四六版五百廿頁假製
定價金壹圓九十錢
書留送料十八錢

四十男の悩み―さうだ、誰しも一度は迎らねばならぬ人生の峠路に喘ぎながら、著者は先づ自分自身の姿を見た。同時に世の中を見た、都會を見た、田園を見た、女を見た、苦しい生活の痛みを見た。こんな平明卒直に、こんな面白く、人生の實感を記録した本が、ほかに有らうとは覺えぬ。隨筆の風味もある、感想録の氣分もある、然かも全體を通じて、一家のヒューマンドキュメントとしての強い實感である。その交情いよゝ圓熟大成して、一家の風格を具へ來つた著者が、甦生の世に問ふ最初の報告書である。

- 内容
- ◇四十男の悩み
 - ◇禁酒してから
 - ◇神經衰弱の頃
 - ◇九死に一生を
 - ◇酒から寫眞へ
 - ◇東京の十五年
 - ◇東京を謳歌す
 - ◇東京に住む者
 - ◇新聞人の苦惱
 - ◇新聞よまひ言
 - ◇一人記者の復命
 - ◇故人の味世間味
 - ◇故郷の思ひ出
 - ◇友人の家への死
 - ◇郷里の友人へ
 - ◇吉原遊郷の事
 - ◇千日前と淺草
 - ◇生活その日頃
 - ◇或る年の記録
 - ◇歳末その言

東京市外日暮里谷中本拾八
振替口座東京四參八八七番

新 作 社

~~529~~
~~105~~

S.